

鳥取県米子市

SU WA HIGASHI CHI N GO BARA  
**諏訪東チンゴ原遺跡**

SU WA NISHI DO TORI BA  
**諏訪西土取場遺跡第1・2次調査**

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU YONA GO MICHIBATA NO NAKA  
**坂長米子道端ノ中遺跡**

2008.3

財団法人 米子市教育文化事業団

鳥取県米子市

SU WA HIGASHI CHI N GO BARA  
**諏訪東チンゴ原遺跡**

SU WA NISHI DO TORI BA  
**諏訪西土取場遺跡第1・2次調査**

鳥取県西伯郡伯耆町

SAKA CHOU YONA GO MICHIBATA NO NAKA  
**坂長米子道端ノ中遺跡**

2008. 3

財団法人 米子市教育文化事業団

## 序

米子市は鳥取県の西部、日本海側に位置し、山陰の商都と称される鳥取県西部の中核都市です。

本書は平成17・18年度に実施した、米子市諏訪東チンゴ原遺跡、諏訪西土取場遺跡、西伯郡伯耆町坂長米子道端ノ中遺跡の発掘調査報告書です。

諏訪東チンゴ原遺跡は、平成16年度に調査を実施した諏訪南山崎遺跡の南丘陵上に位置する遺跡です。この調査では、縄紋時代晚期から弥生時代中期、奈良時代から中近世の遺物が出土し、付近に当該期の遺跡が存在することが判明しました。

諏訪西土取場遺跡は、縄紋時代の落し穴のほか、奈良時代の大型建物跡や鉄器製作を窺わせる資料が出土し、古代会見郡衙に関連する遺跡ではないかと考えられます。また、平成18年度に実施した調査では、新たに3基の落し穴が存在することが明らかとなりました。

坂長米子道端ノ中遺跡は、諏訪西土取場遺跡に隣接する遺跡で、ここからは近世末期に開削された佐野川用水の旧流路を確認しました。今回の調査は、佐野川用水について考古学的な分野から行われた初めての調査であり、開拓者たちの足跡を示す具体的な資料を得ることが出来ました。

これらの成果が、今後の調査研究や歴史教育の資料として、広く活用されることができれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査を実施するにあたって、多大なご理解とご協力を頂きました地元の方々を始め、ご指導、ご支援を賜りました方々、関係各位に心から御礼申し上げます。

平成20年（2008年）3月

財団法人 米子市教育文化事業団  
理事長 小林道正



## 例　　言

1. 本報告書は、平成17、18年度に一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事に伴う発掘調査で、鳥取県の依頼により実施した「諏訪東チング原遺跡」「諏訪西土取場遺跡第1次・2次調査」「坂長米子道端ノ中遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 諏訪東チング原遺跡の所在地は、鳥取県米子市諏訪字東チング原、諏訪西土取場遺跡の所在地は、米子市諏訪字西土取場、坂長米子道端ノ中遺跡は、鳥取県西伯郡伯耆町坂長字米子道端ノ中である。
3. 本報告書における方位は真北を示し、レベルは海拔標高を示す。
4. 本報告書第3図の地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「米子」を使用した。
5. 自然科学分析について、年代測定を古環境研究所に、鉄闘連遺物の分析を九州テクノリサーチ・TACセンターに委託した。また、鉄闘連遺物の観察表作成を穴沢義功氏に委託した。
6. 本報告書は、第1章、第3章、第5章を高橋浩樹が執筆し、その他は佐伯純也が執筆、編集した。
7. 発掘調査によって作成された図面、写真、出土遺物は、米子市教育委員会によって保管されている。
8. 現地調査及び報告書の作成には、多くの方々からご指導、ご支援を頂いた。明記して感謝いたします。（敬称略）  
穴沢義功、家塙英詞、伊藤創、大澤正己、小口英一郎、加藤裕一、河合章行、  
北浦弘人、君嶋俊行、国田俊雄、坂本嘉和、高橋章司、玉木秀幸、中森祥、  
西尾克己、野田真弓、野口良也、森本倫弘、山桥雅美

## 凡　　例

1. 発掘調査時、及び現地説明会において使用した遺構名、番号は、報告書作成時に変更している。

2. 遺構の略称は以下のとおりである。

諫訪東チング原遺跡「SWHT」

諫訪西土取場遺跡第1次調査「SUW-NDT」

諫訪西土取場遺跡第2次調査「SUW-NDT2」

坂長米子道端ノ中遺跡「KSGY」

3. 本報告書における遺物・遺構番号は次のように記す。

Po：土器、土製品、陶磁器、瓦 S：石器、石製品 なし：鉄関連遺物

P：ピット

4. 本文中、挿図中及び写真図版の遺構・遺物番号は一致する。

5. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、それ以外は断面白抜きで表示した。

6. 遺物実測図の縮尺は、土器、陶磁器が4分の1。石器が1分の1、4分の1、6分の1、8分の1。鉄関連遺物が2分の1である。

7. 写真図版に掲載されたソフトエクス写真は、鳥取県埋蔵文化財センターのX線撮影装置を借用して撮影した。

8. 鉄関連遺物の番号のうち（ ）で表示された番号は、2006年『長者屋敷遺跡・坂長下屋敷遺跡』鳥取県教育文化財団の第5章「鉄関連遺物の調査」に掲載された遺物の構成番号と続き番号である。

# 目 次

序

例言、凡例

目 次

## 第1章 経過（高橋）

第1節 調査の経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	1
第3節 整理作業の経過 .....	2
第4節 調査及び報告書作成の体制 .....	2

## 第2章 遺跡の位置と環境（佐伯）

第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	6

## 第3章 諫訪東チング原遺跡の調査の方法と成果（高橋）

第1節 調査の方法 .....	11
第2節 遺跡の層序 .....	13
第3節 検出した遺構 .....	15
第4節 出土遺物 .....	24
第5節 小結 .....	24

## 第4章 諫訪西土取場遺跡の調査の方法と成果（佐伯）

第1節 調査の方法 .....	27
第2節 遺跡の層序 .....	27
第3節 縄紋時代の調査 .....	29
第4節 奈良時代の調査 .....	33
第5節 遺構に伴わない遺物 .....	52
第6節 鉄関連遺物 .....	60

## 第5章 坂長米子道端ノ中遺跡の調査の方法と成果（高橋）

第1節 調査の方法 .....	83
-----------------	----

第2節 遺跡の層序 .....	84
第3節 検出した遺構と遺物 .....	86
第4節 遺構に伴わない遺物 .....	93
第5節 小結 .....	93
第6章 諏訪西土取場遺跡第2次調査の方法と成果（佐伯）	
第1節 調査の方法 .....	95
第2節 遺跡の層序 .....	95
第3節 検出した遺構 .....	95
第4節 遺構に伴わない遺物 .....	95
第5節 小結 .....	95
第7章 理化学的分析	
第1節 諏訪西土取場遺跡出土試料の放射性炭素年代測定（株式会社 古環境研究所）	
.....	99
第2節 坂長米子道端ノ中遺跡出土試料の放射性炭素年代測定 （株式会社 古環境研究所）	
.....	101
第3節 諏訪西土取場遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 （九州テクノリサーチ・TACセンター）	
.....	103
第8章 総括（佐伯）	
1. 繩紋・弥生時代 .....	121
2. 奈良・平安時代 .....	121
3. 近世・近代 .....	122
4.まとめ .....	122
写真図版	
報告書抄録・要約	

# 第1章 経過

## 第1節 調査の経緯

本発掘調査は、鳥取県が進める一般国道181号（岸本バイパス）道路改良工事を原因とし、鳥取県米子市諏訪地内と西伯郡伯耆町坂長地内の工事予定地内に存在する埋蔵文化財について実施したものである。岸本バイパスは米子市八幡の国道181号から分岐し、同市諏訪、伯耆町坂長を経て伯耆町吉定で国道181号に合流するものである。

工事予定地内は周知の遺跡として周知されていないが、工事予定地が位置する台地上は遺跡の密度が濃く、さらに工事予定地は会見郡衙推定地にも近いことから、当該地でも遺跡の存在が予測された。そこで米子市諏訪地内を平成16年度（2004年度）に米子市教育委員会が試掘調査を行い、諏訪東チング原遺跡と諏訪西土取場遺跡ではピットを検出し、土師器と須恵器が出土した<sup>〔注1〕</sup>。また、西伯郡伯耆町坂長地内を平成16年度（2004年度）に伯耆町教育委員会が試掘調査を行い、幕末に開削された旧佐野川用水路跡を確認した<sup>〔注2〕</sup>。

この結果を受けて、鳥取県西部総合事務所は米子市教育委員会文化課、伯耆町教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づく発掘通知を鳥取県教育委員会教育長に提出した。その後、鳥取県教育委員会教育長より事前発掘調査の指示を受けた鳥取県西部総合事務所は、発掘調査を財団法人米子市教育文化事業団に委託した。これにより平成17年度（2005年度）に財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を担当することになり、財団法人米子市教育文化事業団理事長から鳥取県教育委員会教育長に文化財保護法第57条第1項に基づく発掘調査届を提出した。

平成18年度には、工事予定地内を横断する米子市道部分についての遺跡の取り扱いが問題となつた。鳥取県と米子市では、隣接地の調査成果から当該地に遺跡が存在する可能性が高いと考えられたため、平成17年度に引き続き財団法人米子市教育文化事業団が発掘調査を行った。

## 第2節 発掘調査の経過

平成17年度（2005年度）は、現地の発掘調査と一部の整理作業を行った。

調査対象となる遺跡は、諏訪東チング原遺跡、諏訪西土取場遺跡、坂長米子道端ノ中遺跡の3遺跡であり、調査はまず、平成17年（2005年）10月から工事が行われる予定である諏訪東チング原遺跡から着手した。諏訪東チング原遺跡の調査は7月上旬には終了したが、諏訪西土取場遺跡と坂長米子道端ノ中遺跡は隣接地で水田耕作が行われており、水田の水が調査地に漏水するなどの問題があるために、この2遺跡については諏訪東チング原遺跡の調査終了後に継続して調査を行わず、隣接する水田が中干しのために水を抜いた後に調査を行うこととした。諏訪西土取場遺跡の調査は8月、坂長米子道端ノ中遺跡の調査は10月から着手した。

諏訪東チング原遺跡の調査は平成17年（2005年）6月6日から着手した。6月6日からは重機により表土掘削を行い、6月7日からはこれと並行して人力により堆積層の掘り下げを行った。

現地の調査は、平成17年（2005年）7月8日に完了した。

諏訪西土取場遺跡の調査は、平成17年（2005年）8月22日から着手した。8月22日からは重機による表土掘削と並行して人力による堆積層の掘り下げを行った。

現地の調査は、平成17年（2005年）10月18日に完了した。

坂長米子道端ノ中遺跡の調査は平成17年（2005年）10月3日から着手した。10月3日からは重機により表土掘削を行い、10月4日からはこれと並行して人力により堆積層の掘り下げを行った。

平成17年（2005年）12月16日には、鳥取県西部総合事務所から調査依頼された範囲（1区）については、調査を完了したが、1区の調査結果から遺跡の範囲がさらに南側に広がることが想定され、調査範囲を南側に広げる必要性が生じた。そこで、米子市教育委員会文化課は、再び鳥取県西部総合事務所と伯耆町教育委員会と協議を行い、南側に調査範囲を広げて調査を行うことになった。調査範囲を広げる部分は、鳥取県西部総合事務所から調査依頼された当初の範囲外であることから、改めて文化財保護法第57条第1項に基づく発掘届を鳥取県教育委員会教育長へ提出した後、鳥取県西部総合事務所から委託を受けて、引き続いだり財團法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が調査を担当することになった。

調査は平成18年（2006年）1月16日から着手した。1月16日からは重機により表土掘削を行い、1月16日からはこれと並行して人力により堆積層の掘り下げを行った。

現地の調査は、平成18年（2006年）1月20日に完了した。

なお、諏訪西土取場遺跡と坂長米子道端ノ中遺跡1区の調査が終了した時点で、両遺跡の空中写真撮影を行い、平成17年（2005年）11月26日には諏訪西土取場遺跡と坂長米子道端ノ中遺跡1区について現地説明会を開催し、約120名の参加を得た。

平成18年度に実施した諏訪西土取場遺跡の第2次調査は、平成19年1月25日から着手した。調査は、遺構検出作業、測量作業などを行い、落し穴などの遺構を検出し、2月26日に完了した。

### 第3節 整理作業の経過

平成17年度（2005年度）は、現地の調査と並行して一部の遺物の洗浄、注記、実測を行った。

平成18年度（2006年度）は、平成17年度（2005年度）の残りの整理作業及び報告書作成を行い、4月から整理作業に着手した。まず、出土遺物の洗浄、注記を行い、その後、器種、出土遺構、出土層位ごとに分別し、土器の接合、形態分類を行った。そして、実測遺物を抽出した後、実測、トレース、写真撮影を行った。また、遺物整理と並行して、遺構図面の整理、下図の作成、遺構図のトレース、図版の作成、報告書原稿の執筆を行った。

平成19年度（2007年度）は、諏訪西土取場遺跡の第2次調査の整理事業を実施し、遺物の実測、トレース作業を行い、報告書の編集作業を経て、平成20年3月末日までに報告書を刊行した。

註1 下高瑞哉 2005年『米子市内遺跡発掘調査報告書』米子市教育委員会

註2 試掘調査現場を実見させていただいた。

### 第4節 調査及び報告書作成の体制

発掘調査は、財團法人米子市教育文化事業団が鳥取県西部総合事務所から委託を受け、平成17年度（2005年度）に第1図の範囲を対象として、調査員2名、嘱託職員1名の体制で実施した。平成18年度は、調査員2名、嘱託職員1名の体制で、諏訪西土取場遺跡の第2次調査と出土遺物の整理及び報告書の作成を実施した。平成19年度は、諏訪西土取場遺跡2次調査の報告書の執筆と編集作業を調査員1名の体制で実施した。

## 調査体制

平成17年度（2005年度）

調査主体 財團法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 足立 操（米子市教育委員会教育長）

専 務 理 事 小林道正（財團法人米子市教育文化事業団事務局長）

### 埋蔵文化財調査室

室 長 比企 裕（米子市教育委員会文化課長）

主任調査員 平木裕子

非常勤職員 田中昌子

調査担当 主任調査員 高橋浩樹

調 査 員 佐伯純也

嘱 托 職 員 秦 美香

平成18年度（2006年度）

調査主体 財團法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 小林道正（財團法人米子市教育文化事業団事務局長）

専 務 理 事 小林道正（兼任）

### 埋蔵文化財調査室

室 長 長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）

主任調査員 平木裕子

非常勤職員 田中昌子

調査担当 主任調査員 笹尾千恵子

調 査 員 佐伯純也

嘱 托 職 員 森田静香・秦 美香

平成19年度（2007年度）

調査主体 財團法人 米子市教育文化事業団

理 事 長 小林道正（財團法人米子市教育文化事業団事務局長）

専 務 理 事 小林道正（兼任）

### 埋蔵文化財調査室

室 長 長谷川明洋（米子市教育委員会文化課長）

統括調査員 平木裕子

非常勤職員 田中昌子

調査担当 主任調査員 佐伯純也

嘱 托 職 員 森田静香・秦 美香

調査指導・管理・協力 米子市教育委員会

伯耆町教育委員会

第1図 遺跡位置図（1）



## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

遺跡が所在する長者原台地は、米子市と伯耆町、南部町にまたがる、南北4km、東西2kmの範囲に広がっている。台地の縁辺部は、東西に伸びる多数の谷によって開析されており、台地に直交する形で舌状の尾根が連続する地形となっている。台地の基盤は、大山の降下火山灰がベースとなっており、表層に火山に起因すると見られる黒ボクが堆積している。また、諏訪西山ノ後遺跡からはATが検出されており、広域火山灰の堆積も一部では認められる。遺跡の周辺は、整備された水田が広がっており、穀倉地帯ともいべき景観が広がっている。また、一部には畑地や果樹林が分布するが、山林の占める割合は少なく、丘陵斜面の一部にみられる程度である。

遺跡の所在地は、諏訪東チング原遺跡が、平成16年に調査を実施した諏訪南山崎遺跡の南丘陵上標高45m付近に位置する。地形的には、丘陵斜面に位置しており、近世以降に行われたほ場整備などにより、平坦な地形へと変化している。

諏訪西土取場遺跡と坂長米子道端ノ中遺跡は、道路によって米子市と伯耆町に分かれているが、一連の遺跡と考えられる。両遺跡は、坂中集落から北へ伸びる丘陵上、標高52m付近の地点に位置しているが、坂長米子道端ノ中遺跡は、昭和50年代に行われたほ場整備により、遺跡の上面が削平されてしまい、すでに漸移層までが削り取られた状態であった。また、諏訪西土取場遺跡についても、遺跡の北側部分がほ場整備により削平され崖状になっているが、遺跡上面についてはほ場整備が行われず、近世以降の水田地形がそのまま保存されていたと考えられる。



第2図 遺跡位置図（2）

## 第2節 歴史的環境

### 旧石器時代

旧石器時代には、米子市淀江町原畑（63）や、泉中峰遺跡（58）のような、大山山麓の丘陵上において、ナイフ形石器の出土事例をいくつか見出すことが出来るが、原位置をとどめない状況で確認された資料が主体であり、石器製作に伴って形成されるブロックを持つ資料はこれまで確認されていなかった。ところが、平成15年に大山町門前第2遺跡（93）から、A T層の下位より、黒曜石製のナイフ形石器を含むブロックが確認され、鳥取県内でもナイフ形石器文化期の良好な資料が存在することが明らかとなった。また、平成16年には諏訪西山ノ後遺跡（3）からナイフ形石器がローム層中より出土し、この長者原台地上にも旧石器時代の遺跡が存在することが証明された。一方、細石刃文化期の資料は、南部町龍徳遺跡や琴浦町笠見第3遺跡等において知られており、旧石器時代に生活していた人々の足跡を辿ることが出来るが、いまだ全容を解明するには至っておらず、不明な点が多く残されている。

### 縄紋時代

縄紋時代の資料については、草創期に該当する時期の資料は鳥取県内ではいまだに出土しておらず、不明であるが、尖頭器の出土例が奈喜良遺跡（25）、伯耆町貝田原遺跡（48）、大山町荘田（86）などで見られることから、旧石器時代から縄紋時代草創期にかけての時期においても、各地で活発な狩猟活動が行われていたものと考えられる。早期には、上福万遺跡（51）から押型紋土器が、前期には目久美遺跡（35）、陰田第9遺跡（31）において西川津式段階の資料が豊富に出土している。中期から後期段階の資料は少ないが、晚期頃には南部町口朝金遺跡（8）をはじめとして、古市遺跡群（26）など、内陸低地部への集落の拡散が顕著に認められる。遺構に関しては、落とし穴状の土坑が青木遺跡（45）や妻木晩田遺跡（81）などから多量に確認されているが、そのほかの貯蔵穴や住居跡などの遺構は、資料数が少なく全容は不明である。

### 弥生時代

弥生時代前期の集落は、目久美遺跡において水田域が確認されているが、集落の本体については調査が及んでおらず、実態は不明である。おそらく、低湿地に面する微高地か、丘陵斜面に集落が存在したものと考えられる。また、弥生前期には、丘陵上に環壕を伴う遺跡が南部町諸木遺跡（10）、天王原遺跡（9）、今津岸の上遺跡（80）、大山町大塚塚根遺跡（88）などで見つかっている。墳墓については、諏訪遺跡群別所地区で前期の土壙墓群が見つかっているが、これに伴う集落は見つかっていない。中期前葉には、目久美遺跡、長砂第1遺跡（38）、古市河原田遺跡（26）、今津岸の上遺跡（88）、大山町上野遺跡（87）などでまとまった土器の出土が見られるが、集落の全容を窺える資料は今のところ見つかっていない。中期中葉には、青木遺跡（45）において集落活動が開始され、徐々に範囲を拡大していくが、諏訪地区においては、後期まで顕著な生活痕跡は認められず、長者屋敷遺跡（5）において土坑が見つかっている程度である。弥生中期後葉からは集落の検出例が増加し、集落の立地が丘陵部へと移動していく。妻木晩田遺跡や陰田第6遺跡などが顕著な事例であるが、周辺の弥生遺跡に共通して認められる現象である。後期には、諏訪西山ノ後遺跡において集落が営まれるほか、越敷山遺跡

群（7）、別所地区、上安曇地区などにも集落が展開し、長者原台地の各所において、まとまった居住単位が形成される。また墳墓に関しては、陰田第6号遺跡（29）や、妻木晚田遺跡、尾高浅山遺跡（54）、日下古墳群（53）、日原6号墓（42）などで確認されているが、集落遺跡の数と比較して少なく、その実態は不明な点が多い。

### 古墳時代

古墳時代前期には、弥生時代後期に引き続いて集落が拡大し、福市遺跡（44）、青木遺跡（45）、妻木晚田遺跡などで最盛期を迎えるが、古墳時代中期を境に集落から墓域へと変化していく事例が多い。これは青木遺跡にも認められる現象であるが、集落の移動を伴う変化があったことを窺わせる資料である。また逆に古墳時代後期には集落活動が不明瞭であり、中心的な集落を抽出することも難しくなる。調査地の周辺では、諏訪西山ノ後遺跡において、前期の集落が広がっているほか、坂長村上遺跡においても堅穴住居が確認されており、周辺にも小規模な集落が分布しているものと考えられる。

古墳群の分布は、丘陵の端部に位置するものが多く、樋ノ口古墳群や横穴式石室を持つ前方後円墳である別所1号墳などが該当する。これら周辺の古墳については、調査された例が少なく、全容が判明している事例は少ないが、大正13年に刊行された『因伯二国に於ける古墳の調査』に、幡郷村（現米子市諏訪）出土の鏡が掲載されており、調査地付近にかつて存在した古墳からの出土品として紹介されている。この鏡は、明治20年頃に箱式石棺内から出土したものとされており、現在、坂長米子道端ノ中遺跡の西100mの地点にある墓地がその出土地点ではないかと考えられるが、は場整備により周辺の環境は激変しており、かつて古墳があったという状況は認められない。また、調査地の周辺には、現在でも古墳状の高まりが数箇所で認められるが、すでに場整備によって削平され、埋没している古墳も多く分布しているものと考えられる。

### 古代

奈良時代以降には、調査地付近に古代会見郡衙が存在したものと推定されており、候補となる遺跡が長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡（6）で見つかっている。長者屋敷遺跡では、大型の掘立柱建物と、周囲を囲む溝が確認されている。また、坂長下屋敷遺跡からも大型の掘立柱建物が見つかっているほか、北に隣接する諏訪東土取場遺跡からも掘立柱建物が見つかっている。近隣には、大寺廃寺（8）や坂中廃寺（7）などの奈良時代の遺跡が集中しており、広範な範囲に奈良時代の遺跡が分布している状況が窺える。

周辺の遺跡では、諏訪西山ノ後遺跡から掘立柱建物と、それに付随すると見られる土坑から、胞衣埋納遺構が検出され、土器の中から、和銅開宝、鉄鋤、刀子、墨挺状の炭化物が出土している。特に山陰地方では、唯一の和銅開宝出土遺跡であり、付近に所在した会見郡衙に関連する人物の屋敷跡と考えられている。また、さらに北に位置する青木遺跡でも奈良時代の集落が見つかっており、長者原台地の各所に当該期の集落が分布しているものと考えられる。

### 中世～近世

中世には集落の検出例が少なく、顕著な遺構は確認されていない。諏訪遺跡群では、中原地区や諏訪南山崎遺跡において、地下式の横穴が作られているほか、五輪塔などが見つかっている。比較的、

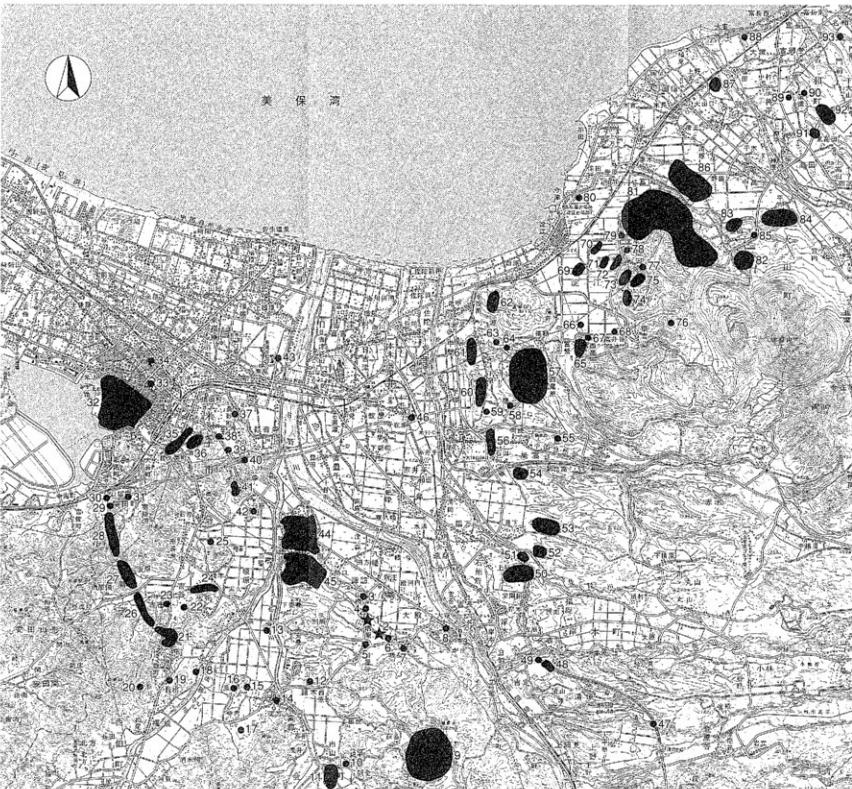
中世の墳墓資料が豊富な地域と考えられる。また、平安時代には、長者原台地一帯が、紀成盛の本領地と考えられており、関連する遺構の存在が推定される。近世の集落は、現在の新庄集落に位置し、その周辺の低地部が、主たる農耕地であったと考えられる。また幕末に開通した佐野川用水の掘削事業により、耕作地として丘陵上が開発され、今回の調査地もその後に削平されたものと考えられる。諏訪の名称の起りは、明治の初めに諏訪神社から採用したものであり、近世には新庄と呼ばれていた。諏訪神社の起源は定かではないが、棟札によると寛永5年の造営にまで遡る。また、明治時代には、山根集落内において、瓦製造や磁器の焼窯が行わされており、窯業遺跡の存在についても注目される地域と考えられる。

#### 参考文献

- 中・四国旧石器文化談話会編 2004年『鳥取県における旧石器文化の様相』中・四国旧石器文化談話会  
小原貴樹 1982年『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅲ』米子市教育委員会  
小原貴樹 1983年『諏訪遺跡群発掘調査報告書Ⅳ』米子市教育委員会  
宮長源十郎 1982年『長者原遺跡群発掘調査報告書』岸本町教育委員会  
西川徹編 1994年『泉中峰・泉前田遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団  
濱田竜彦編 2003年『史跡妻木畠田遺跡第4次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会  
牧本哲雄他編 2004年『笠見第3遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団  
加藤裕一他編 2006年『長者屋敷遺跡、坂長下屋敷遺跡』財団法人鳥取県教育文化財団  
米子市史編纂協議会 1999年『新修米子市史第7巻資料編 原始・古代・中世編』米子市  
梅原末治 1924年『因伯二国に於ける古墳の調査』鳥取県

- 1 湿地東テング原遺跡  
 2 諏訪山土器残片遺跡  
 3 鞍馬糸子塚ノ中道跡  
 4 開削山古道跡  
 5 張谷石塚古跡  
 6 堀貝ノ居敷遺跡  
 7 坡中城寺  
 8 大寺城跡  
 9 篠坂山古道跡  
 10 口朝山古道跡  
 11 天王城古道跡  
 12 清木原跡  
 13 大波山古道跡  
 14 天王城跡  
 15 箱根跡  
 16 三浦山古道跡  
 17 菅原古道跡  
 18 福井芦原古道跡  
 19 福成川舟運古道  
 20 浩水川古道跡  
 21 吉野山古道跡  
 22 吉谷ノ古道跡  
 23 吉谷ノ山古道跡  
 24 緒本古道跡  
 25 紫雲山古道跡  
 26 古山古道跡  
 27 犬山古道跡  
 28 佐久古道跡  
 29 保田原6号跡  
 30 保田原7号跡  
 31 保田原9号跡  
 32 幸子古道跡  
 33 角越町古跡  
 34 鶴見原1号跡  
 35 日吉茶古道跡  
 36 池ノ内道跡  
 37 長谷第3号跡  
 38 長谷第1号跡  
 39 長谷第2号跡  
 40 東山保良古道  
 41 保良古道跡  
 42 保良6号跡  
 43 保良7号跡・日西清中道跡  
 44 福井古道跡  
 45 萩木古道跡  
 46 今治室下井ノ上道跡  
 47 井ノ原古道跡  
 48 井田原古道跡  
 49 久古谷3号跡  
 50 石州所古道跡
- 51 上野万葉跡  
 52 仁寺古道跡  
 53 仁寺古道跡  
 54 鳥居山古道跡  
 55 鳥居山第9号跡  
 56 鳥居坂跡  
 57 百家坂古道跡  
 58 岛中野古道跡  
 59 小人祖母跡  
 60 尾小古道跡  
 61 中村古道跡  
 62 並丸山古道跡  
 63 保良古道跡  
 64 小波道跡  
 65 丹波古道跡  
 66 第一門跡  
 67 沢田祖母跡  
 68 新井角古道跡  
 69 井手古道跡  
 70 間瀬古道跡  
 71 稲山古道跡  
 72 向山古道跡  
 73 鶴井田古道跡  
 74 鶴山古道跡  
 75 小秋山古道跡  
 76 四十九石狭穴古道跡  
 77 上柴廢寺  
 78 五郎寺  
 79 遠見古道跡  
 80 分岐印の上古道跡  
 81 美木地古道跡  
 82 邪武山古道跡  
 83 仙山古道跡  
 84 乎子塚跡  
 85 七本方頭  
 86 旺田古道跡  
 87 上野古道跡  
 88 大坂塚古道跡  
 89 斎田山古道跡  
 90 茶番第1号跡  
 91 重高山古道跡  
 92 重高第2号跡  
 93 木前第2号跡

(S = 1 : 80,000)  
0 5km



第3図 調訪遺跡群周辺跡分布図

## 第3章 諏訪東チンゴ原遺跡の調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

工事予定地は台地上に位置している。本調査に先立ち、平成16年度（2004年度）に米子市教育委員会によって行われた試掘調査では3箇所にトレンチが設定された。このうち2箇所のトレンチ（T1とT2）でピットが検出され、土師器と須恵器が出土した。この結果を受けて、調査範囲が第4図のとおり確定された。

調査を実施するにあたっては、まず、正方形のグリッドを設定した。グリッドの設定は、世界測地座標軸にとらわれず、任意に5m画でおこなった。北西—南東軸は北西からA～E、南西—北東軸は北東から1～6とした。グリッド名は、北側の杭の名称をとて呼称することとした。

発掘調査は、重機により表土掘削、排土処理を行なながら、これと並行して人力による堆積層の掘削、遺構面の検出、遺構検出、遺構掘削作業を行った。

遺構の検出にあたっては、米子市教育委員会が実施した試掘調査の結果から、当初は遺構面が1面（第9層上面）のみであると認識していたが、谷部において大規模な整地が行われており、この整地層上面（第5層上面）でも遺構を確認したことから、遺構面が2面存在するものと判断した。第5層上面を第1遺構面、第9層上面を第2遺構面とし、各々の遺構面で遺構を検出した。

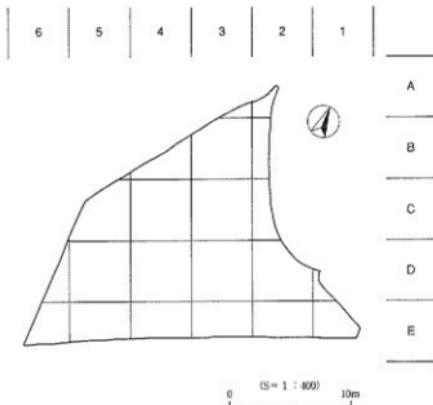
検出した遺構は、検出状況の写真撮影を行い、土層観察用の畦を設定して掘削した。遺構埋土の堆積状況を写真撮影した後、土層図を1:20で作成し、完掘した。状況に応じて遺物の出土状況の写真撮影を行い、図化した。遺構完掘後は写真撮影を行い、先述したグリッド杭を基準に1:20で平面図を作成した。

堆積層から出土した遺物の取り上げについては、グリッド毎、層位毎に一括して行った。

現場での写真撮影は35mmの一眼レフカメラを用い、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムで撮影した。また、これと併用してコンパクトカメラを用い、カラーネガフィルムでも撮影を行った。

今回の調査では、特に以下のことに目的、課題を設定し、これに基づいて調査を行った。

調査地は会見郡衙であると推定される長者屋敷遺跡の近くに位置し、調査地の北側に隣接する諏訪南山崎遺跡からは赤彩土器、瓦、硯などが出土しており、郡衙の機能の一部を補完するような施設の存在が想定されている<sup>(註)</sup>。このような位置関係から、当遺跡でも会見郡衙に関連がある遺跡の存在が想定された。



第4図 諏訪東チンゴ原遺跡 調査区割図

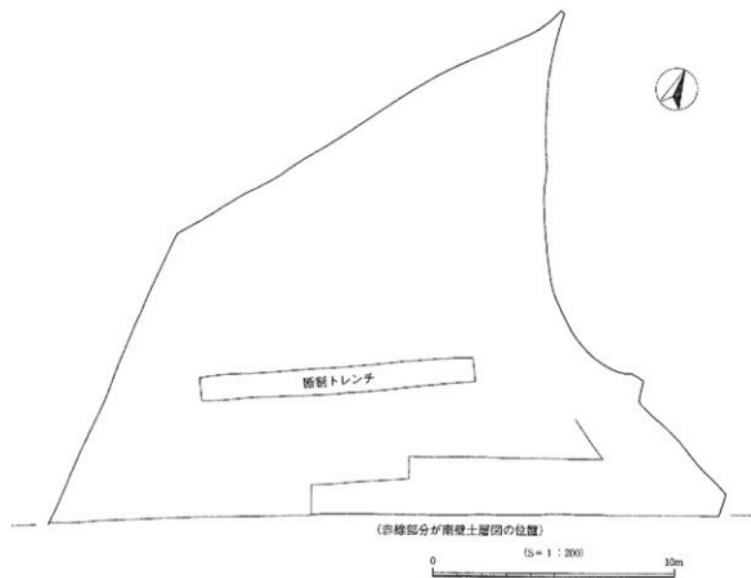
そこで、調査にあたっては、建物や区画施設の有無、官衙的遺物の出土に留意しながら調査を行ったが、当該する遺構、遺物は確認できなかった。なお、整理作業の際、墨書き器等の文字資料の存在にも留意したが、文字資料は確認できなかった。

また、長者原台地の東側縁辺部には古墳群が形成されており、調査地の北側に隣接する諏訪南山崎遺跡からは古墳時代中期の土器がまとまって出土していることから、当該期の古墳あるいは集落の存在が想定された。

そこで、調査にあたっては、当該期の遺物、特に埴輪の出土に留意しながら調査を行ったが、当該期の遺構、遺物は確認できなかった。

表1 諏訪東チング原遺跡の試掘調査結果

トレンチNo	規模 (m)	検出遺構	出土遺物
T1	7×2	ピット	土師器、須恵器
T2	8×2	ピット	土師器、須恵器
T3	10×2	なし	なし



第5図 諏訪東チング原遺跡 断面トレンチ及び南壁土層図位置図

## 第2節 遺跡の層序

調査地は台地の頂上部に位置し、現状は平坦な畑地であるが、旧地形は調査地の南側に谷が入り込み、南西—北東方向にのびる尾根状地形の斜面から谷に移行する地形となっている。

以下に基本的な層名及びその特徴を示し、調査地北西側の尾根状地形部と調査地南側の谷部の基本層序を述べる。なお、( ) 内には調査時の旧層名を示す。

### 1. 基本的な層名及びその特徴

第1層 表土及び現耕作土。

第2層 旧耕作土。

第3層 ほ場整備に伴う造成土。

第4層 (旧第4—1層) 第5層の整地に伴う旧耕作土。

第5層 従来の2枚の水田を1枚にするための整地土で、この層の上面が第1遺構面となっている。

第6層 (旧第4—2層) 旧耕作土で、ロームブロックが混じることから、第7層の上に盛土したものと思われる。

第7層 (旧第4—3層) 旧耕作土で、調査区南壁の土層断面では傾斜変換点付近に畦畔が確認でき、調査区南壁付近では東西方向に2枚の水田が存在したものと思われる。

第8層 (旧第5層) クロボクを基調とする堆積層である。

第9層 第8層と第10層との漸移層で、この層の上面が第2遺構面となっている。第9層からは遺物は出土しなかった。

第10層 黄褐色粘質土からなるローム層で、調査地の全域で認められる。調査地北西側の尾根状地形部ではこの層の上面で遺構を検出した。

### 2. 基本層序

#### 尾根状地形部

調査地北側の尾根状地形部では近世以降の改変が著しく、ローム層まで搅乱が及んでおり、基本層序は現地表面から第1層→第2層→第10層となっている。遺構はローム層(第10層)上面で検出した。

#### 谷部

調査地南側の谷部は堆積土が良好な状態で認められ、谷部がほぼ埋没した後(近世以降)に、大規模な整地が行われている。また、さらに昭和50年代にはほ場整備に伴う造成が行われている。

基本層序は現地表面から第1層→第2層→第3層→第4層→第5層→第6層→第7層→第8層→第9層→第10層となっており、遺構は第5層上面(第1遺構面)と第9層上面(第2遺構面)で検出した。

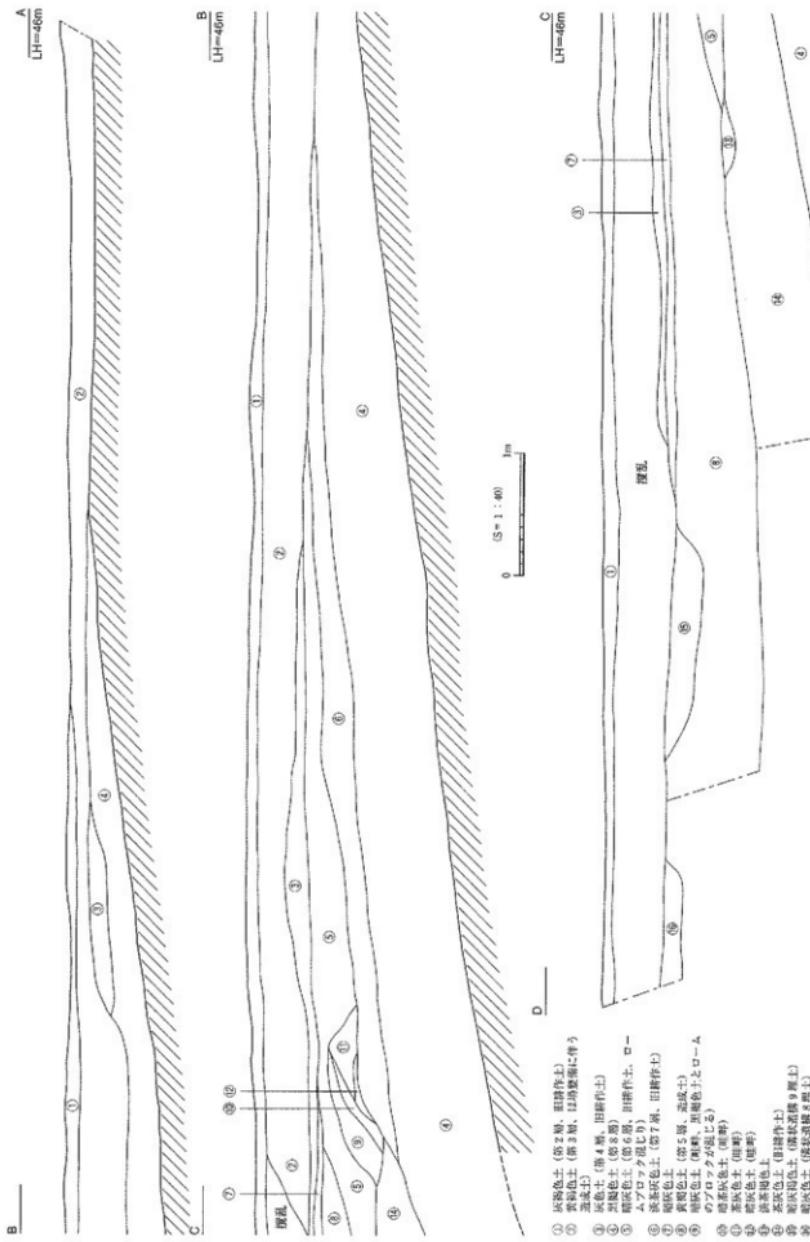


図6 調査区南断面図  
諏訪東チソゴ原遺跡

### 第3節 検出した遺構

#### 1. 第1遺構面

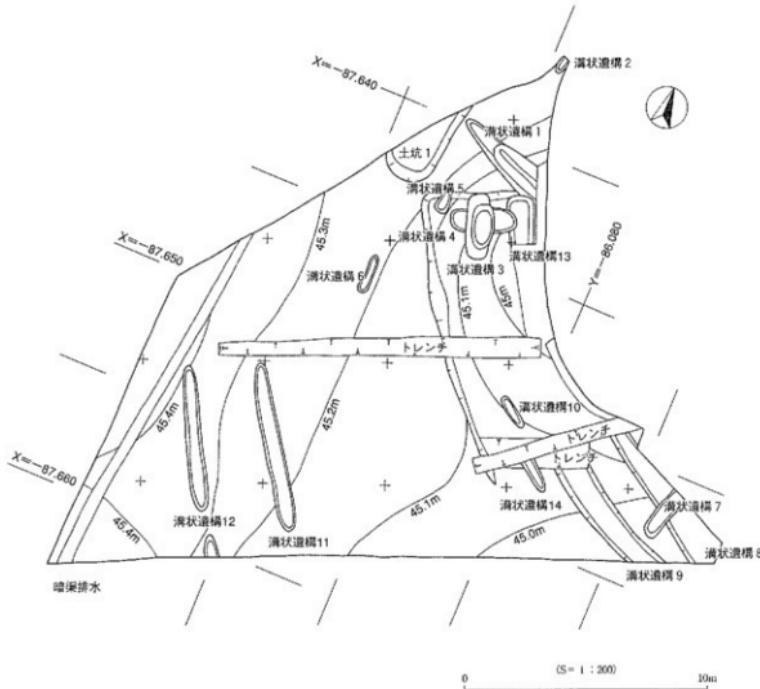
第1遺構面では溝状遺構14条、土坑1基を検出した。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、詳細な時期は特定できないが、溝状遺構3～10・13・14は近世以降の遺物を包含する第5層上面で検出したことから、これらは近世以降のものであると考えられる。また、溝状遺構1・2・11・12、土坑1も埋土の状況から、近世以降のものであると考えられる。

#### 溝状遺構（第8図～第12図）

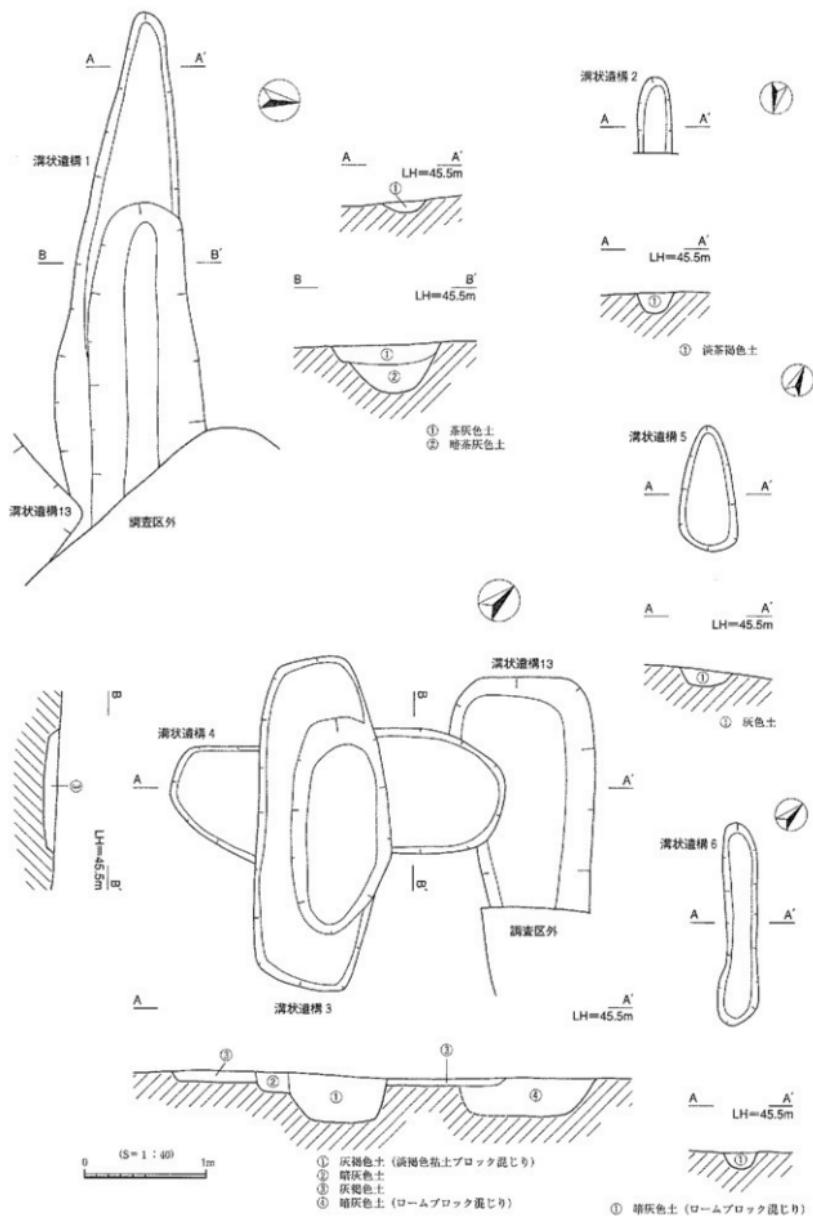
溝状遺構はいずれも耕作に伴うものと考えられ、溝状遺構1以外は地形に沿うようにのびている。溝状遺構1は西から東へ下降しており、本来はその西端が土坑1とつながっていた可能性がある。

溝状遺構は削平が著しいために、断続的に検出しているが、位置的な関係や埋土の状況などから、溝状遺構3は溝状遺構9と一連のものである可能性があり、溝状遺構13も溝状遺構8あるいは溝状遺構9と一連のものである可能性がある。また、溝状遺構3と溝状遺構13、溝状遺構8と溝状遺構9、溝状遺構11と溝状遺構12はほぼ平行してのびており、何らかの関係が考えられる。

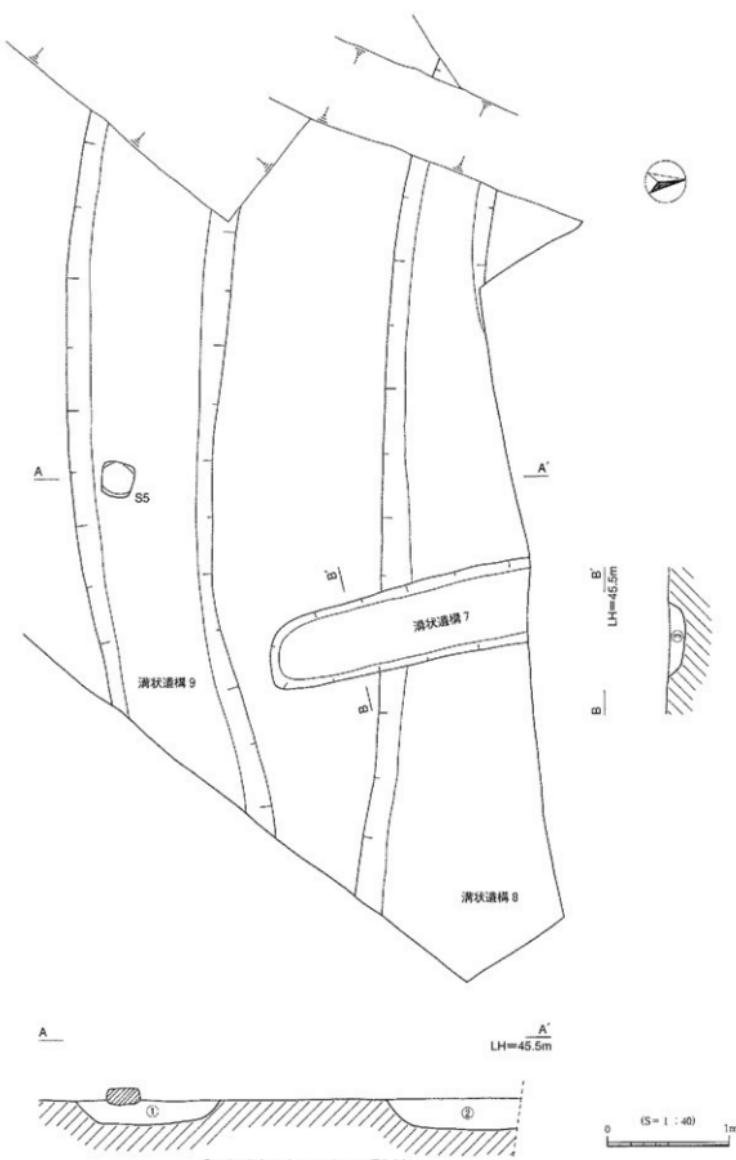
なお、各溝状遺構の概要については、表4を参照されたい。



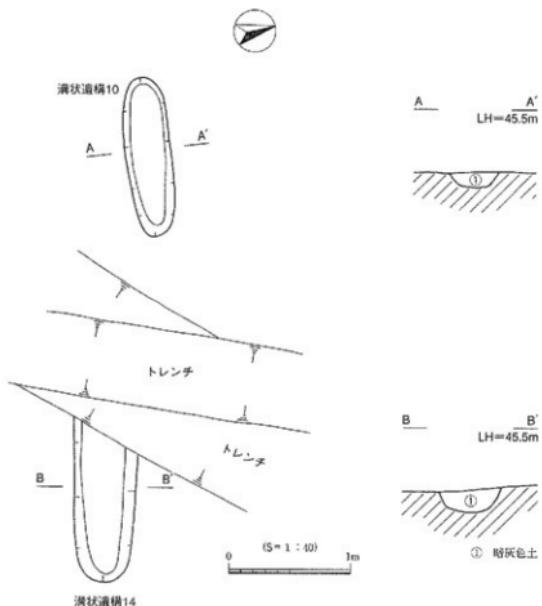
第7図 諏訪東チング原遺跡 第1遺構面、遺構配置図



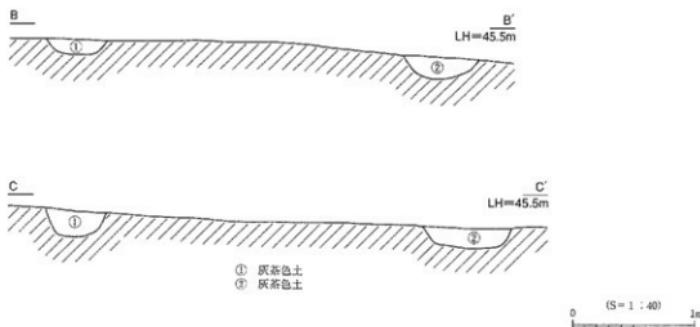
第8図 諏訪東チンゴ原遺跡 溝状遺構1～6・13 平断面図



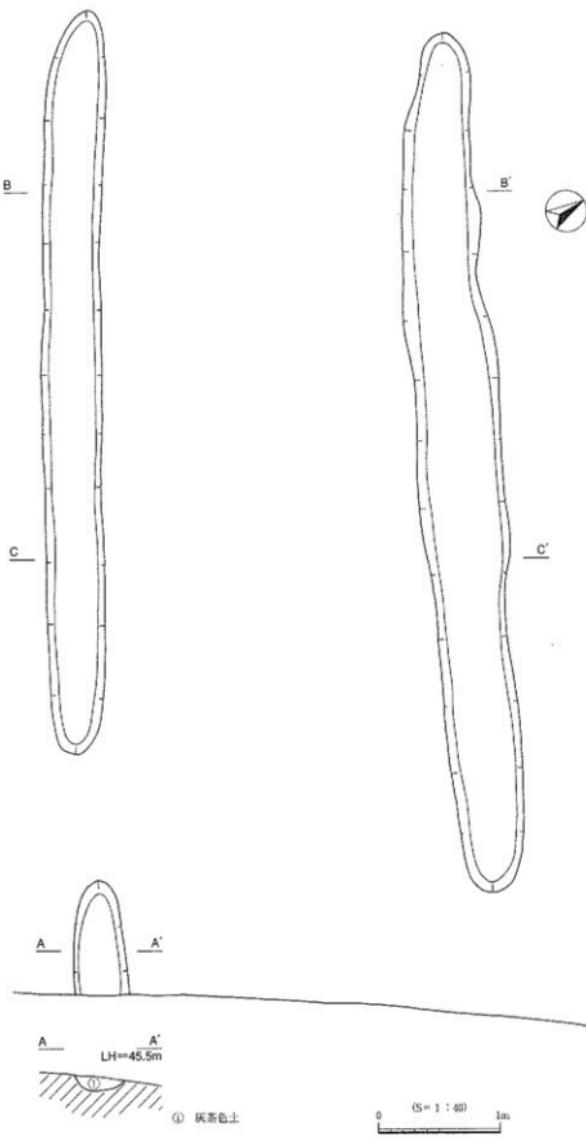
第9図 諏訪東チノゴ原遺跡 溝状造構 7～9 平断面図



第10図 溝状遺構10・14 平断面図



第11図 溝状遺構11・12 断面図 2



第12図 溝状遺構11・12 平断面図 1

### 土坑 1 (第14図)

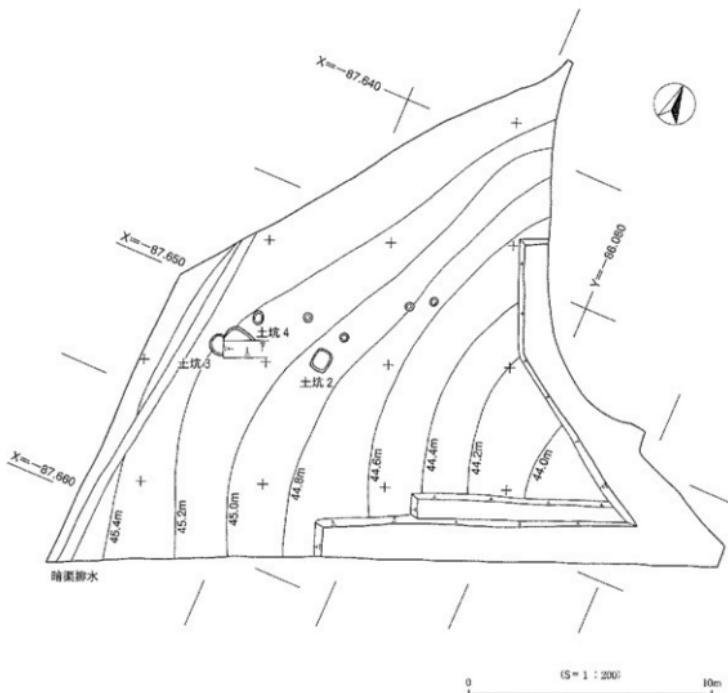
土坑 1 は西側が調査区外にかかるため全容は不明であるが、平面形態は椭円状を呈するものと思われ、規模は現状で長軸4.1m、短軸2.3m、深さ0.2mをはかる。埋土は下層には自然堆積が認められるが、堆積状況から数回の掘り直しが行われたものと思われ、最終的には人為的に埋め戻されている。遺物は出土しなかった。

### 2. 第2遺構面

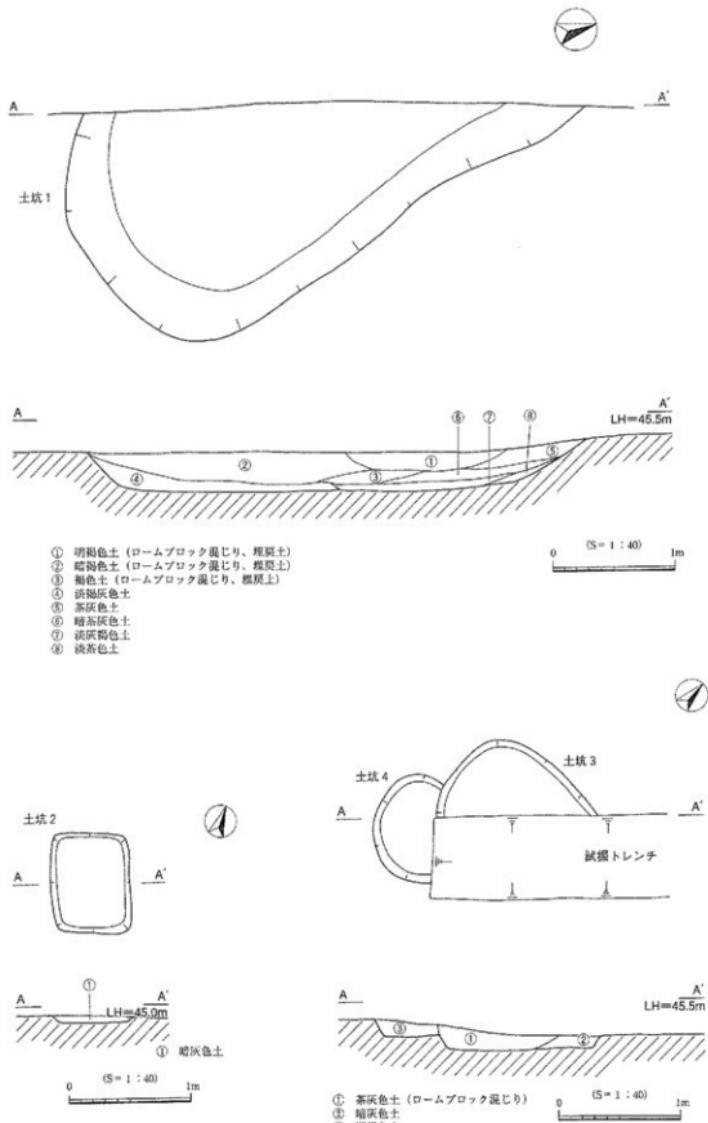
第2遺構面では土坑3基を検出した。いずれの遺構からも遺物が出土していないため、詳細な時期は特定できなかった。

### 土坑 2 (第14図)

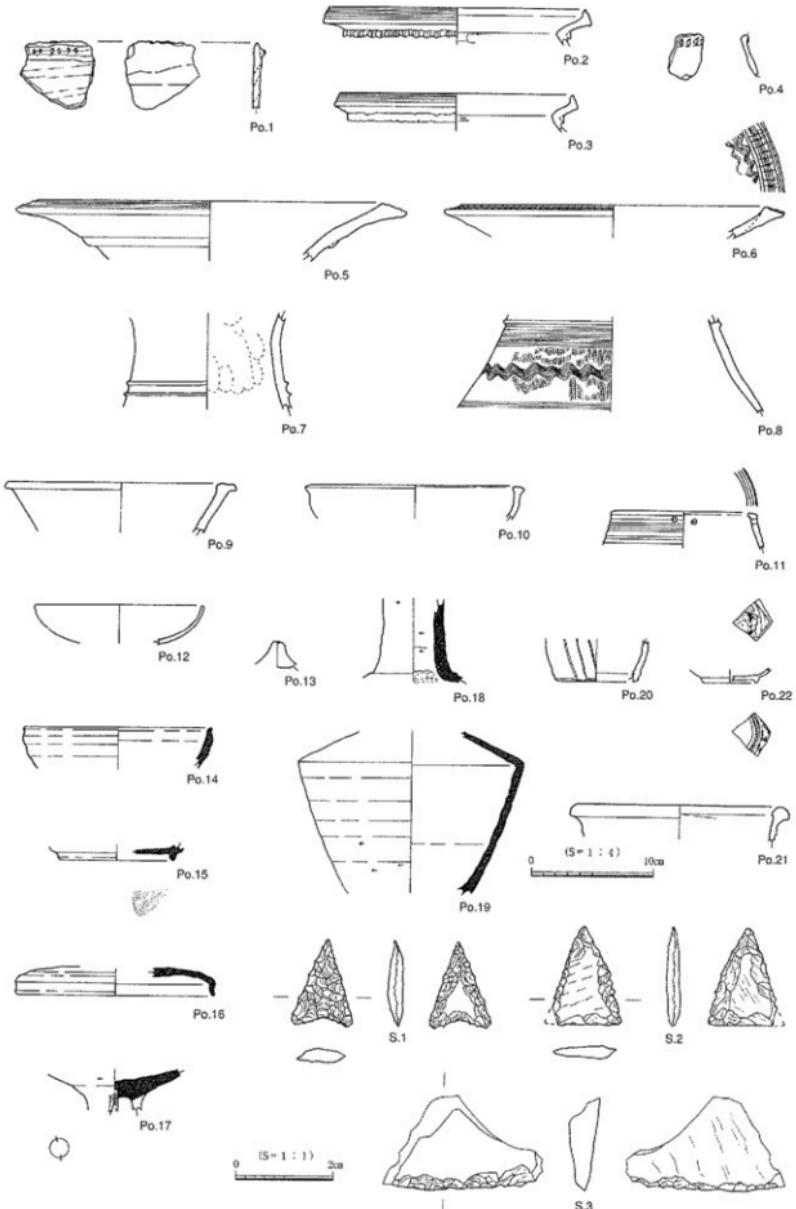
土坑 2 は平面形態が隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.1mをはかる。埋土は暗灰色土の単層である。



第13図 諏訪東チング原遺跡 第2遺構面、遺構配置図



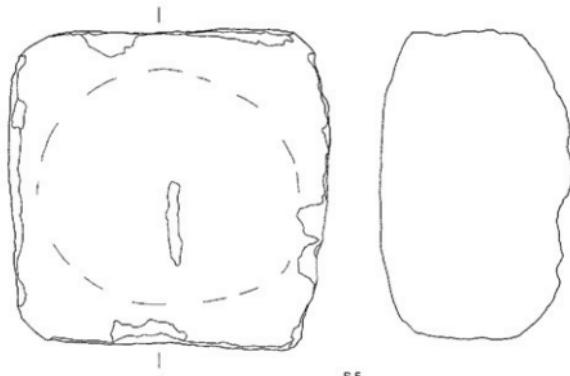
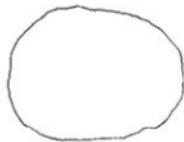
第14図 土坑1～4 平断面図



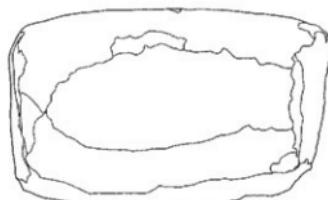
第15図 諏訪東チング原遺跡 出土遺物 1



S.4



S.5



0 (S = 1 : 4) 10cm

第16図 諏訪東チンゴ原遺跡 出土遺物 2

### 土坑3（第14図）

土坑3は南東側が試掘トレーナによって改変を受けているが、平面形態は円形を呈するものと思われる。規模は北東—南西長1.3m、北西—南東長は現状で0.6m、深さ0.2~0.4mをはかる。

### 土坑4（第14図）

土坑4は北東側が試掘トレーナによって改変を受け、さらに、土坑3に切られているが、平面形態は円形を呈するものと思われる。規模は北西—南東長0.9m、北東—南西長は現状で0.5m、深さ0.2~0.3mをはかる。埋土は灰褐色土の単層である。

## 第4節 出土遺物（第15、16図）

包含層及び東側の造成土から出土した遺物は、突帯紋土器、弥生土器、須恵器、陶磁器、石器、五輪塔などがある。

Po.1は突帯紋土器で、突帯の端部にキザミが施される。Po.2は、弥生土器甕で、口縁端部に4条の凹線が巡り、頸部に指頭圧痕貼付突帯が施される。Po.3も同様の資料だが、頸部の貼付突帯は指頭圧痕がナデ消されている。Po.5~Po.8は壺である。Po.5は、ラッパ状に開く口縁と端部に凹線があり、下部に突帯が巡る。Po.8は、凹線紋と波状紋が施される。Po.9、Po.10は高坏の口縁部片。Po.11は内彎ぎみに立ち上がる無頸壺で、体部には凹線が巡る。また口縁下部には穿孔が施されている。Po.12は土師器坏身。Po.13はミニチュアの土師器高坏か。Po.14~Po.19は須恵器である。Po.14、Po.15は坏身、Po.16は坏蓋、Po.17は高坏、Po.18、Po.19は壺の破片である。Po.20は焼き締め陶器の壺底部で、体部に3条のヘラ描きが施される。Po.21は、黒褐色釉の陶器鉢である。Po.22は青花皿の底部片、S.1とS.2は石鐵、S.3はサスカイト製のスクレイパーの断片である。S.4は五輪塔の空風輪、S.5は地輪である。

## 第5節 小結

今回の調査では、時期を特定できる遺構は確認できなかったが、堆積土からは縄紋時代晚期後葉、弥生時代中期後半、奈良時代の各時期の遺物が出土していることから、当該期の遺跡の存在が窺える。

調査地は、会見郡衙であると推定される長者屋敷遺跡の近くに位置し、北に隣接する諏訪南山崎遺跡では、赤彩土器、瓦、硯といった官的な遺物が出土しており、会見郡衙の機能の一部を補完するような施設が想定されている。このような位置関係から、当遺跡でも会見郡衙と関係がある施設の存在が想定されたが、当該期の遺構は確認できなかった。調査地外西側から北側にかけての尾根状地形部に当該期の遺構が展開するものと推定される。

また、長者原台地の東側縁辺部では古墳群が形成されており、諏訪南山崎遺跡からは古墳時代中期の土器がまとまって出土していることから、当該期の古墳あるいは集落の存在が想定されたが、今回の調査では遺構、遺物は確認できなかった。

註1 高橋浩樹 2006年『諏訪南山崎遺跡』財團法人米子市教育文化事業団

表2 米子市諒訪東チング原遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図 No	地区・層位	器種	法量(cm)			色調	調整		備考
			口径	底径	器高		内面	外面	
15	Po. 1	D-2・8 層	突帯紋土器		(5.4)	淡茶褐色	ケズリ	突帯、ケズリ	
15	Po. 2	D-2・4 層	弥生土器、 甕	(20.9)	(2.9)	淡白茶色	風化	凹線、指頭圧 痕貼付突帯	
15	Po. 3	D-2・4 層	弥生土器、 甕	(19.1)	(3)	淡白茶色	風化	凹線、指頭圧 痕貼付突帯	
15	Po. 4	D-2・4 層	弥生土器、 甕		(3.2)	淡白茶色	風化	指頭圧痕貼付 突帯	
15	Po. 5	D-3・7 層	弥生土器、 甕	(28)	(4.7)	灰茶色	風化	凹線、突帯	
15	Po. 6	D-2・4 層	弥生土器、 甕	(24.8)	(2.6)	淡茶灰色	波状紋	凹線、刺突紋	
15	Po. 7	D-2・東 側造成土	弥生土器、 甕		(7.9)	灰茶色	ナデ	突帯	
15	Po. 8	D-3・8 層	弥生土器、 甕		(7.7)	淡茶灰色	ナデ	凹線、波状紋	
15	Po. 9	E-3・ 4・7層	弥生土器、 高坏	(16)	(4.1)	淡白茶色	風化	風化	
15	Po. 10	D-2・4 層	弥生土器、 高坏	(16.8)	(2.8)	淡橙褐色	風化	風化	
15	Po. 11	F-3・7 層	弥生土器、 無頭甕	(10.6)	(3)	淡橙褐色	不明	凹線	穿孔
15	Po. 12	D-1・東 側造成土	土師器、坏 身	(13.7)	(3.2)	淡橙褐色	ナデ	風化	
15	Po. 13	D-3・7 層	器種不明		(2.2)	淡赤褐色	風化	風化	
15	Po. 14	D-2・4 層	須恵器、坏 身	(15.4)	(3.4)	暗灰色	ナデ	ナデ	
15	Po. 15	D-2・4 層	須恵器、坏 身		(9.2)	(1.3)	淡白灰色	ナデ	ナデ 底部外面に爪 形の圧痕あり
15	Po. 16	D-4・7 層	須恵器、坏 蓋	(16)	(2.3)	淡灰色	ナデ	ナデ	
15	Po. 17	D-4・8 層	須恵器、高 坏		(3.5)	暗灰色	ナデ	ナデ	2方向のスカ シ
15	Po. 18	D-1・東 側造成土	須恵器、甕		(6.8)	淡茶灰色	ナデ	ナデ	
15	Po. 19	D-2・4 層	須恵器、甕		(13.2)	淡灰色	ナデ	ナデ	
15	Po. 20	D-3・8 層	陶器、甕		(6.2)	(3.5)	淡赤褐色	ナデ	ナデ ヘラ描き
15	Po. 21	D-1・東 側造成土	陶器、鉢	(16.8)	(2.9)	黒褐色	ナデ	ナデ	
15	Po. 22	D-1・東 側造成土	磁器、皿		(4.4)	(1.3)	白灰色		底部外面は無 釉

表3 諏訪東チング原遺跡出土石器観察表

図	No	層位・地区	種別	法量(cm)			石材
				最大長	最大幅	最大厚	
15	S.1	D—2・4層	石鎌	1.8	1.3	0.3	黒曜石
15	S.2	D—3・8層	石鎌	2	1.4	0.2	無斑晶安山岩
15	S.3	E—3・6層	スクレイバー	1.9	3.3	0.6	サヌカイト
16	S.4		五輪塔空風輪	20.4	14.9	11	安山岩
16	S.5	溝状遺構9	五輪塔地輪	26.4	26.4	16	安山岩

表4 諏訪東チング原遺跡 溝状遺構一覧表

(単位:m)

遺構番号	検出長	幅	深さ	備考
溝状遺構1	3.9	0.3~1.2	0.1~0.4	溝状遺構13に切られる。
溝状遺構2	0.6	0.3	0.2	
溝状遺構3	2.7	0.8~1.1	0.2~0.4	溝状遺構4を切る。
溝状遺構4	2.8	1.0~1.1	0.1	溝状遺構3に切られるが、溝状遺構13を切る。
溝状遺構5	1.0	0.3~0.5	0.1	
溝状遺構6	1.6	0.2~0.3	0.1~0.2	
溝状遺構7	2.3	0.6	0.1	溝状遺構8を切る。
溝状遺構8	6.7	0.6~1.7以上	0.1~0.2	溝状遺構7に切られる。
溝状遺構9	5.9	1.0~1.4	0.2	床面から浮いた状態で安山岩製の五輪塔地輪(S.5)が出土。
溝状遺構10	1.3	0.4	0.1~0.2	
溝状遺構11	7.1	0.4~0.7	0.1~0.2	
溝状遺構12A	6.1	0.5	0.1~0.2	
溝状遺構12B	0.9	0.4	0.1	
溝状遺構13	1.9	0.8~1.2	0.3	
溝状遺構14	1.4	0.5	0.1~0.2	

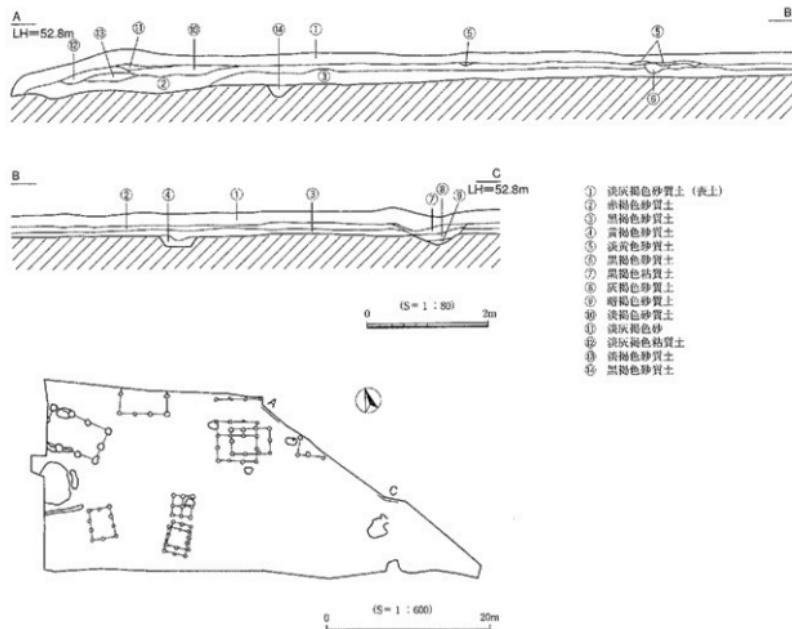
## 第4章 諏訪西土取場遺跡の調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

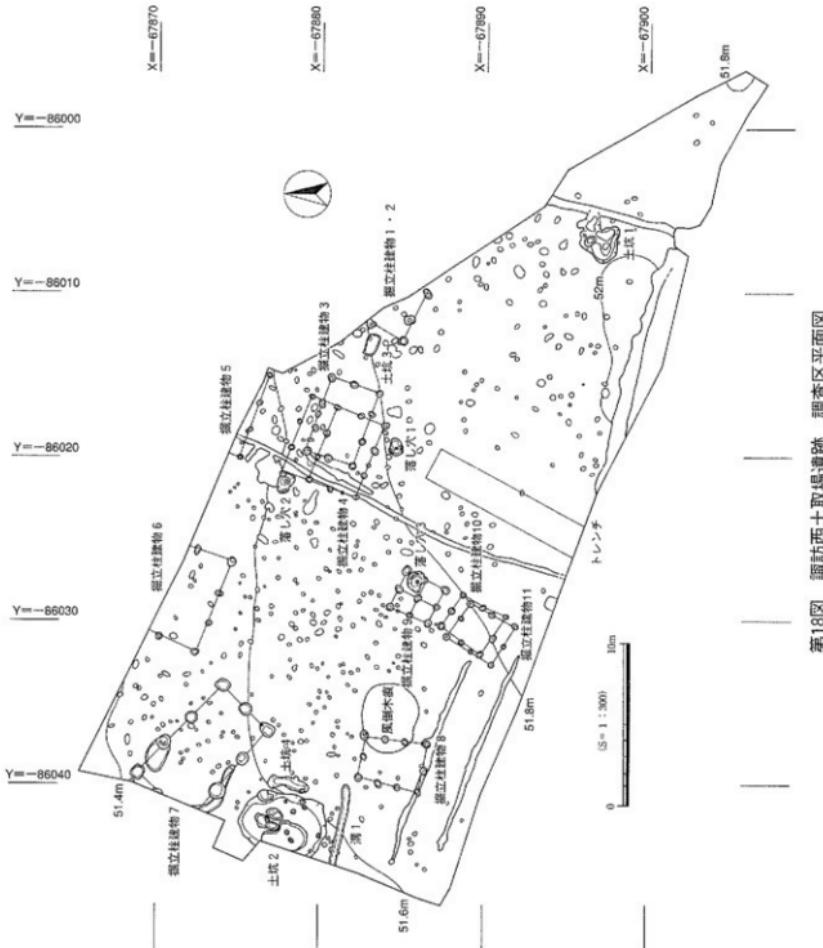
調査は、諏訪西土取場遺跡の東側から開始し、西側に向かって順次、表土、包含層を掘削していく方法をとった。地区割りは、地形に沿って6区画に分けている。表土は重機にて掘削し、包含層以下の掘削は、全て人力によって行った。また、奈良時代の遺構の調査終了後には、旧石器時代の遺物の存在を確かめるため、3区に10m×2mのトレンチを設定し、深さ50cmの地点までローム層を掘削したが、遺物の出土は見られなかった。

### 第2節 遺跡の層序

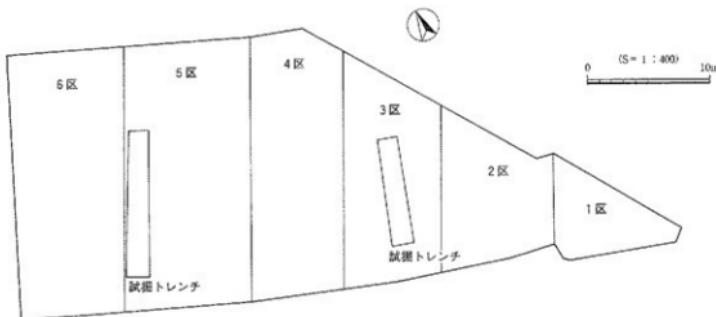
遺跡の層序は、ほぼ3層に分かれ、上層より淡灰褐色砂質土（耕作土）、赤褐色砂質土、黒褐色砂質土であり、3層目の黒褐色砂質土が、奈良時代の遺物包含層である。遺構面は、地山の明茶褐色土上面で検出した。



第17図 諏訪西土取場遺跡 調査区断面、遺構配置図



第18図 諏訪西土取場跡 調査区平面図



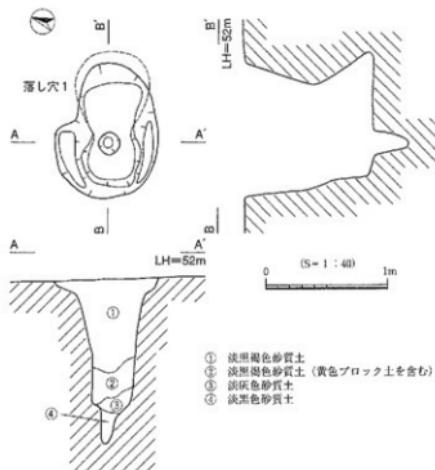
第19図 諏訪西土取場遺跡 調査区割図

### 第3節 繩紋時代の調査

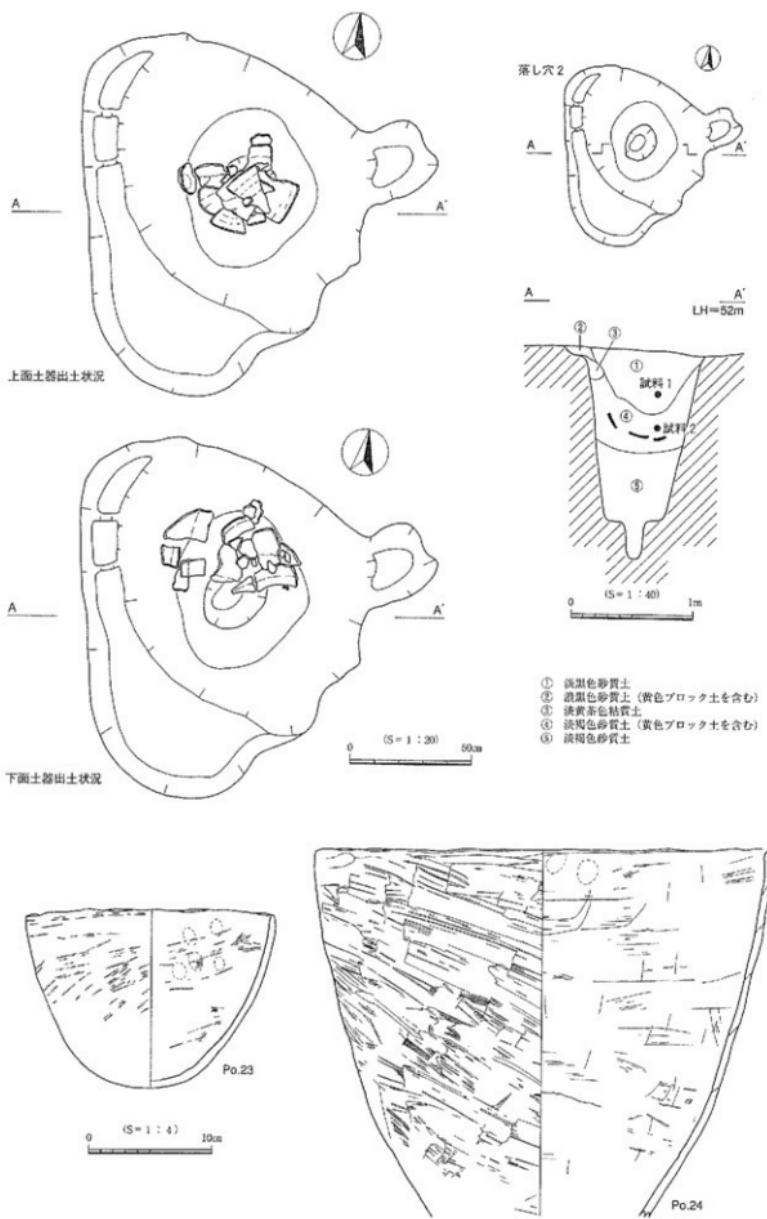
繩紋時代のものと考えられる遺構は、落し穴状の土坑を諏訪西土取場遺跡から3基、坂長米子道端ノ中遺跡から3基を検出した。この土坑は、円形ないし楕円形で、底面に小ビットを持つものである。形態的な特徴から、狩猟用の落し穴として利用されたものと考えられる。この遺構の時期については、落し穴2から、繩紋時代後期から晩期前半頃のものと考えられる土器が出土しており、この時期に相当するものと考えられる。その他の落し穴については遺物が出土しなかったため、時期を確定することは困難であるが、坂長米子道端ノ中遺跡において実施された放射性炭素年代測定の結果からも繩紋時代後期から晩期にかけて作られたものと考えられる。

#### 落し穴1（第20図）

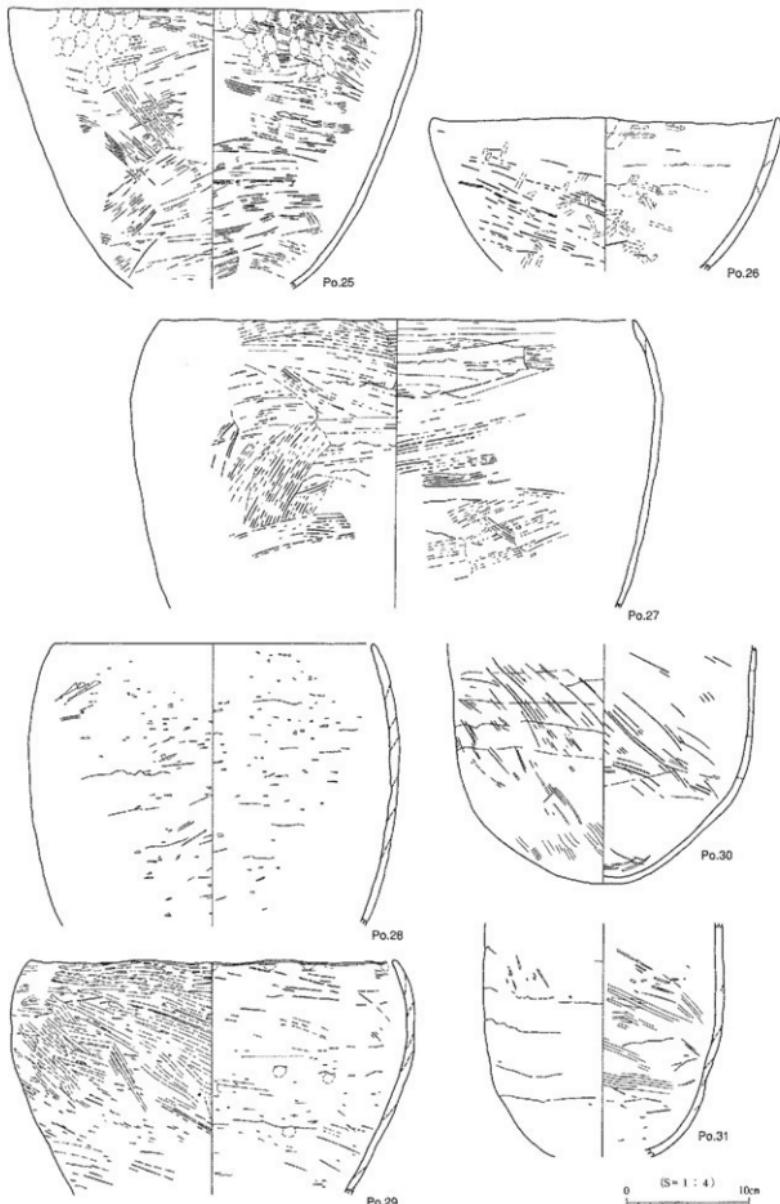
4区において検出した、長楕円形の土坑である。長辺1.1m、短辺84cm、深さ1.04mで、底面はオーバーハンプルし、東側に広がる。また中央に直径18cm、深さ28cmの小ビットを持つ。この遺構からの出土遺物は無く、正確な時期は不明である。



第20図 落し穴1 遺構図



第21図 落し穴2 遺構・遺物図1

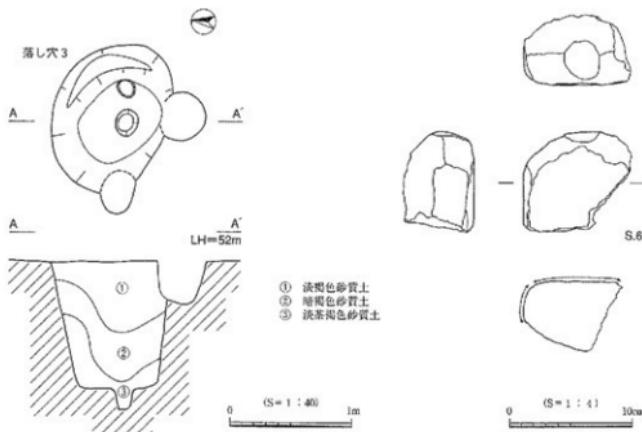


第22図 落し穴2 遺物図2

## 落し穴2（第21、22図）

5区において検出した椭円形の土坑である。遺構の東側は掘立柱建物4の柱穴によって切られている。規模は、長径1.3m、短径1m程度、深さ1.4mで、底面に直径25cm、深さ30cmの小ピットを持つ。また、埋土の中層から、縄紋土器がまとまって出土した。取上げの順序から、上下2回に分けて実測し取上げた。出土した縄紋土器は、全て粗製土器のため、時期を決しがたい遺物であるが、縄紋時代後期後半から縄紋時代晚期前半頃のものと考えられる。また、この地点の試料においてAMS年代測定を行い、紀元前1540年から910年という年代値が得られている。（第7章、第1節）

**出土遺物** Po.23は、口径19.6cm、器高14.6cmの浅鉢である。色調は淡橙褐色を呈し、内外面に条痕が残る。外面は風化しており、底部を欠く。Po.23Iは、復元口径が37cmとなる、大形の深鉢である。底部が欠損しており、器高は不明であるが、砲弾形の器形になるものと考えられる。色調は内面が明茶灰色であり、外面には黒斑がみられる。内外面とも条痕調整が見られる。Po.25は、口径33.4cmの深鉢である。色調は淡茶灰色を呈し、外面の一部には黒斑が見られる。内外面とも条痕調整が見られるが、外面上半には、さらにヘラミガキが施されている。Po.26は、口径28.2cmの浅鉢である。色調は暗褐色で、外面を条痕調整し、ヘラミガキが施される。Po.27は、口径38.6cmの深鉢である。口縁部は内彎する。色調は茶褐色を呈し、外面に一部黒斑が見られる。内外面とも条痕調整されるが、内面には、成形時の粘土の接合痕が残る。Po.28も口縁が内彎する深鉢である。口径26.1cmで、色調は、淡赤褐色を呈し、外面に条痕調整の跡が残る。Po.29は、口径30cmの深鉢で、口縁が内彎する。色調は淡灰茶色で、口縁部の外面上半は黒化している。内外面とも条痕調整がなされ、さらに外面にはヘラミガキの痕跡が残る。Po.30は、深鉢の底部片である。色調は淡茶灰色で、外面には炭化物が付着している。内外面とも条痕調整がなされるが、成形時の粘土の積み上げ痕跡は明瞭に観察でき、内面には指押さえの跡も見られる。Po.31は直立気味に立ち上がる深鉢の底部である。色調は淡赤色を呈し、胎土は粗い。外面は風化が著しいが、内面には条痕が残る。



第23図 落し穴3 遺構・遺物図

### 落し穴 3（第23図）

5区で検出した、長楕円形の落し穴である。検出面の一部を掘立柱建物9の柱穴によって切られている。遺構の規模は、長径1.24m、短径96cm、深さ1.04mで、底面に直径20cm程度、深さ18cmの小ピットを持つ。出土遺物は、埋土中から土器の細片と、擦石片S.6が出土している。擦石は安山岩製の円礫を用いており、端部と側面が平滑になっている。これ以外の出土遺物は無く、明確な時期は不明であるが、落し穴2との形態的な類似から、縄紋時代に相当するものと考えられる。

## 第4節 奈良時代の調査

奈良時代の遺構は、掘立柱建物11棟、土坑3基を検出した。このうち、遺物が出土しなかった遺構については、明確な時期を示しがたいが、出土遺物の数量的な傾向からも、この時期に相当する可能性が高いものと考えられる。

### 掘立柱建物 1（第24図）

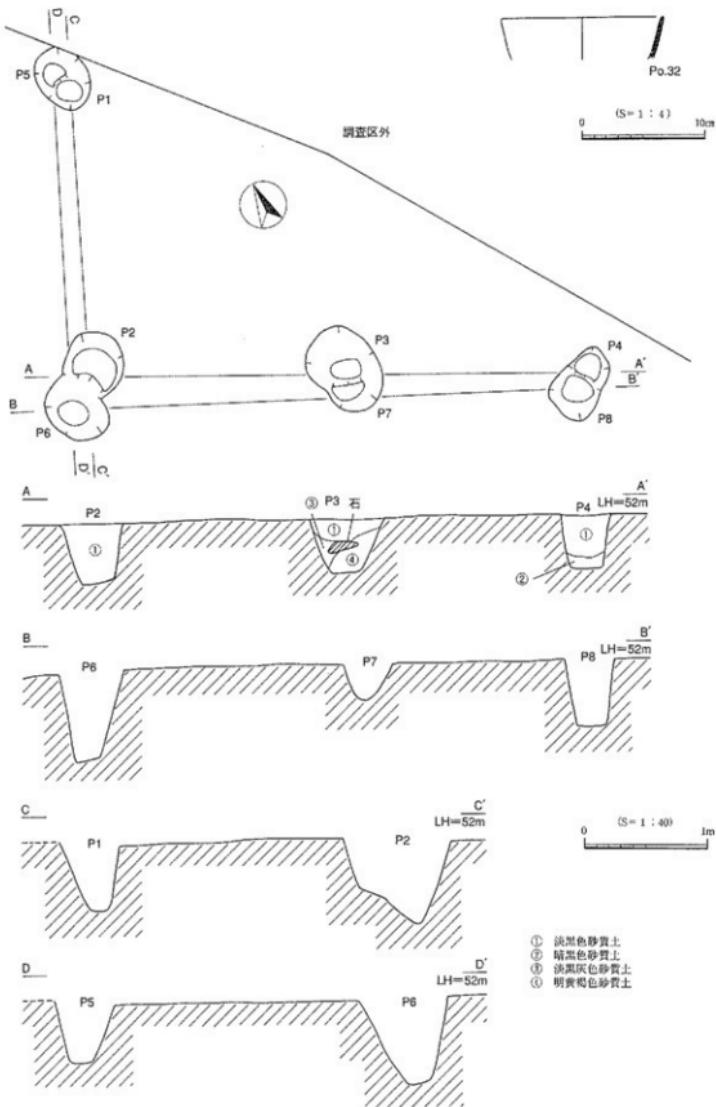
3区の北端部で検出した1間×2間以上の規模を持つ掘立柱建物と考えられる。建物の半分以上は調査区外に伸びるため全体の規模は不明である。また、柱穴は掘立柱建物2と重複しており、建替が行われているものと考えられる。柱穴の平面形は円形で、建物の規模は、柱穴の直径が30～50cm、深さ45～50cm、柱間の距離は、東西が2m、南北方向が2.3mである。柱穴内からの出土遺物は、P3から須恵器坏身片Po.32が出土している。この建物の時期は、柱穴内から出土した遺物から、奈良時代以降のものと考えられる。

### 掘立柱建物 2（第24図）

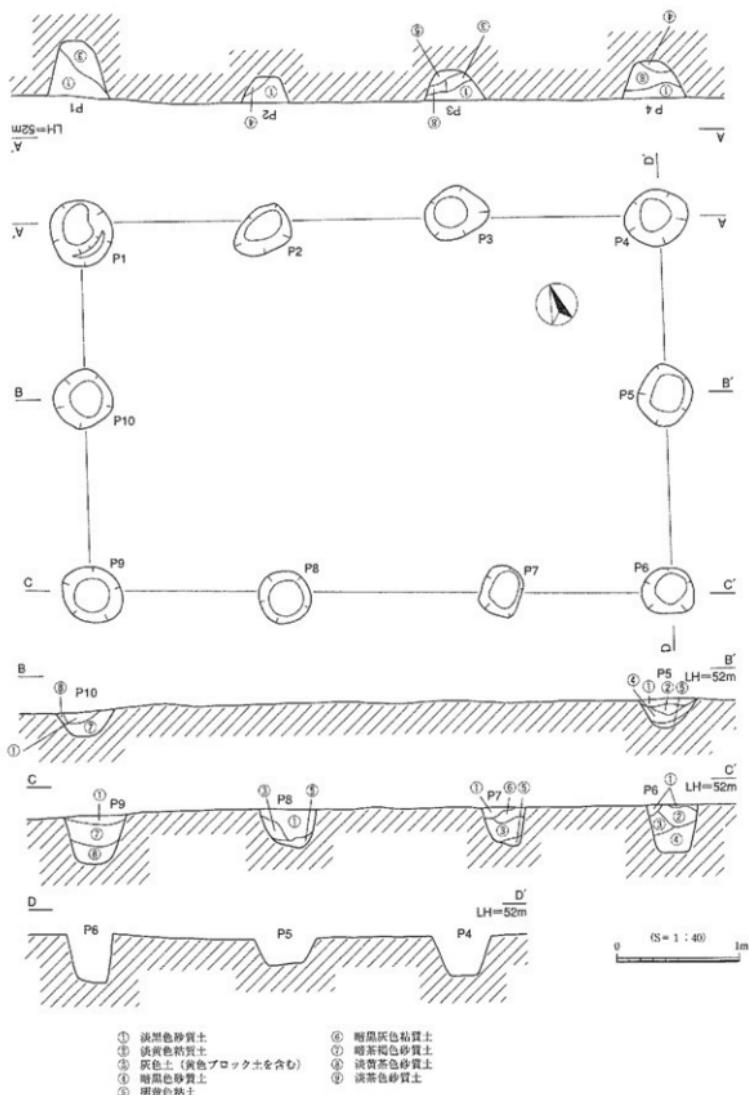
掘立柱建物1と重複し、柱穴の堀形が切合う、1間×2間以上の規模を持つ掘立柱建物と考えられる。柱穴の平面形は円形で、建物の規模は、柱穴の直径が40～50cm、深さ30～70cm、柱間の距離は2m～2.8mである。柱穴内からの出土遺物は、P6の埋土中から鉄鎌（第46図28）が出土している。

### 掘立柱建物 3（第25図）

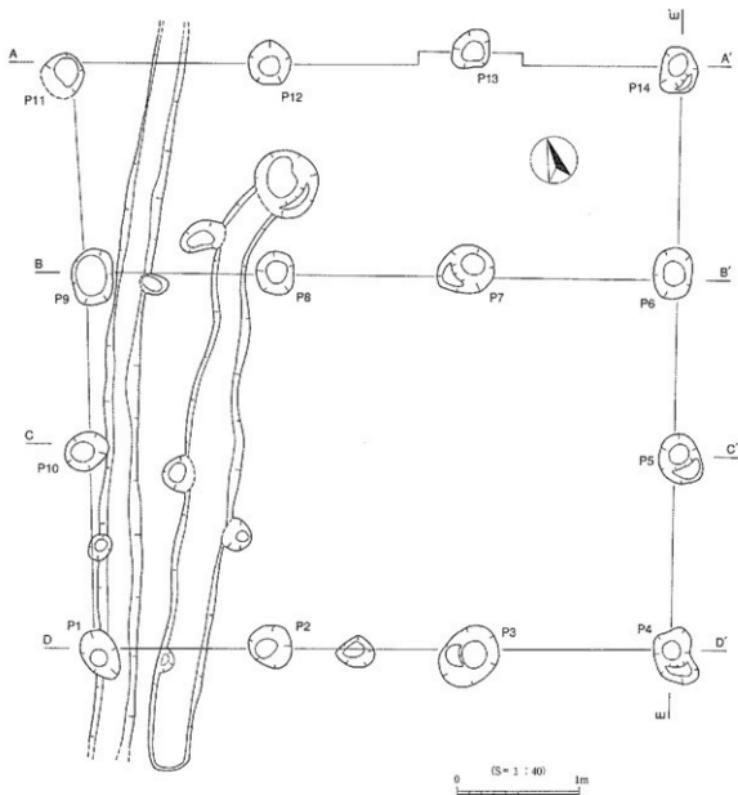
4区の北部で検出した、2間×3間の掘立柱建物である。掘立柱建物4と重複する建物であるが、柱穴の切り合い関係が無く、前後関係を明らかにすることは出来なかった。柱穴の平面形は円形を主体とし、規模は直径が40～55cm、深さ20～45cm、柱間の規模は1.5～1.6m程度で、P6、P7間は柱間が縮まっており、柱筋の通りはそれほどよい建物とは言いがたい。柱痕は確認することが出来ないため、柱は抜き取られているものと考えられる。柱穴内からの出土遺物は、P6の埋土中から鉄滓（第46図27）が出土している。



第24図 掘立柱建物1・2 遺構・遺物図



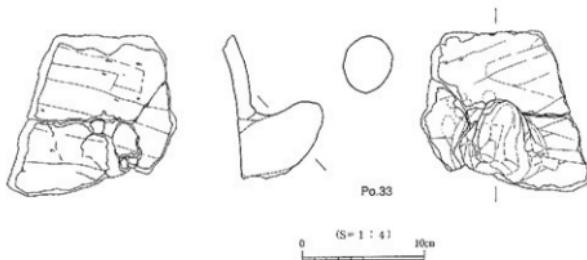
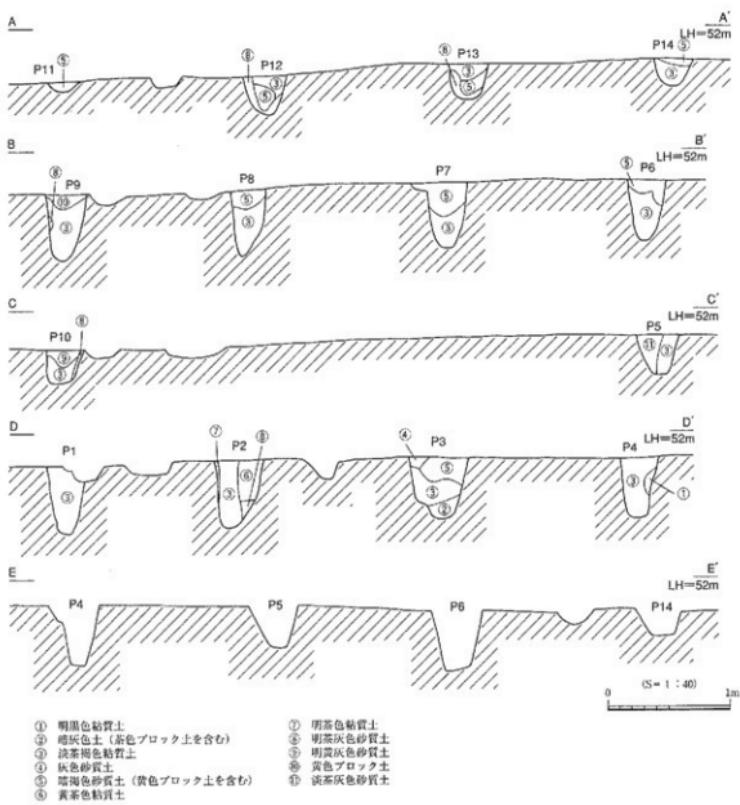
第25図 掘立柱建物 3 遺構図



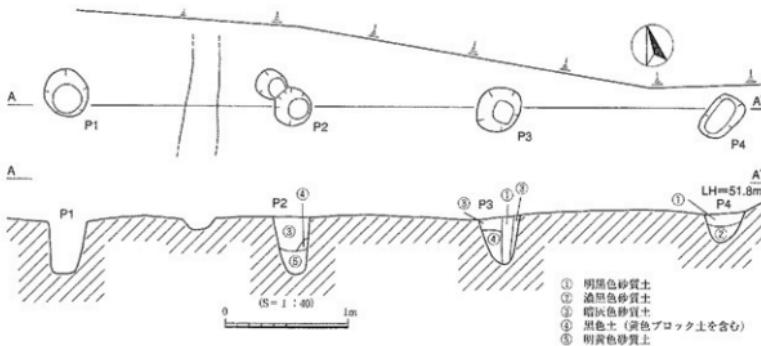
第26図 挖立柱建物4 造構図1

#### 掘立柱建物4（第26、27図）

4区の北部で検出した、2間×3間の掘立柱建物である。北側に庇状の張り出しを持つ。柱穴の平面形は円形で、柱穴の規模は、直径が30~40cm、深さ10~50cm、柱間の長さは、1.5~1.6m程度である。柱穴の深さはほぼ50cm程度で揃えられているが、北側の張り出し部の柱穴は、深さが浅く不揃いで、柱筋も通りも悪い。出土遺物は、P12の埋土中から移動式竈の把手部分Po.33が出土している。この建物の時期は不明であるが、周辺の包含層出土遺物や、移動式竈などから、奈良時代から平安時代前期までのものと考えられる。



第27図 掘立柱建物 4 遺構図 2・遺物図



第28図 掘立柱建物5 遺構図

#### 掘立柱建物5（第28図）

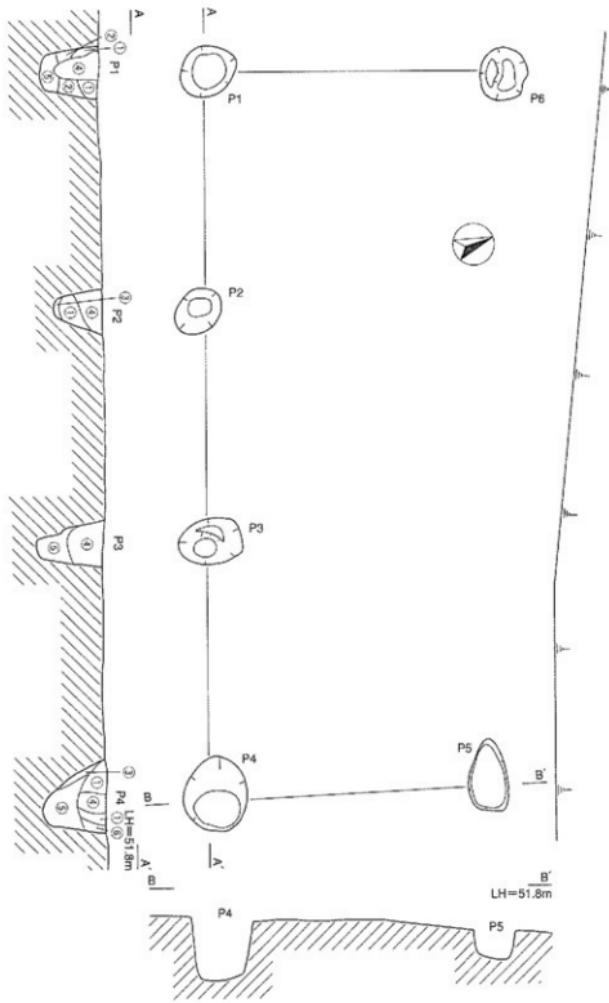
4区の北端部で検出した、1間×3間以上の規模を持つ掘立柱建物と考えられる。北側の柱列が、ほ場整備により削平されているため、建物の規模は不明である。柱穴の平面形は円形で、柱穴の規模は、直径が30～35cm、深さ40～50cmである。P4のみ平面形が長方形を呈し、深さも20cmと浅いため、建物の柱穴ではない可能性も考えられる。柱間の間隔は1.8mと推定される。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。

#### 掘立柱建物6（第29図）

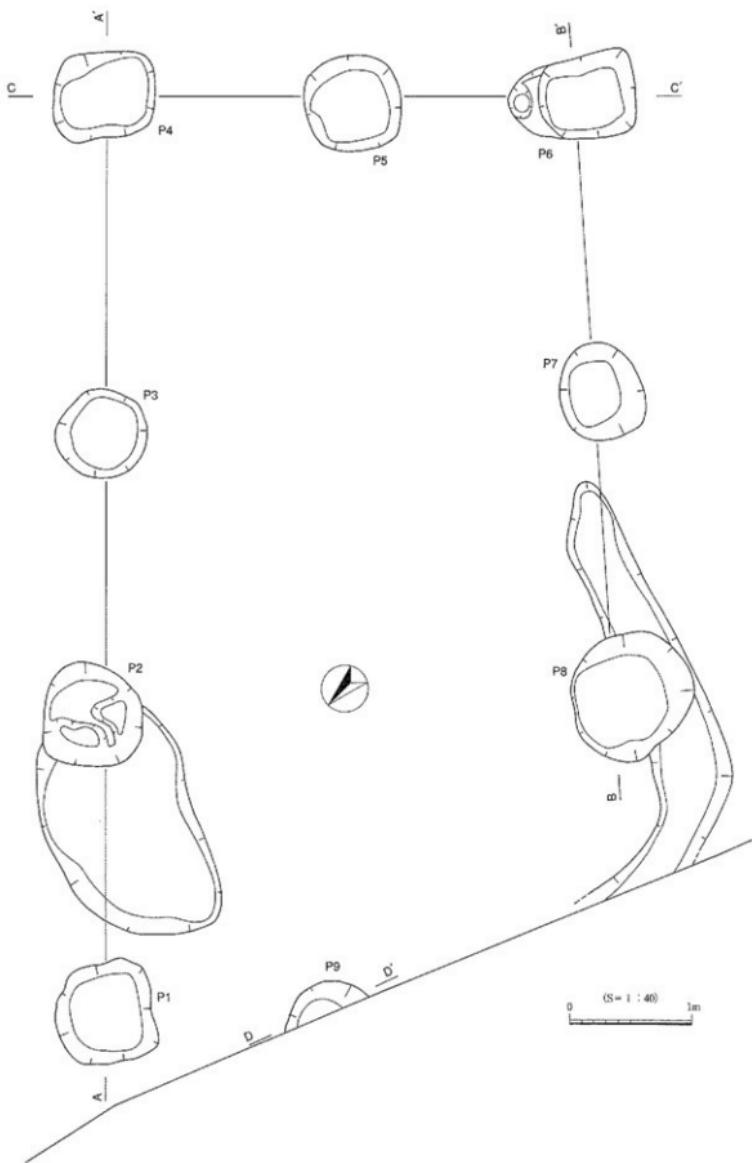
5区北端部で検出した、2間×3間以上の規模を持つ掘立柱建物である。北側の柱列が、ほ場整備により削平されているため、建物の規模は不明である。柱穴の平面形は円形で、柱穴の規模は、直径が30～50cm、深さ40～50cm、柱間の間隔は、東西方向が2m、南北方向が2.3m程度と考えられる。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。

#### 掘立柱建物7（第30、31図）

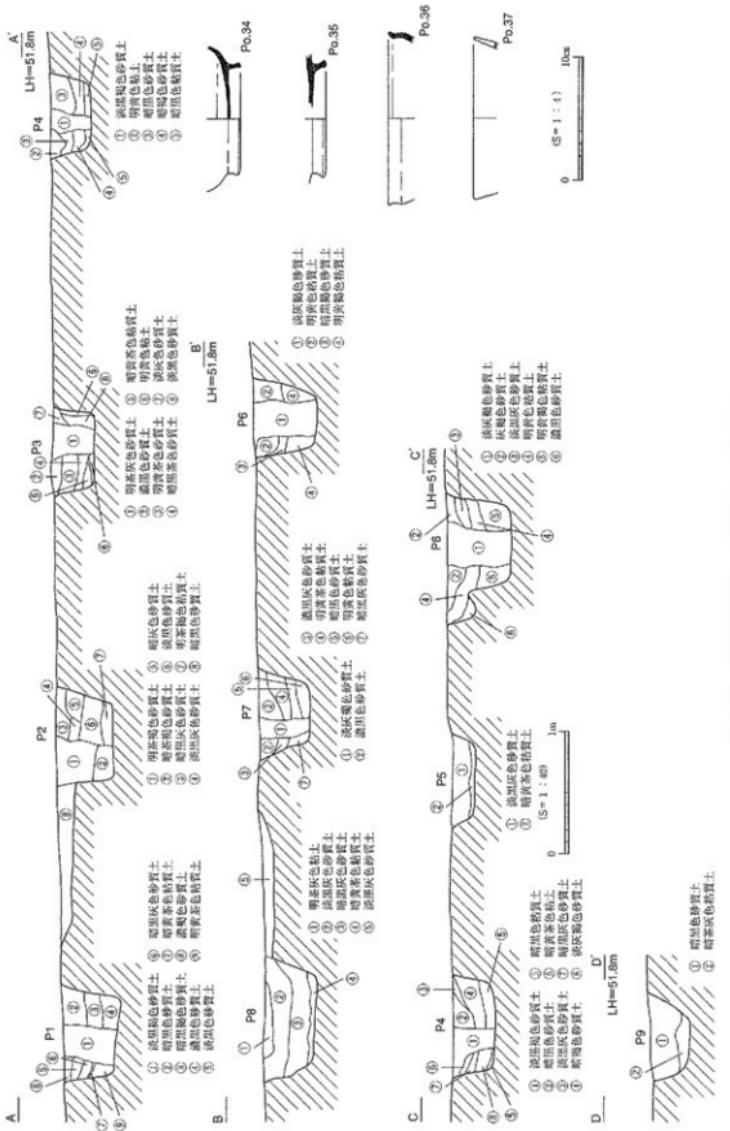
6区で検出した、2間×3間の規模を持つ大型の掘立柱建物である。西端部の柱穴は、ほ場整備により消滅している。柱穴の平面形は、建物の角に相当するP1、P4、P6は方形ないし長方形で、他の柱穴は円形、隅丸方形を呈している。柱穴の規模は、建物の角にあたるP1、P4、P6が一辺70～80cmで、深さは30～50cm程度である。その他の柱穴は、直径が60cm～1mで、深さは30～50cmである。柱間の距離は、棟側が2.5m、妻側が2mであったと推測される。また、柱穴の土層には柱根の痕跡が残っているため、柱根部は抜き取られていないものと考えられる。遺物は、柱穴P2の埋土中から須恵器壺身Po.34～Po.36、土師器壺身Po.37が出土している。この建物の時期は、柱穴内から出土した遺物から、奈良時代前期以降のものと考えられる。



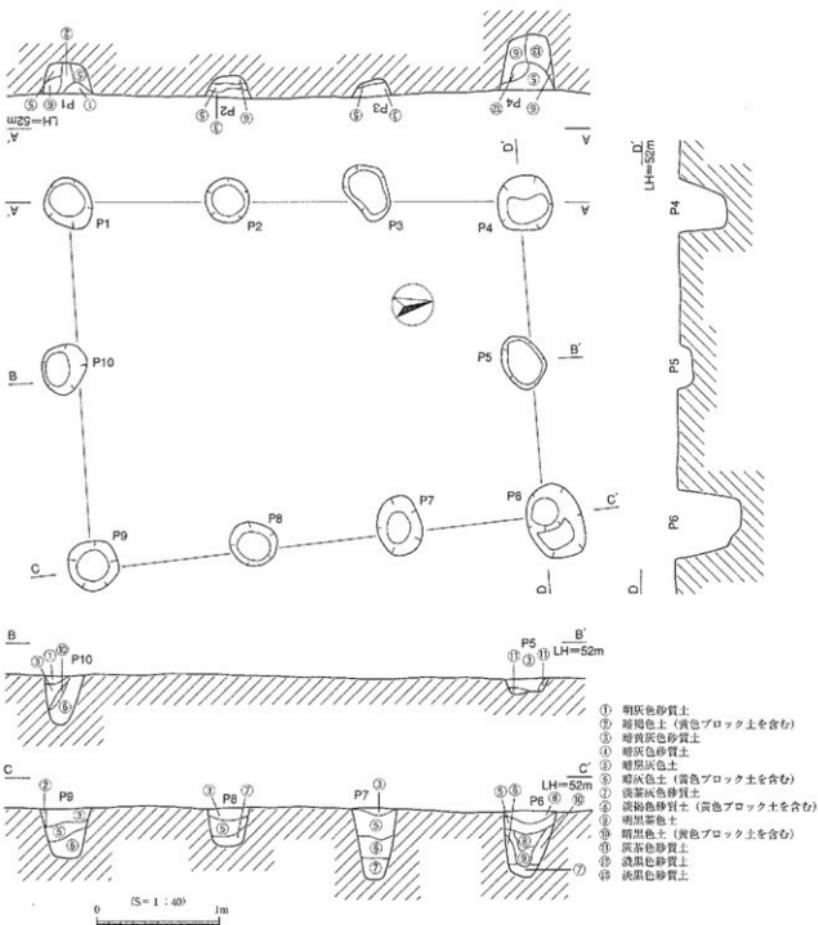
第29図 掘立柱建物 6 遺構図



第30図 掘立柱建物 7 造構図 1



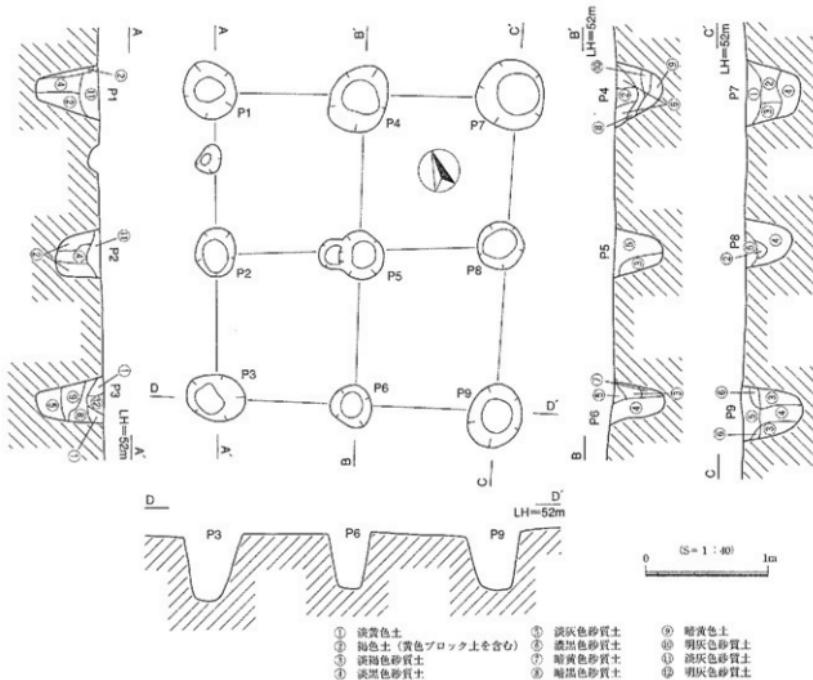
第31図 掘立柱建物7 遺構図2・遺物図



第32図 挖立柱建物 8 遺構図

#### 掘立柱建物 8 (第32図)

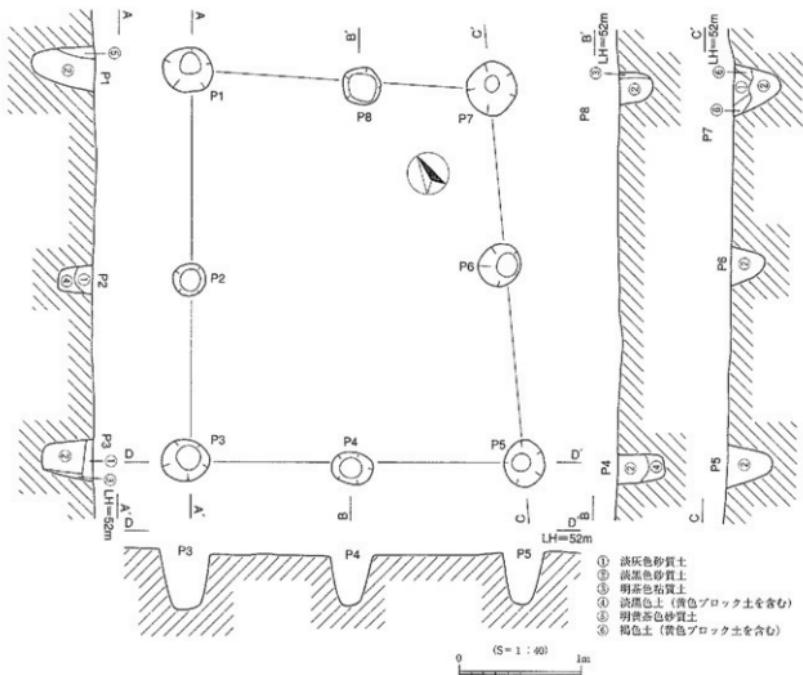
6 区で検出した、2間×3間の掘立柱建物である。この建物は、東南側に向かって柱間が広くなつておらず、平面形は台状を呈する。柱穴の平面形は円形で、規模は直径が30~40cm、深さは15~60cmと不揃いである。柱間の距離は、1.2~1.5m程度である。また、柱穴の土層断面からは、柱痕を確認することが出来なかつたため、柱は抜き取られているものと考えられる。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。



第33図 挖立柱建物 9 遺構図

#### 掘立柱建物 9 (第33図)

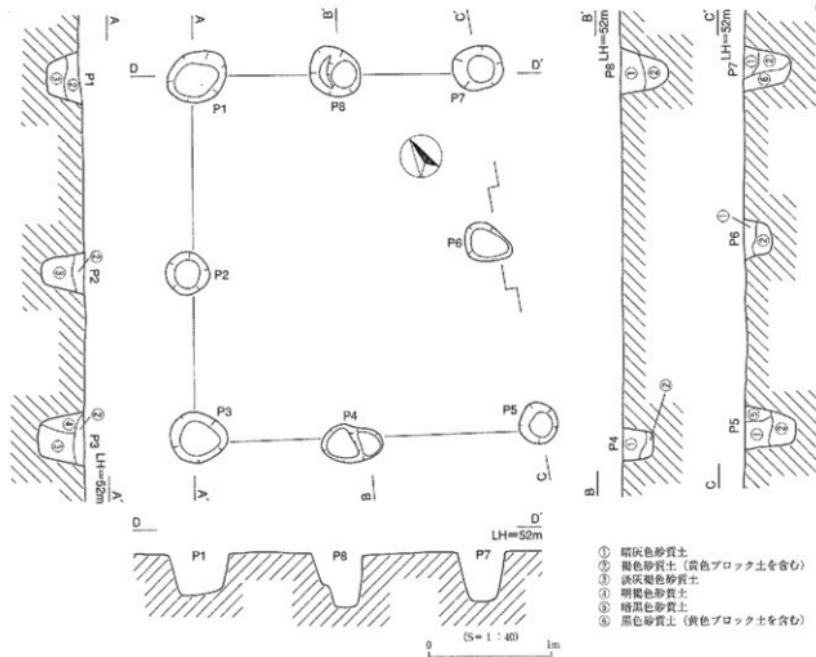
5区で検出した、3間×3間の掘立柱建物である。柱穴は9本あり、総柱の建物と推定される。また、柱穴P8は、落し穴3の埋土を切っている。柱穴の平面形は円形で、規模は直径が30~50cm、深さ40~50cm、柱間の距離は1.2mである。この建物の南側には、掘立柱建物10、11が建てられているが、掘立柱建物10の柱穴とは50cm程度しか離れていないことや、建物の主軸方向がずれていることから、時期的に前後するものと考えられる。また、掘立柱建物11とは、約1m程度離れており、同時期に並存していた可能性も否定できない。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。



第34図 掘立柱建物10 遺構図

#### 掘立柱建物10（第34図）

5区の南側で検出した、2間×2間の掘立柱建物である。掘立柱建物11と重複するが、柱穴の切り合いで無く、前後関係を明らかにすることは出来なかった。また、柱穴の配置や間隔が掘立柱建物11とほぼ同一のものであり、建物の建替にあたって同じ部材を転用して建て直した可能性も考えられる。柱穴の規模は、直径が25~40cm、深さ30~50cm、柱間の距離は、1.1~1.6m程度と不揃いである。建物の平面形は、南東側の柱穴が広がっているため、ややいびつな台形状を呈する。ただ、この建物の西側に位置する掘立柱建物8も同様に南側の柱間が広くなっていることから、何らかの建物の構造上の制約があった可能性も考えられる。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。



第35図 挖立柱建物11 遺構図

#### 掘立柱建物11（第35図）

5区の南側で検出した、2間×2間の掘立柱建物である。掘立柱建物10と重複して建てられており、前後関係が生ずるものと考えられる。この建物も、掘立柱建物10と同様に、南側の柱間が広くなっている。建物の平面形は台形状を呈している。また、柱間の寸法が、掘立柱建物10とほぼ一致しているため、建物の建替にあたって同じ建物の部材を使用している可能性も考えられる。その場合、この建物の方が、北側の柱穴P1の深度が浅くなっていることから、建替の際に掘立柱建物10の柱の埋没部分を切り詰めて使用しているものと推測されるため、この建物の方が新しい段階のものである可能性も考えられる。柱穴の平面形は円形で、規模は直径30~45cm、深さ25~40cmである。柱間の距離は、1.1~1.6m程度である。この建物の時期は、柱穴内からの出土遺物が無く不明である。

### 土坑1（第36、37、38図）

2区で検出した、不整形の土坑である。規模は長辺が3m、短辺が約2.5m、深さ20cmである。内部からは、須恵器甕の底部片Po.45がまとめて出土しているほか、須恵器坏身、壺、土師器皿、鉄滓、砥石、鉄床石片が出土している。このうち、鉄滓の詳細については、第5節の鉄関連遺物の項目で述べる。また、埋土の土壤水洗を実施していないため、鍛造剥片などの微細な遺物については不明であるが、この遺構は鍛冶作業に伴い排出された鉄滓などを投棄した廃棄土坑と考えられる。

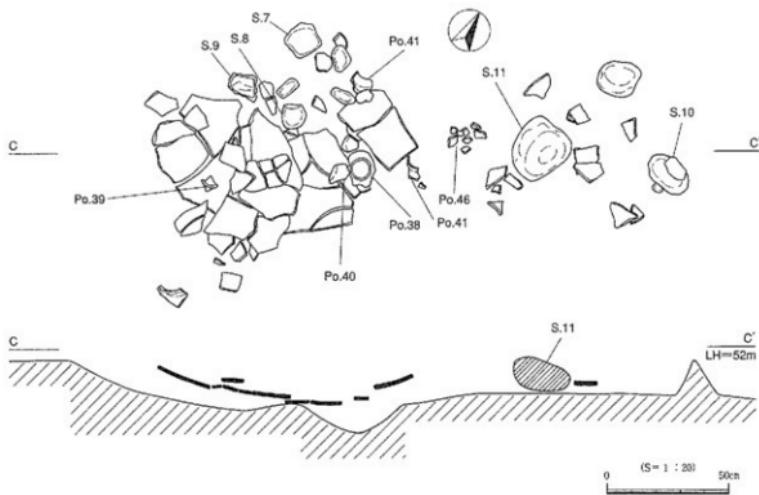
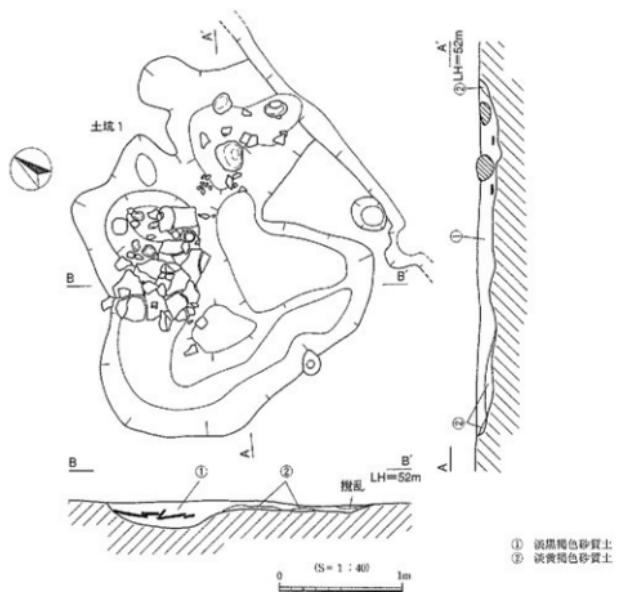
**出土遺物** 須恵器は坏身、壺、甕、鉢が出土している。坏身底部Po.38は、高台が外方に張り出し、口縁への立ち上がり部も高台脇からやや離れた位置にある。Po.41は肩の張る短頸壺。Po.42はやや頸部が細い壺、Po.43は甕の体部片で表面には火を受けた痕跡が認められる。Po.45は復元胴径が108.4cm、器高は1mを超える須恵器大甕で、底部には窯詰めの際に窯道具として用いられた甕片が付着している。Po.44は口径33.8cmの鉢で外面にタキ、内面に当て具の痕跡が残る。土師器は、皿Po.46、製塙土器Po.47、甕Po.48が出土している。S.7は鉄床石の破片と考えられるもので、他は砥石である。この遺構の時期は、出土した遺物から奈良時代前葉から中葉のものと考えられる。

### 土坑2（第39、40図）

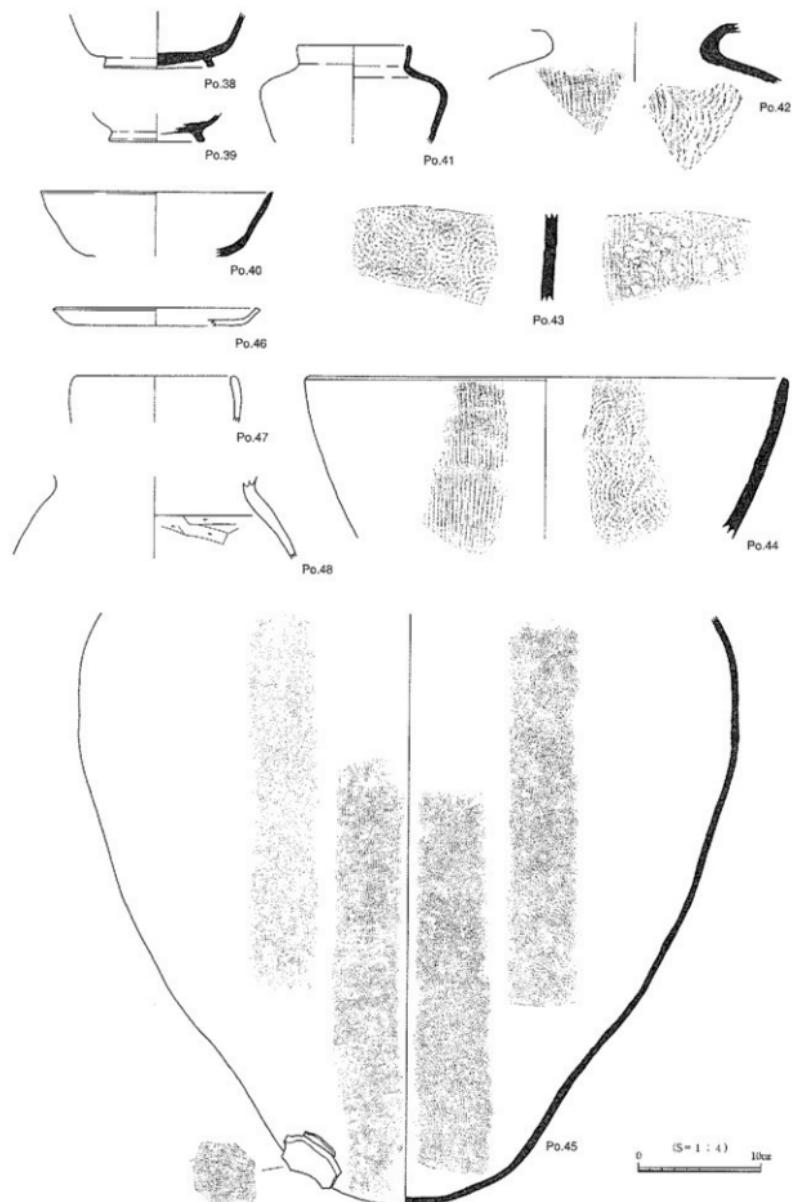
6区で検出した、大形の土坑である。遺構の西側が、ほ場整備により削平されているが、平面形は梢円形と推定され、長径5.3m、短径4m程度、深さ40cmの規模を測る。土坑内には、さらに小規模な土坑状のピットが認められるが、切り合い関係は認められず、土坑2の埋没と同時に埋もれているものと考えられる。ピット1は、直径70cm、深さ50cmの円形土坑である。ピット2は、直径60cm、深さ10cmの浅い掘り込みである。また、土坑2の南側には、検出長が約5m、幅45cm、深さ25cmの溝が走り、西側にも長細い土坑状の窪みが見られるが、内部からの出土遺物はなく、土坑2との関係については不明である。土坑2の出土遺物は、全て埋土中から出土したもので、土師器、須恵器、鉄滓などの遺物が出土している。このうち、鉄滓の詳細については、第6節の鉄関連遺物の項目で述べる。また、小ピット内の埋土を水洗したところ、砂鉄が含まれていることが判明した。

**出土遺物** Po.49は口縁端部がくびれる須恵器坏身である。Po.50、Po.51は土師器の坏身片。Po.52は土師器坏蓋のつまみ部である。Po.53～Po.56は土師器甕。Po.57は土師質の土錐である。Po.58は外面を粗くヘラケズリする須恵器長頸壺の体部で、高台は付けられていない。Po.59は須恵器大甕の頸部片。S.12は砥石として用いられた円礫である。

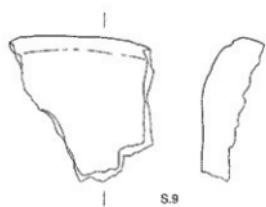
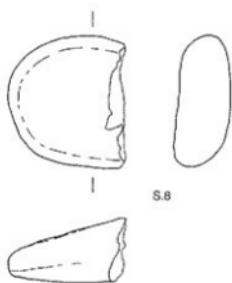
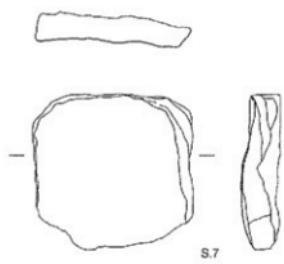
この遺構の性格については、埋土中より出土した遺物から、鉄器生産に関連するものであったと考えられるが、具体的な機能については不明である。この遺構の時期は明らかにし難いが、須恵器坏身Po.49や、高台を省略した須恵器長頸壺Po.58の存在から、奈良時代後葉から平安時代初頭頃のものと考えられる。



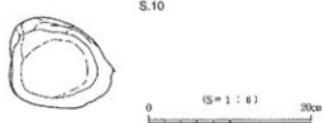
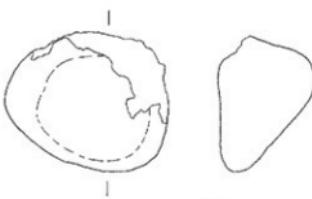
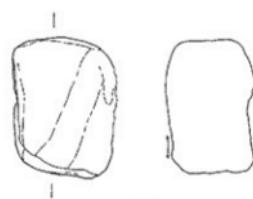
第36図 土坑1 遺構、遺物出土状況図



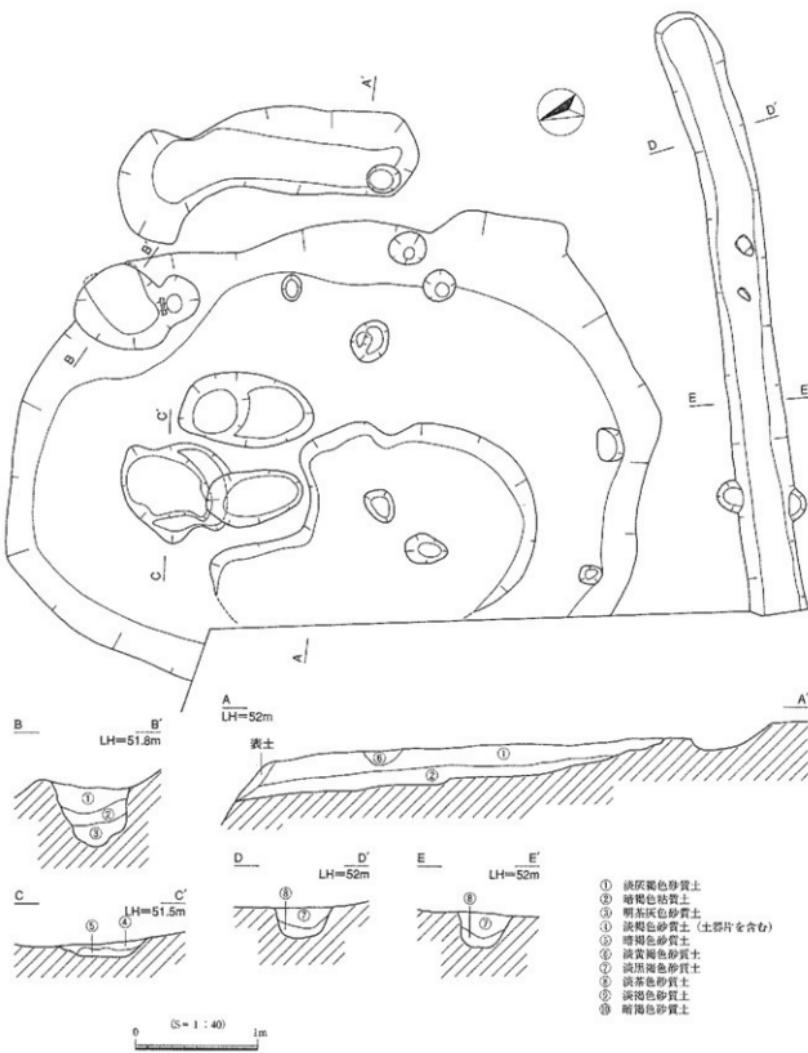
第37図 土坑1 遺物図1



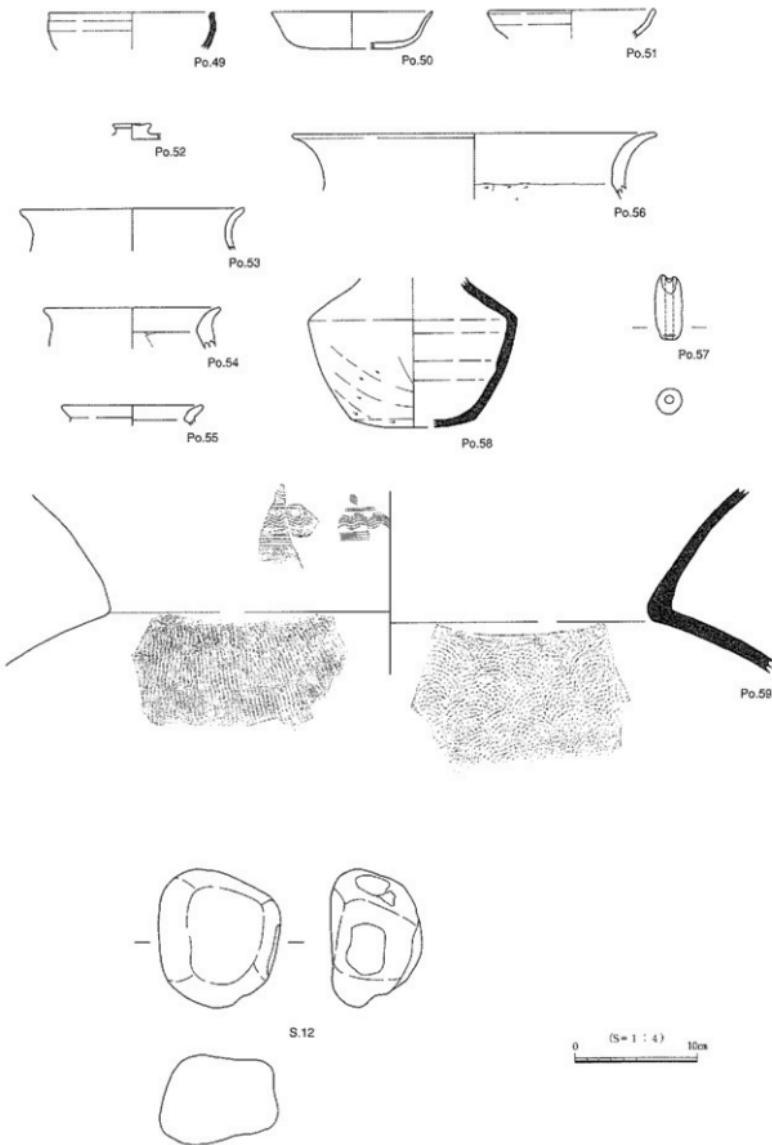
0 (S=1:4) 10cm



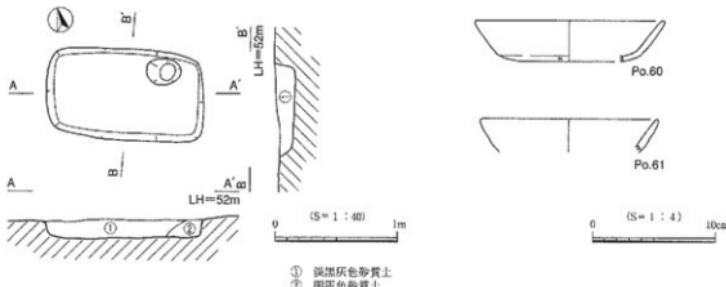
第38図 土坑1 遺物図2



第39図 土坑 2 遺構図



第40図 土坑2 遺物図



第41図 土坑3 遺構・遺物図

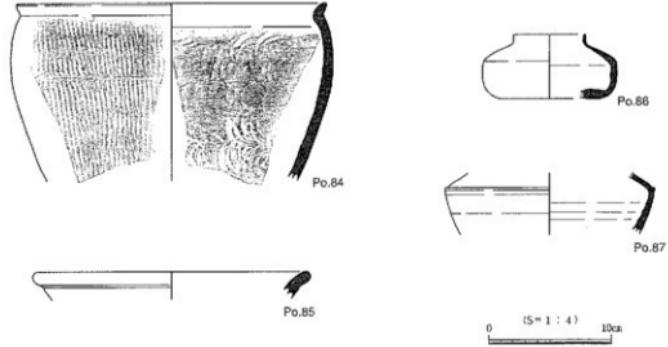
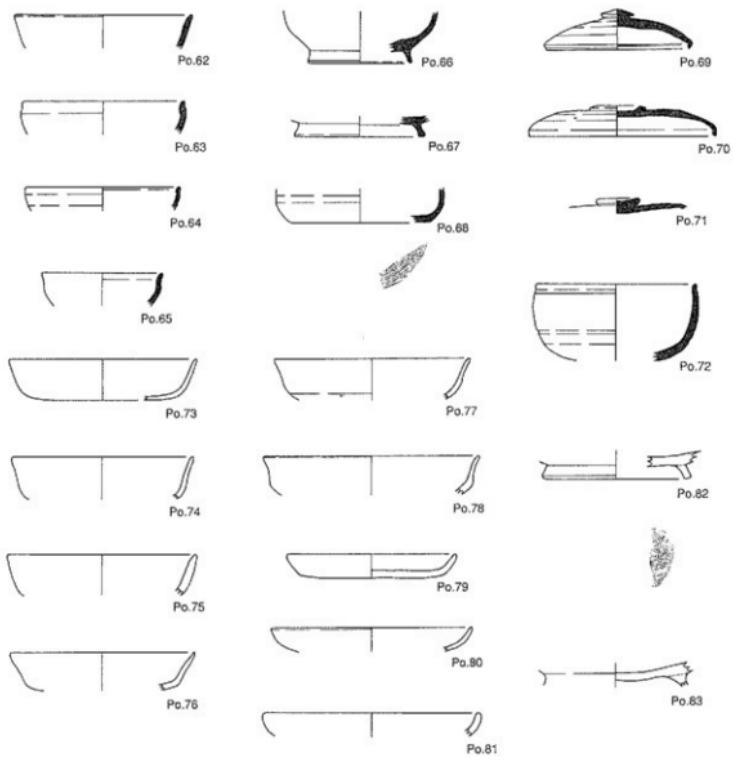
### 土坑3（第41図）

3区の北側で検出した、長方形の土坑である。遺構の規模は、長辺1.28m、短辺0.74m、深さ15cmである。出土遺物は、埋土中から土師器の坏身片Po.60、Po.61が出土している。この遺構は、形態的な特徴から土壙墓ではないかと考えられるが、周間に同様の遺構が存在しないため、断定はできない。この遺構の時期は、出土遺物から奈良時代以降のものと考えられる。

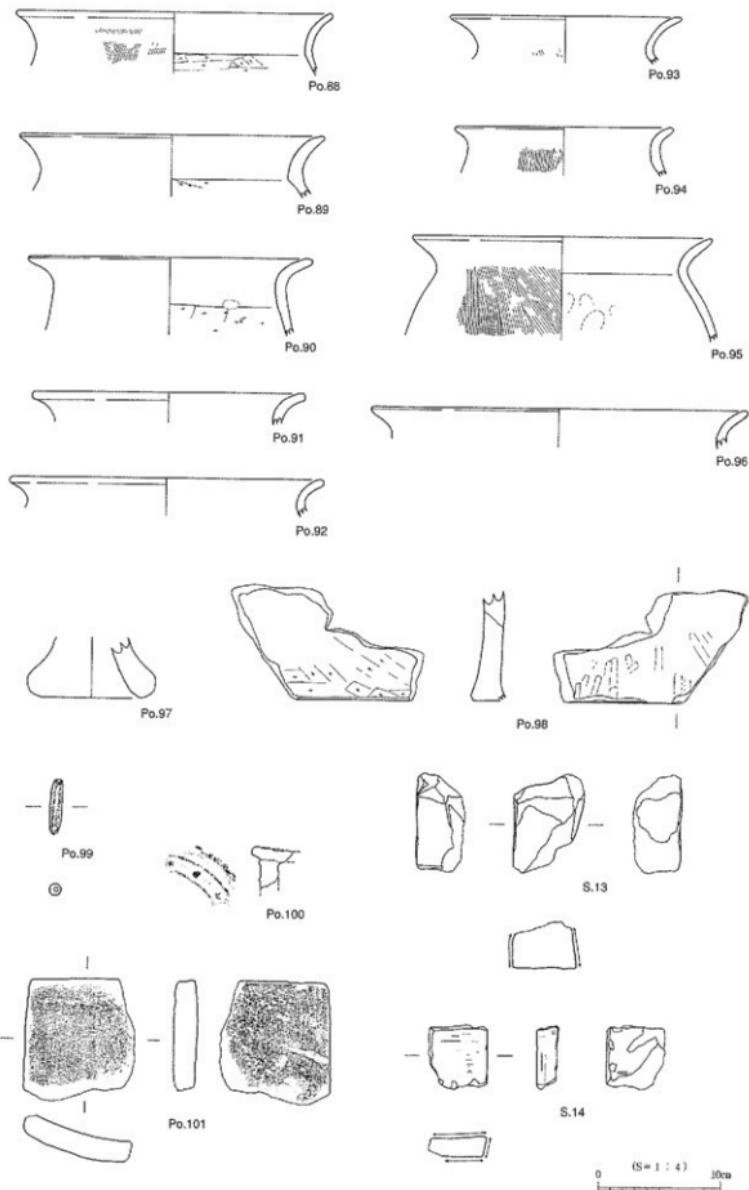
### 第5節 遺構に伴わない遺物（第42、43図）

遺構に伴わない遺物は、遺物包含層の黒褐色砂質土から出土したものが多く、地区別では4区の北部からの出土が目立った。恐らく、その他の地点が近代以降の水田耕作によるローリングを受けているためと考えられる。遺物の時期は、奈良時代に属するものがほとんどを占めている。

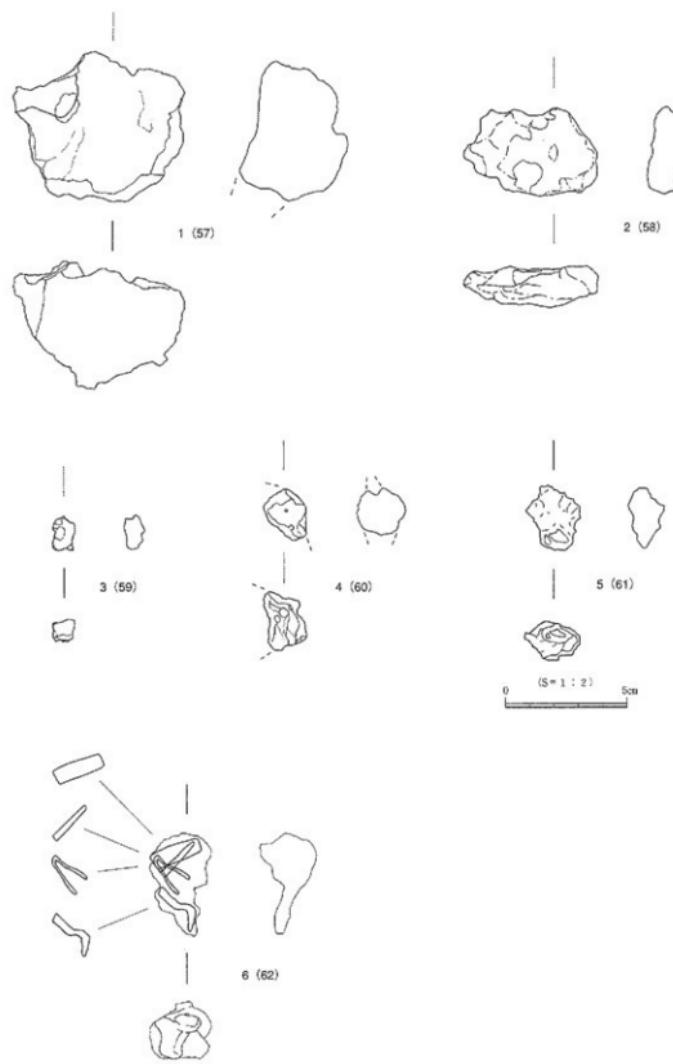
**出土遺物** 須恵器は坏身、坏蓋、塊、鉢、壺が出土している。坏身は、口縁部が外方に伸びるものと、屈曲するものがあり、前者は高台の付くもの、後者は底部糸切のものに分けられる。坏蓋は、宝珠つまみのものとリング状のものがあり、どちらもかえりはつかない。塊Po.72は復元口径が13cmの小形品で、口縁端部がやや屈曲する。鉢Po.84は口縁端部が屈曲するもので、外面にタタキ痕、内面に同心円状の当て具痕が残る。壺は口縁部片のほか、インク壺型のものや、肩部が張り出し、突帯が巡るものが出土している。土師器は坏身と皿があり、高台の付くものと底部をヘラケズリするものがある。また、表面を赤色塗彩するものが多い。甕は、口縁が「く」の字に屈曲するもので、外面をタテハケ、内面はヘラケズリされるものが主体を占める。Po.97は土製支脚の底部で、筒部が中空になるものと考えられる。Po.98は移動式窓の底部片である。Po.99は長さが4.5cmの土錘である。Po.100は軒丸瓦で、外区に珠紋が巡る。同様の軒丸瓦は、坂中廃寺などに類例がある。Po.101は平瓦で表面にタタキ目、布目が残る。砥石、金属製品、鉄滓については、次節の鉄関連遺物の項目で詳細を述べる。



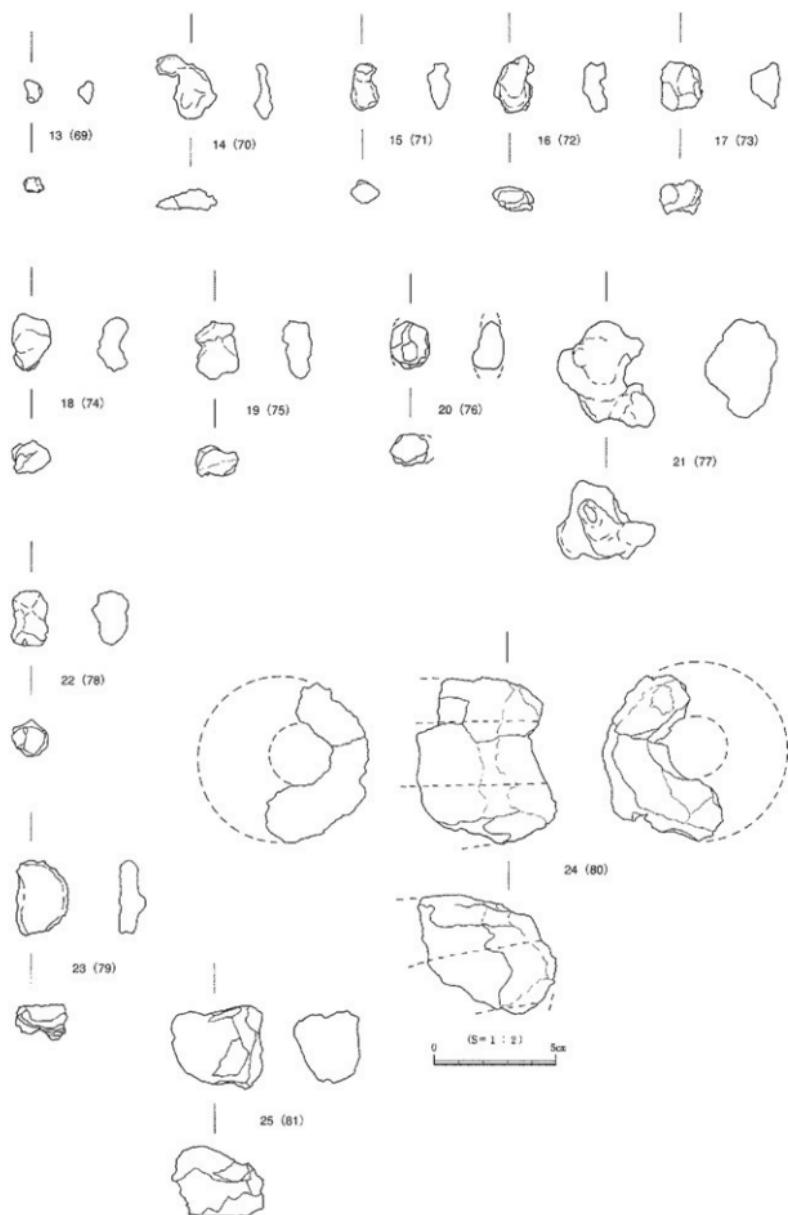
第42図 遺構外出土遺物図 1



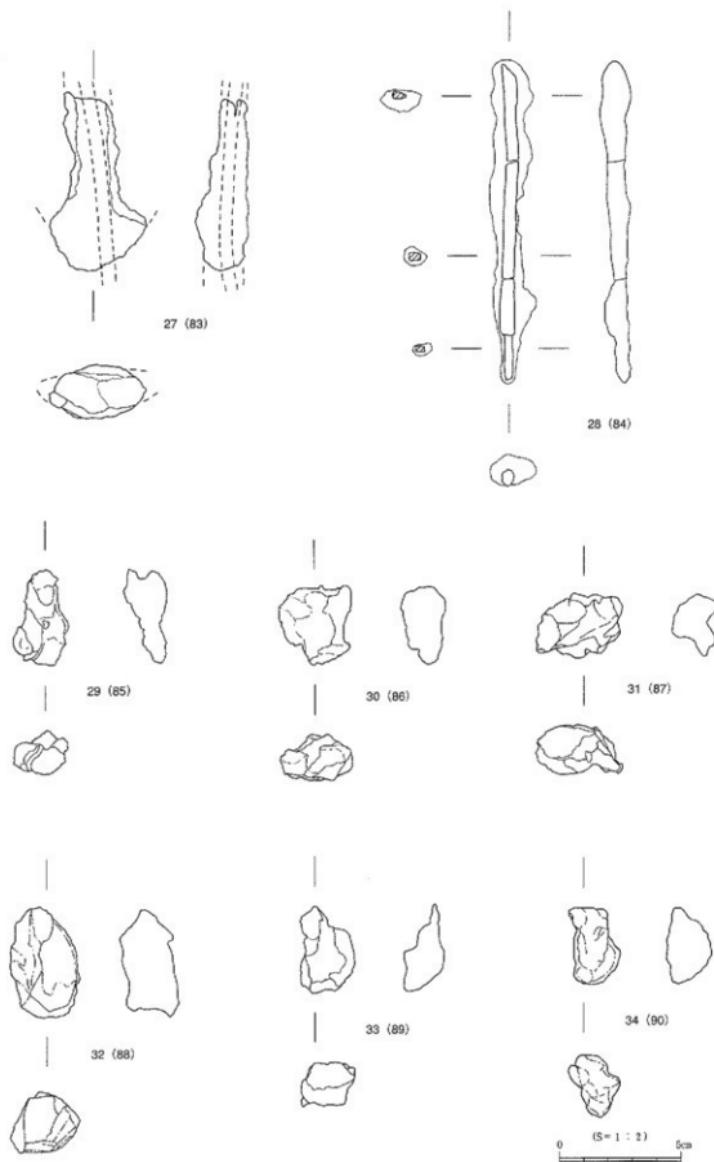
第43図 遺構外出土遺物図2



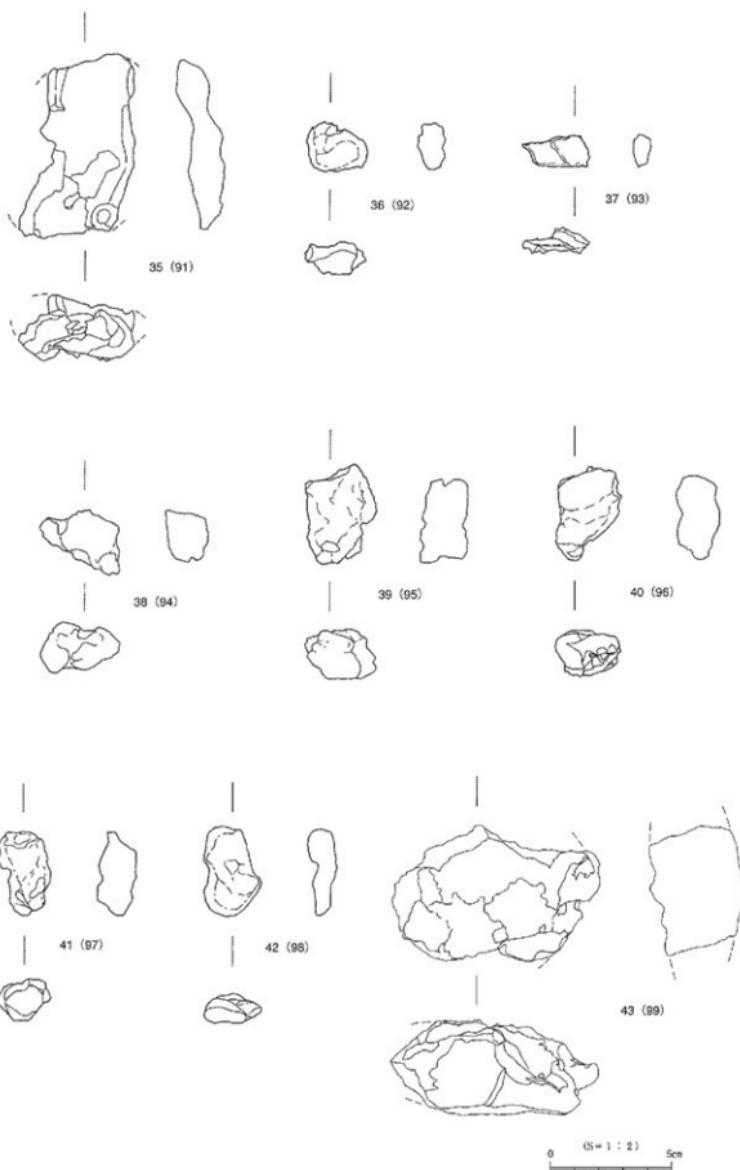
第44図 諏訪西土取場遺跡 鉄関連遺物実測図 1



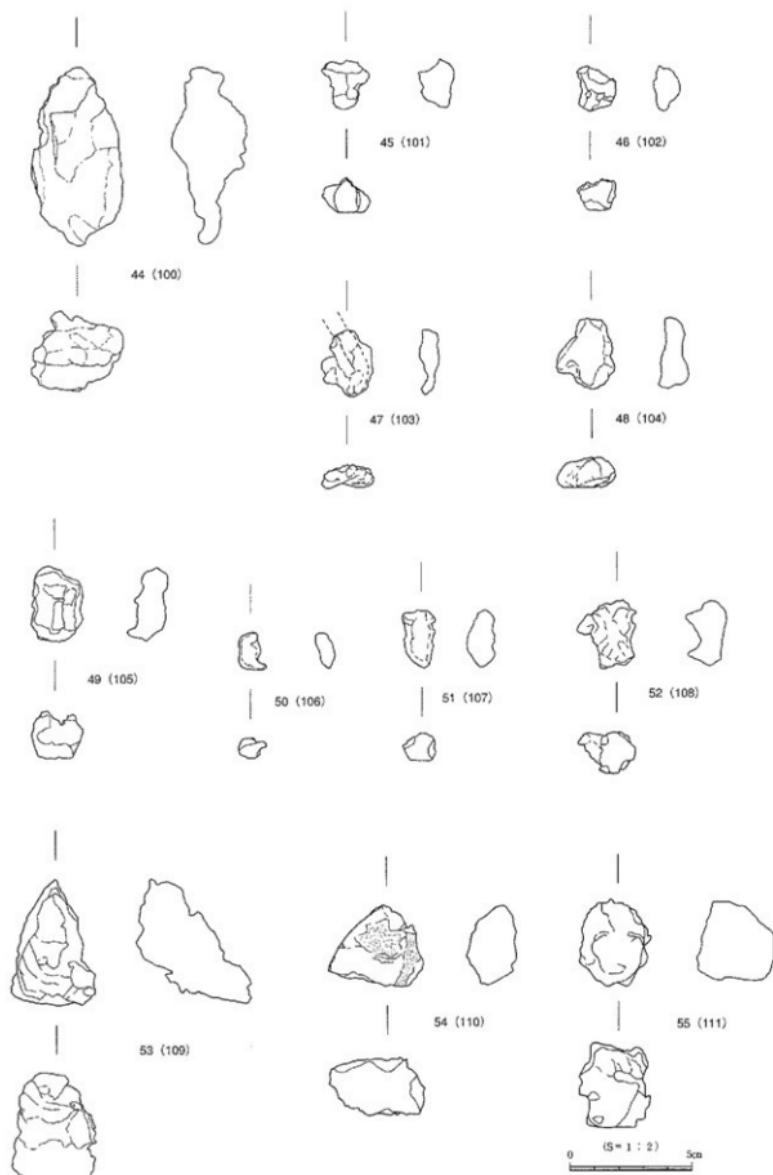
第45図 謙訪西土取場遺跡 鉄関連遺物実測図 2



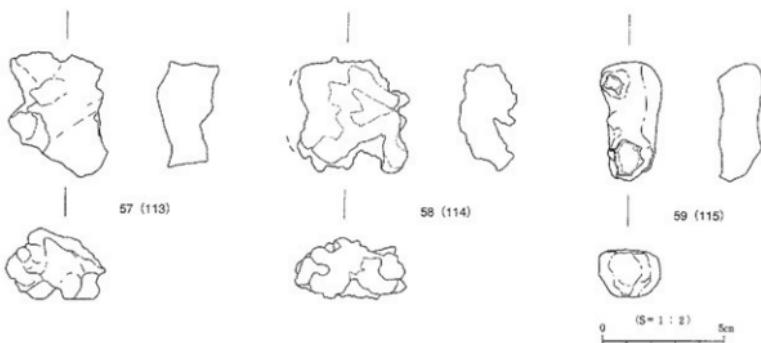
第46図 講訪西土取場遺跡 鉄関連遺物実測図 3



第47図 諏訪西土取場遺跡 鉄門連遺物実測図 4



第48図 諏訪西土取場遺跡 鉄関連遺物実測図 5



第49図 諏訪西土取場遺跡 鉄関連遺物実測図6

## 第6節 鉄関連遺物（第44～49図）

鉄関連遺物は、土坑、柱穴、表土中から鉄滓や砥石などが多数出土している。鉄関連遺物の総数は59点あり、その内訳は鉄滓32点、鉄製品11点、羽口4点、炉材破片4点、鉄床石1点、道具石1点、砥石5点、自然砂鉄1点である。本報告書では、これら全ての資料を掲載している。また、土坑2の小ピット内埋土全量を水洗選別した結果、砂鉄を検出したが、分析の結果から、元々この遺跡の土壤に含まれていた自然砂鉄であることが判明した。鉄関連遺物の整理は、穴沢義功氏の指導により分類作業を進め、水洗後に実測、写真撮影、X線撮影のち、構成図、観察表を作成し、分析資料の抽出を行った。

### 土坑1出土遺物（第38図、第44図1～6）

1、2は粘土質が主体の椀形鍛冶滓で、1は上面左寄りに羽口の小破片が遺存している。2も1と同様に粘土質が主体である。3～5は粘土質の溶解物で、3は金属鉄を熱間加工した際の炉材破片と見られる。6は、細長い釘状の鉄製品が4点以上付着したもので、故鉄利用のリサイクル鍛冶の存在を推定させるものである。7(S.7)は鉄床石の破片と見られる大形の平石。8(S.8)は道具石と見られる被熱した痕跡を残す花崗岩質の円礫である。9(S.9)～11(S.11)は砥石で、自然礫を使用している。どちらの資料も底面は荒く、擦痕はそれほど明瞭ではない。

### 土坑2出土遺物（第40図、第45図13～25）

13～21は小形の含鉄鉄滓である。13～20は重量が0.4～5g程度の鉄滓で、20は砂鉄起源の製錬滓であるという分析結果が得られている。また、21は内部に鉄製品の破片を含んでいるものと考えられ、故鉄利用を疑わせるものである。22、23は鉄製品の破片である。24、25は羽口の破片で、同一個体の可能性もある。26(S.12)は、安山岩質の砥石である。

### 掘立柱建物2出土遺物（第46図27）

27は細長い形状をした椀形鍛冶滓で、内部に鍛造の鉄製品を飲み込んでいる。恐らく、何らかの理由で、鉄製品の破片が鍛冶炉の滓中に落ち込んだものと考えられる。

### 掘立柱建物3出土遺物（第46図28）

28は片刃の長頭鐵で、鍛造品である。3つに分割し全体に酸化土砂が付着しているが、長さ13.2cm、幅は0.5cm程度のものと考えられる。

遺構に伴わない鉄関連遺物（第43図、第46～49図）

遺構に伴わない鉄関連資料は、鉄製品、鍛冶滓、羽口、砥石である。29は薄板状の鉄製品と楔形の鉄製品が2枚重なったもので、長頸鎌か刀子の刃部と見られる。30～36は椀形鍛冶滓である。35はメタル度H（○）の含鉄鉄滓であり、表面は錆化が著しく亀裂が顕著に見られる。37は鉄製品で、鍛造の刀子か長頸鎌の刃部と見られる。38、39は椀形鍛冶滓の破片で、38は下面に木炭痕と炉床土がわずかに付着している。40は鍛冶滓で、内部に鉄片を含んでいる可能性が考えられる。41は鍛造品と見られる鉄製品の破片である。42は扁平な鍛冶滓で、上下面に木炭痕が点在している。43、44は椀形鍛冶滓で、43は中形の精鍛鍛冶滓である。45～49は鍛冶滓で、いずれも小形のものである。50～52は鉄製品で、50は小釘の足部様を呈する。51はU字状の鉄製品。52はバッカル状の鉄製品である。53、54は鍛冶羽口の先端部と見られる破片である。表面には鍛冶滓の付着が見られる。55は下面に木炭痕の残る粘土質溶解物で、全体的に発治しており軽量である。56（S.13）は3面に砥面を持つ砥石である。57は小形の椀形鍛冶滓の破片である。58は木炭痕を多く残す椀形鍛冶滓である。59は方柱状の鉄製品で、鍛造品と見られる。

表5 米子市諒訪西土取場遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図 No	層位・地区	器種	法量 (cm)			色調	調整		備考
			口径	底径	器高		内面	外面	
21	Po.23	落し穴2	縄紋土器、鉢	19.6		14.6	褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
21	Po.24	落し穴2	縄紋土器、鉢	(37)		(30.2)	暗褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.25	落し穴2	縄紋土器、鉢	(33.4)		(22.9)	褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.26	落し穴2	縄紋土器、鉢	(28.2)		(12.4)	暗褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.27	落し穴2	縄紋土器、鉢	(38.6)		(23.6)	褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.28	落し穴2	縄紋土器、鉢	(26.1)		(23.1)	暗橙褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.29	落し穴2	縄紋土器、鉢	(29.9)		(18.3)	淡灰褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ後 ミガキ
22	Po.30	落し穴2	縄紋土器、鉢			(19.6)	淡褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
22	Po.31	落し穴2	縄紋土器、鉢			(24.1)	暗赤褐色	ケズリ後ナデ	ケズリ
24	Po.32	掘立柱建物1	須恵器、坏身	(13.2)		(3.4)	灰色	ナデ	ナデ
27	Po.33	掘立柱建物4	土師器、移動式竈			(13.2)	暗褐色	ケズリ	ケズリ
31	Po.34	掘立柱建物7	須恵器、坏身		(8.8)	(2.7)	暗灰色	ナデ	ナデ
31	Po.35	掘立柱建物7	須恵器、坏身		(9.4)	(1.7)	灰色	ナデ	ナデ
31	Po.36	掘立柱建物7	須恵器、坏身	(13.9)		(2.2)	淡灰色	ナデ	ナデ

表6 米子市諏訪西土取場遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図	No	層位・ 地区	器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
31	Po.37	掘立柱 建物7	土師器、坏身	(11.8)		(2.9)	赤褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
37	Po.38	土坑1	須恵器、坏身		8.8	(4.6)	淡灰色	ナデ	ナデ	
37	Po.39	土坑1	須恵器、坏身		(7.7)	(2.3)	淡灰色	ナデ	ナデ	
37	Po.40	土坑1	須恵器、鉢	(19)		(5.3)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
37	Po.41	土坑1	須恵器、短頸壺	(9.2)		(8)	淡灰色	ナデ	ナデ	
37	Po.42	土坑1	須恵器、甕			(4.9)	灰色	当て具痕	タタキ、頸部ナデ	
37	Po.43	土坑1	須恵器、甕体部片			(7.1)	暗灰色	当て具痕	タタキ	被熱痕有り
37	Po.44	土坑1	須恵器、鉢	(38.8)		(13.2)	黒灰色	当て具痕	タタキ	
37	Po.45	土坑1	須恵器、甕			(97.6)	灰色	当て具痕	タタキ	底部外面に置台の須恵器片付着
37	Po.46	土坑1	土師器、皿	(16.4)	(12.4)	1.5	赤褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
37	Po.47	土坑1	土師器、製塙土器	(12.8)		(3.8)	淡橙褐色	ナデ	ナデ	
37	Po.48	土坑1	土師器、甕			(6.7)	褐色	ケズリ	ナデ	
40	Po.49	土坑2	須恵器、坏身	(13.4)		(2.8)	赤色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
40	Po.50	土坑2	土師器、坏身	(13)	(7.8)	3.1	赤茶褐色	ナデ	風化	赤色塗彩
40	Po.51	土坑2	土師器、坏身	(13.4)		(2.8)	赤褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
40	Po.52	土坑2	土師器、坏蓋			3.2	(1.4)	赤褐色	ナデ	赤色塗彩
40	Po.53	土坑2	土師器、甕	(18)		(3.4)	褐色	風化	風化	
40	Po.54	土坑2	土師器、甕	(14.2)		(3.4)	褐色	ケズリ	ナデ	
40	Po.55	土坑2	土師器、甕	(11.2)		(1.7)	褐色	ケズリ	ナデ	
40	Po.56	土坑2	土師器、甕	(29.6)		(5.4)	橙褐色	ケズリ	ナデ	
40	Po.57	土坑2	土鍤		2.3	0.6	5.4	濃茶色	てづくね成形	
40	Po.58	土坑2	須恵器、壺			(10.2)	(12.2)	灰色	ナデ	肩部ナデ、下半ケズリ
40	Po.59	土坑2	須恵器、甕				(15.1)	淡灰色	当て具痕	タタキ、頸部に波状紋

表7 米子市諫訪西土取場遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図	No	層位・地区	器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
41	Po.60	土坑3	土師器、坏身	(15.3)	(8.2)	3.4	赤褐色	ナデ	風化、下半ケズリ	赤色塗彩
41	Po.61	土坑3	土師器、坏身	(14.4)		(2.8)	淡褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
42	Po.62	6区—表土	須恵器、坏身	(14.5)		(2.8)	淡灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.63	4区—3層	須恵器、坏身	(13.4)		(2.7)	青灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.64	6区—表土	須恵器、坏身	(12.5)		(2)	暗青灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.65	4区—3層	須恵器、坏身	(11.8)		(2.7)	淡灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.66	6区—3層	須恵器、坏身		(8.3)	(4.2)	暗灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.67	3区—3層	須恵器、坏身		(10.4)	(1.7)	淡灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.68	6区—表土	須恵器、坏身		(10.8)	(2.8)	淡灰色	ナデ	ナデ、底部糸切	
42	Po.69	6区—3層	須恵器、坏蓋	(11.7)	2.8	3.4	淡褐色	ナデ	ケズリ後ナデ	
42	Po.70	6区—3層	須恵器、坏蓋	15.4		2.5	灰色	ナデ	ケズリ後ナデ	
42	Po.71	2区—3層	須恵器、坏蓋		(3.6)	(1.3)	灰褐色	ナデ	ナデ	
42	Po.72	5区—3層	須恵器、塊	(13)		(6.3)	青灰色	ナデ	ナデ	
42	Po.73	6区—表土	土師器、坏身	(15.3)	(8.6)	3.4	赤褐色	風化	風化	赤色塗彩
42	Po.74	6区—3層	土師器、坏身	(14.7)		(3.5)	赤褐色	風化	ナデ	赤色塗彩
42	Po.75	6区—3層	土師器、坏身	(15.4)		(3.4)	赤褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
42	Po.76	6区—3層	土師器、坏身	(15)		(3.2)	淡黃褐色	風化	ナデ	赤色塗彩
42	Po.77	6区—3層	土師器、坏身	(16)		(3.4)	淡褐色	ナデ	ナデ、下半ケズリ	赤色塗彩
42	Po.78	2区—3層	土師器、坏身	(17.6)		(3.2)	淡褐色	風化	ナデ	
42	Po.79	6区—3層	土師器、皿	(13.6)	(8.6)	2	淡橙褐色	ナデ	風化	赤色塗彩？
42	Po.80	6区—表土	土師器、皿	(16.3)		(2)	暗褐色	風化	風化	
42	Po.81	6区—3層	土師器、皿	(17.4)		(2)	橙褐色	ナデ	風化	赤色塗彩
42	Po.82	4区—3層	土師器、坏身		(11.2)	(2.3)	褐色	風化	ナデ、底部糸切	

表8 米子市諒訪西土取場遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図	No	層位・地区	器種	法量(cm)			色調	調整		備考
				口径	底径	器高		内面	外面	
42	Po. 83	6区—3層	土師器、壺身			(2)	褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
42	Po. 84	6区—3層	須恵器、鉢	(25)		(14.6)	暗灰色	当て具痕、ナデ消し	タタキ	
42	Po. 85	4区—3層	須恵器、壺	(22)		(2.3)	淡灰色	ナデ	ナデ	
42	Po. 86	4区—3層	須恵器、壺	(5.8)	(11.1)	5.3	青灰色	ナデ	ナデ	
42	Po. 87	6区—表土	須恵器、長 瓢壺			(5)	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
43	Po. 88	6区—3層	土師器、甕	(25.6)		(5.1)	淡褐色	ケズリ	ハケ後ナデ	
43	Po. 89	6区—表土	土師器、甕	(24.6)		(5.1)	暗褐色	ケズリ	ナデ	
43	Po. 90	2区—表土	土師器、甕	(22.2)		(6.3)	淡橙褐色	ケズリ	ナデ	
43	Po. 91	2区—3層	土師器、甕	(22)		(2.6)	橙褐色	ナデ	ナデ	
43	Po. 92	6区—3層	土師器、甕	(25)		(3.2)	褐色	ナデ	ナデ	
43	Po. 93	6区—3層	土師器、甕	(18.4)		(3.9)	褐色	風化	ハケ	
43	Po. 94	2区—表土	土師器、甕	(17.4)		(4)	暗褐色	ナデ	タテハケ	
43	Po. 95	4区—3層	土師器、甕	(24.4)		(8.5)	褐色	ナデ、指押 さえ	タテハケ	
43	Po. 96	2区—3層	土師器、甕	(30.4)		(3.2)	淡褐色	ナデ	ナデ	
43	Po. 97	北4区	土師器、土 製支脚		(8)	(4.9)	褐色	ナデ	ナデ	
43	Po. 98	2区—表土	土師器、移 動式竈			(9.3)	淡褐色	ケズリ	ケズリ	
43	Po. 99	4区—表土	土鍤	1	0.3	4.5	淡茶褐色		てづくね成 形	
43	Po. 100	4区—表土	軒丸瓦			(3.4)	灰褐色			
43	Po. 101	4区—3層	平瓦			(9.9)	淡褐色	布目痕跡	風化	

表9 米子市諒訪西土取場遺跡出土石器観察表

図	No	層位・地区	種別	法量(cm)			備考
				最大長	最大幅	最大厚	
23	S.6	落し穴3	擦石	8.2	8.8	5.9	
38	S.7	土坑1	鉄床石?	13.3	12.7	3.2	
38	S.8	土坑1	道具石?	10.9	9.7	5.3	
38	S.9	土坑1	砥石	12	11.8	6.2	
38	S.10	土坑1	砥石	17.6	13.1	11.4	
38	S.11	土坑1	砥石	23	27.1	16.4	
40	S.12	土坑2	砥石	10.1	11.4	7.5	
43	S.13	北2区—3層	砥石	8.1	5.8	4	
43	S.14	南2区—3層	砥石	5.2	4.9	1.8	

表10 諏訪西土取場邊鉄闇遺物分析資料一覽表  
(洋、メタル又は胎土)

資料番号	地区名	構成番号	遺物種類	重量(g)	磁着度	メタル度	分析コメント	マクロ	換算P線	X線回折	化学分析	耐火度	放射樹脂	断面分析	分析位置	採取方法	観察集合	モニタ前X線透過期
1	土坑1	1	楕形鍛冶萍(小・半溶解石付き)	132.0	なし	なし	粘土質萍と半溶解石部を	○	—	—	—	—	—	—	長軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
2	土坑1	4	楕形鍛冶萍(含金属粒子)	4.0	1	なし	粘土質萍中の微小金属粒子を中心	—○	—	—	—	—	—	—	資料全体微小金属粒子を中心用い	○	—○—○古代	
3	土坑1	6	鉄製品(鍛造品、散銭?)	20.0	4	H(○)	メタル部を中心	○	—○	—	—	—	—	—	短軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
4	土坑2	12	砂鉄(遺跡、自然)	20.0	5	なし	自然砂鉄として	○	—	—	—	—	—	—	必要量選択	○	—○—○現代	
5	土坑2	20	鍛冶萍(含銅)	5.0	2	鏽化(△)	萍部を	○	—	—	—	—	—	—	長軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
6	土坑2	24	羽口(鍛冶)	115.0	2	なし	羽口として	—○	—	—	—	—	—	—	短軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
7	掘立柱1	27	楕形鍛冶萍(含鉄製品)	52.0	3	鏽化(△)	萍部と鉄製品の両方を	○○○○	—	—	—	—	—	—	短軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
8	掘立柱3	28	鉄製品(鍛造品、建物)	26.0	3	鏽化(△)	鉄製品として	○—○○	—	—	—	—	—	—	短軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
9	2区表土	35	楕形鍛冶萍(極小・含銅)	65.0	4	H(○)	萍部を中心	○○—○	—	—	—	—	—	—	短軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
10	2区3層	43	楕形鍛冶萍(中)	222.0	2	なし	萍部を	—○—○○—○	—	—	—	—	—	—	長軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	
11	4区3層	58	楕形鍛冶萍(極小・含銅)	46.0	3	鏽化(△)	萍部を中心	—○—○○—○	—	—	—	—	—	—	長軸端部直線状の切斷	○	—○—○古代	

第50回 米子市原訪西土取場遺跡 鉄閣遺物構成図 (No. 1)

土坑 1		土坑 2		掘立柱建物 1 桶形溜池 (含鉄) (含鉄製品)	
桶形溜池 (小・半溜桶石付)	粘土質陶器 (鉄冶系)	鍛錬石?	鍛錬石	鐵製品 (鉄冶品)	鋤口 (鉄冶) 銹化 (△)
分析資料No.1 1 (57)	3 (56)		9 (65)	13 (69)	22 (78)
	4 (60)		14 (70)	24 (80)	27 (83)
分析資料No.2 5 (61)			15 (71)	分析資料No.6 16 (72)	分析資料No.7
桶形溜池 (鐵製品、含鉄) 銹化 (△)	H (○)		17 (73)	鉄製品 (未製品) L (●)	鐵製品 (鐵冶品) 鋤 銹化 (△)
	8 (64)		18 (74)		
			10 (66)	19 (75)	
				20 (76)	23 (79)
分析資料No.3 2 (58)				21 (77)	26 (82)
	6 (62)			12 (68)	29 (84)
分析資料No.4 1 (分析No.1)	2 (分析No.2・3)			分析資料No.4 1 (分析No.5)	分析資料No.4 1 (分析No.6)
				1 (分析No.4)	1 (分析No.6)
					2 (分析No.7・8)

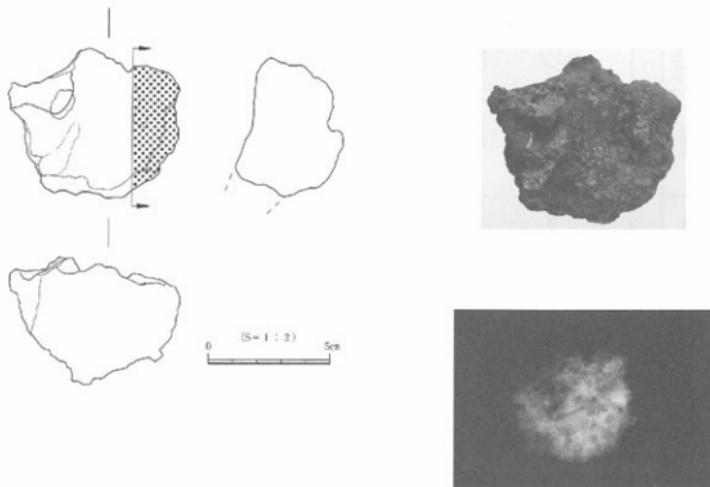
( ) 内の数字は際底番号

第51図 米子市諏訪西土取場遺跡 鉄陽造遺物構成図 (No. 2)

北区				北2区 売土				北4区 売土				北4区 3層				
鉄製品(鐵造品) 銹化(△)	柳形鏡冶津 (極小)	柳形鏡冶津 (極小・鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	柳形鏡冶津 (鑄)	
30 (86)	35 (91)	36 (94)	38 (94)	41 (97)	41 (97)	43 (99)	45 (101)	45 (101)	46 (102)	46 (102)	48 (106)	50 (106)	53 (109)	53 (109)	57 (113)	
分析資料No. 9 31 (87)	分析資料No. 10 32 (88)	分析資料No. 10 36 (92)	分析資料No. 10 39 (95)	分析資料No. 10 40 (96)	分析資料No. 10 42 (98)	分析資料No. 10 44 (100)	分析資料No. 10 45 (105)	分析資料No. 10 46 (106)	分析資料No. 11 51 (107)	分析資料No. 11 51 (107)	分析資料No. 11 55 (111)	分析資料No. 11 55 (111)	分析資料No. 11 58 (114)	分析資料No. 11 58 (114)	南2区 3層	
33 (89)	34 (90)	37 (93)	40 (96)	42 (98)	42 (98)	44 (100)	45 (105)	45 (105)	46 (106)	46 (106)	48 (108)	52 (108)	56 (112)	56 (112)	59 (115)	
分析 1 (分析No. 9)							1 (分析No. 10)								1 (分析No. 11)	
																( ) 内の数字は解説番号

分析資料番号1

出土状況	遺跡名	蹴訪西土取場遺跡		遺物No	1	黒との差を分ける	57	分類	項目	津	メタル				
	出土位置	土坑1		時期：根拠	8世紀：粘土土器										
試料記号	検 程： SUW 1 化 学： — 放射化： —	法 規 格：	長 種 70.0 mm 色 調 61.0 mm 厚 さ 52.0 mm	表：茶褐色～ 地：灰黑色～ 底：淡茶褐色	基層色～ 底：茶褐色～ 地：灰黑色～ 底：淡茶褐色	遺存度 破面数	破 片	新	マ タ ロ 候 使 度 E.P.M.A E.顯 回 分 化 学 断 火 度 カ ロ リ ー 放 射 化 X 線 通 過	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○					
	遺物種類 (名称) (名前)		範 形 砕 治 泥 (小・半溶解石付き)		重 量 132.0 g	メタル度	な し		断面樹脂						
	観察所見		平面、不整六角形をした複数の、楕形破治泥板の粘土質溶解物。上面は生きており、側面半面上に点々と礫面が点在する。礫面数は6を数える。上面左寄りには羽口先の小破片が原位置のまま遺存する。肉厚は約8mm。津質は左上部寄りが粘土質が強く、上面は黒色がラス化している。下半右寄りは外観的には茶褐色で、極小の楕形破治泥板ながら比重が低く、内部は粘土質土器と見られる。下面には2.5mm大以下の石片が半分潜ったような形で遺存する。上面右側にも1cm大以下の石片由来と推定される突出部がある。津質は密度が低く粘土質主体で、通常の楕形破治泥とは異なる。色調は表面の7割方が茶褐色で、上面の一部のみ黒色となる。地は灰黑色から淡茶褐色。												
分析部分	長軸端部1/4を直線状に切断し、粘土質津と半溶解石部に留意して分析に用いる。残材透視。														
施 考	やや厚みを持った極小の楕形破治泥板の外観をもつ資料で、津質は羽口先や歯治炉の炉壁上由来の粘土質である。上面に残る羽口先の小片から判断すると、通常の楕形破治泥の生成状態とはほぼ似通った条件下で形成されたもので、津質のみ粘土質という違いをもつ。下面に突出する表面の一部が半溶解の石片は、①歯治炉の炉底付近に突出していた石片を巻き込んだ可能性と、②津を急速に固化するために意図的に投入された可能性を持つ。後者のような事例は、8世紀代を中心に官衙開闢の歯治工房に比較的多い技術傾向をもつ。														



## 分析資料番号2

出土状況	遺跡名	源訪西土取場遺跡		遺物No	4	測定の通り番号	60	項目	津	メタル			
	出土位置	上坑1		時期: 楠撲	8世紀: 出土土器								
試料記号	検 碾: SUW-2 化 学: — 放射化: —	SUW-2 法 量	長 径 2.2 mm 短 径 1.7 mm 厚 さ 2.4 mm	色 調 表: 黒褐色～ 灰褐色 底: 黑褐色～ 灰褐色	遺存度 破面数 1	破片 3 含浸 —	マ ク ピ 鉛 銅 金 E P M A X 線 回 折 化 学 分 析 耐 水 度 カ ロ リ ー 吸 射 化 X 線 透 過	分 析	○ ○ ○	○ ○ ○			
	遺物種類 (名称) 観察所見	粘土質溶解物 (含金属粒子)	重 量 4.0 g	メタル度 なし	断面樹脂 —								
	分析資料No.1の左上半部に残る黒褐色気孔の粘土質溶解物によく似た小破片。上面から右側面上半は液滴状の表面で、下面は小さな楕円状で何かに接触した後地面となる。左側部から塑性の両端部にかけてが破面となり、内部の気孔が露出している。破面数は3を数える。外観的には何の要因も無い粘土質溶解物の小破片ながら、透過X線像に直径0.11mmの微細な粒状をした輝点が確認されることから分析対象とした。画像上ではほぼ円形で、端部に1ヶ所、粒状部によくみられるような小さな空洞が認められる。なお、白色輝点の内部や外周部にやや黒い影があるのは、対象金属の錆化、または微細な気孔のためか。資料全体の色調は表面が黒褐色か灰褐色で、地は灰黒色から灰褐色となる。粘土質溶解物中の気孔は、4mm以下で、0.01mm以上でのものまで無数に見られる。												
分析部分	資料全体を用いて、粘土質溶解物中の微細金属粒子を中心に分析に用いる。残材返却。(試料取り時には、特に不明金属の微細粒子に注意の事)												
備 考	分析資料No.1の肩部に外観や色調がよく似ている粘土質溶解物。通常、津中の微細な金屬鉄の粒子は腐化してしまうはずなのに、本資料中の微細粒子はかなりくっきりと透過X線像に見て取れる。そのため、銅系や銀、金などの腐化されにくく金属性の微細粒子ではないか、という疑いのもとに分析対象とした。鍛冶専科に、弥生時代や古墳時代などの前時代の素材を用いてリサイクル鍛冶を行っている事例が全国的に時おり確認されており、本例もその疑いを持つ資料である。その意味では、分析資料No.1が橢形鍛冶部に似た形状を持ちながらも、粘土質主体である点や、分析資料No.3が鉄器や鉄片の集合体としての放散を覺わせる点と、素材という点では共通する要素を持つ可能性を持つ。分析資料No.7の真製品を内部に含む複数鍛冶部なども、その可能性がある。												



### 分析資料番号 3

出土状況	道終名		跡跡西上取場遺跡		遺物No	6	(黒との通し番号)	62	分 類	項 目	添 メタル
	出土位置	土坑 1	時刻: 梱拂	8世紀: 出土土器							
試料記号	検 箔: SUW-3	長 径 25.0 mm	表: 茶褐色	遺存度	破 片				マ ク ロ	○	
	化 学: —	法 番 径 42.0 mm	色 調	底: 茶茶褐色	破面数	3?			檢 測 度	○	
	放射化: —	厚 さ 23.0 mm	磁着度	4	前含浸	—			E. P. M. A.		
	遺物種類 (名称) (鉄製品、放鉄?)	量 量 20.0 g	メタル度	II (○)	断面樹脂	○			X 線 回 折 化 学		
観察所見	平面、不整「く」の字状をした鉄製品の塊である。表面はやや不明点が多いが、3以上と考えられる。外観上は酸化土砂に覆われており、鍛治薄の一種のようにも見えるが、透視X線像には細い針状のものが4片集合していることがある。内3片は幅2.5mm前後の圓錐の小軸状で、もう1片は幅7mm前後の鉋状である。それぞれの動向は異なるが、大きく2群に分けられる。1群は左肩より上から右下に向くもので、もう1群は左下から右上方向に向かっている。以下、個別に記録しておく。(1)手側に突出する細い小軸状で、途中で「S」字状にうねっている。頭部を欠き、体部の中の最大幅が約3mmを測る。(2)手側の小軸部に逆U字形に鋸歯状で、薄の右側部中央に凹部がわずかに突出している。(3)幅2mm程の細軸状で、斜め右上に向かい1.8mm程の長さで手側部に伸びている。細軸状ながら(3)と重複しているため、やや判別しにくい。頭部は半球形。(4)やや厚みのある鉋状で(3)と上に重層する。長軸方向に沿って鍛造らしき直線状の筋目がすこしに認められる。資料本体の左側部に破面が露出しており、幅8mm前後、厚さ4.5mm前後の角柱状であることがわかる。わずかに厚みが上半部に凹かい薄くなっている可能性もある。全体に鈍化が進み、外周部には酸化土砂が不規則にとりまいている。色調は表面の酸化土砂が茶褐色で、地の鉄製品は濃茶褐色から黒茶褐色に鈍化している。								耐 火 度		
	分析部分										
備 考	解剖端部1/3を直線状に切断し、メタル部を中心に分析に用いる。残材断面に崩壊歴有。残材還却。										
	細い小軸状の鉄製品破片と小鉋片からなる集合体である。土坑1からは、分析資料No.1の粘土質主体の楕円形鍛治薄や須器を伴っており、セッタ関係があるとすれば、鍛治素材として回収された鉄片や鉄製品破片からなる放鉄とも考えられる。構成された土坑2出土の資料の内にも、やや似た形状を持つものが含まれている。分析資料No.2や7、8、9なども放鉄のリサイクル鍛冶に伴う可能性を示すものかもしれない。ただし、現代の操作下直下の土坑からの出土品であり、8世紀代より後の資料が混在している可能性を含めて分析資料として選択されているが、比較的、出土した武岡遺物の全体傾向が似ているということはいえよう。										



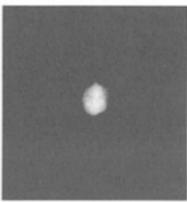
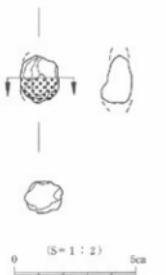
分析資料番号 4

出土状況	遺跡名	諏訪西上取場遺跡		遺物No	32	測定の順番	68	分析	項目	測定	メタル
		出土位置	土坑 2						マ タ ロ	酸	鉄
試料記号	検 級: SUW-4	法	長 径 mm	色 調	表: 黒 色	透 底 度	—		根 拠	鉄	○
	化 学: —		短 径 mm		地: 黒 色	破 面 度	—		根 拠	鉄	○
	放射性: —		厚 さ mm	観 察 度	5	前 合 委	—		根 拠	鉄	○
遺物種類 (名称)	砂鉄(遺跡、自然)	量	重 量 20.0 g	メタル度	な し	表面樹脂	—		E.P.M.A.	元 酸 化	根 拠
観察所見	土坑 2 の覆土を鍛冶関連の微細遺物(粒状滓や鍛造済片)の有無を確認するため、土糞袋 3 袋回収した中から抽出した資料。手順としては、まず土砂の水洗を行い、自然乾燥後、強力磁石で分離回収した砂鉄主体の資料である。磁着物は25g程度回収され、内20.0gを定量した上で、強力磁石により①強者強の砂鉄と②強者弱の砂鉄主体の資料に二分して貯蔵・記録した。	元 酸 化	根 拠	根 拠							
分析部分	土坑 2 の土砂を鍛冶関連の微細遺物(粒状滓や鍛造済片)の有無を確認するため、土糞袋 3 袋回収した中から抽出した資料。手順としては、まず土砂の水洗を行い、自然乾燥後、強力磁石で分離回収した砂鉄主体の資料である。磁着物は25g程度回収され、内20.0gを定量した上で、強力磁石により①強者強の砂鉄と②強者弱の砂鉄主体の資料に二分して貯蔵・記録した。	根 拠	根 拠	根 拠							
備 考	本遺跡からは複数鍛冶跡が確認されるが、全体に粒度細がなく、パラツキがある砂鉄である。粒子は最大1.2mm大から最小が0.1mm大。中心粒度は0.35mm大を測るが、全体に粒度細がなく、パラツキがある砂鉄である。粒子の7割以上が角ばっており光沢を持つが、無光沢で黒褐色の色調を持つ粒子も3割方混在する。粒子の大部分のものは菱形の立体的な結晶をしている。磁石は見た目より弱め傾向を持つ。	根 拠	根 拠	根 拠							
	①全20.0gの内、10.2gを測る。黑色で光沢のある砂鉄である。全体の96%にある。粒径は最大1.2mm大から最小が0.1mm大。中心粒度は0.35mm大を測るが、全体に粒度細がなく、パラツキがある砂鉄である。粒子の7割以上が角ばっており光沢を持つが、無光沢で黒褐色の色調を持つ粒子も3割方混在する。粒子の大部分のものは菱形の立体的な結晶をしている。磁石は見た目より弱め傾向を持つ。	根 拠	根 拠	根 拠							
	②全20.0gの内0.8gを測る。石英質の砂鉄が半分ほど混在した砂鉄である。全20.0gの内、4%にあたる。磁石は弱いが、磁石に反応する0.4mm大以上の砂鉄や有色鉱物を半分ほど含んでいる。また、2箇所、くすんだ赤褐色の砂鉄も含まれており、これらは表面が全て摩滅して丸みを持っている。スコリア由来のものであろうか。	根 拠	根 拠	根 拠							



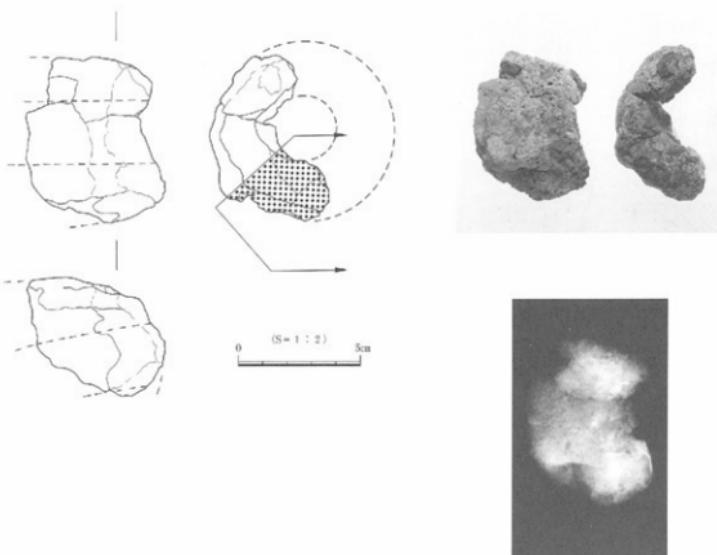
分析資料番号 5

出土状況	遺物名		遺物No	20	遺との通し番号	76	分 析 機 材	項目	津	メタル
	出土位置	土坑 2		時期：根据	8世紀：出土上器			マクロ	○	
試料記号	検 級： SUW-5 化 学： — 放射化： —	長 桿 16.0 mm 規 桿 20.0 mm 厚 さ 12.5 mm	色 調	表：茶褐色 地：茶褐色	遺存度 破面数	破片? 5?		E.P.M.A. X線回折 化学会社 耐火度 カラーリー 放射化 X線透視		
遺物種類 (名稱)	鐵冶滓 (含鉄)	量	鑑定度	2	前含浸	—				
観察所見	平面、不整六角形をした小さな薄片である。厚さ1.1cm前後の板状で側部は7割方が鏡面になっている。上面には、わずかに本炭痕らしき凹みを残す平坦気味の面を持つ。破面数は5としておく。側部に鏡面を持つ以外は特に目立った特色の無い薄片で、透光X線像には微細な気孔を持つ津内部が示されている。色調は表面、地とも茶褐色となる。									
分析部分	長軸端部 1/2 を直線状に切断し、鋤部を分析に用いる。残材返却									
備 考	分析資料No.6の鋤口とセットの分析資料とするために選択された薄片である。遺物名稱を鐵冶滓 (含鉄) としているのは、外観的な特徴からの判断である。土坑 2からは、さらに人ぶりの薄片が出土しているが、多くが不均質で、中には鉢片を含んでいるものが散見されるため、混在物の無いという点から本資料が選択された。									



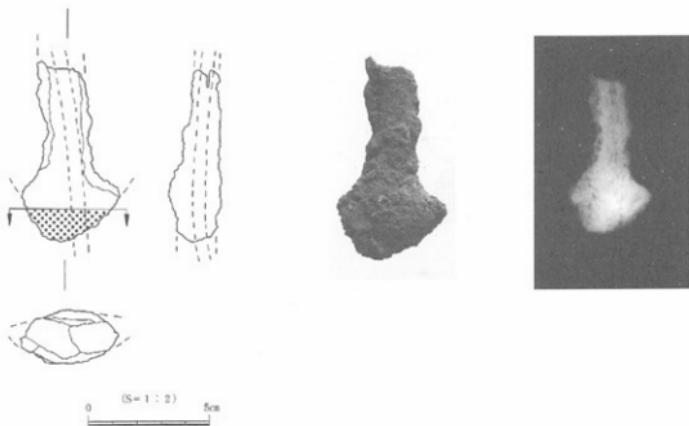
分析資料番号6

出土状況	遺跡名	諫訪西土取場遺跡		遺物No	24	(基との通し番号)	80	項目	測	上
	出土位置	土坑2		時期: 桓撫	8世紀: 出土土器					
試料記号	検 識:	SUW 6	法	長 径	57.0 mm	表:	淡黃褐色 ～黒褐色	遺存度	破 片	マ ク ロ
	化 学:	SUW-6	法	短 径	68.0 mm	色 調:	明褐色～ 地: 黒 色	破面数	7	破 壊 度
	放射化:	—	量	厚 さ	49.0 mm	磁着度	2	崩含浸	—	E P M A X 線 計 量 化 学 分 析 耐 火 度 カ ロ リ ー 熱 解 花 X 線 透 過
遺物種類 (名称)	羽口(鍛冶)	重 量	115.0 g	メタル度	な し	断面樹脂	—			
研究所見	羽口(10)先端部破片。径の1/2程度が重合し、体部側に向かい最大5.5cmほどが残存する。外面は8瓣方生きており、基部側个体と切削側の鋸齿や通風孔部の一部が画面となっている。破面数は8を数える。外側には長軸方向に向かう1.5cm前後の筋状の凹みが残されており、長軸方向に平行するきずり仕上げが体部には行われていることがわかる。先端部の溶接角度は20度強で、顎部には黒色ガラス質渕が突出している。顎部そのものは羽口装着溝の底面に接したものか、別の粘土質の接着板地となっている。先端部から体部にかけての外面とはや直角状の広さがある。通風孔部の先端部径は3.1cmを超えるもので、通風孔部壁面の下半には薄く渕が張付いている。筋は5mm以下での石灰質の石粒をやや多く含むもので、耐火性の渋そうな質感を示す。基部側の破面は明褐色に発色し、先端部周辺では黒色となる。スナなどの混和物は筋上中にはなし。									
分析部分	製輪無径1/3を直線状に切断し、羽口として分析に用いる。残材返却。									
備 考	鍛冶に用いられた可能性がある羽口の先端部破片。外側の整形板は8世紀代以降に特徴的な帯状のヘラケゼリによっている。また、本炭屑中に先端部のみを差し込む平安時代から中世の羽口の使い方とも異なり、鍛冶炉の炉壁の肩部に羽口装着溝を設けて、その中に羽口を挿入する形で使用されているという点では、正統な使用方法である。通風孔部の径は鍛冶羽口としては標準か、わずかに太めとなる。使用角度がやや緩いためか、通風孔部の下手には薄く渕が張付いている。分析資料No.5の鍛冶渦と同属性を持つ可能性がある資料である。									



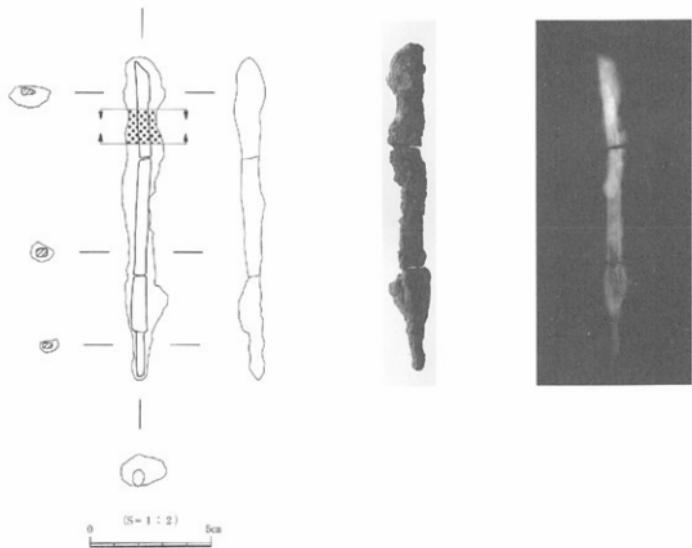
分析資料番号 7

出土状況	遺跡名	瀬訪西土取場跡		遺物No	27	(遺と通し番号)	83	分 析	項目	沿	メタル
	出土位置	掘立柱建物 1		時別: 植掘	8世紀: 出土土器				マクロ	機械	鏡面
試料記号	検 築:	SUW-7	長 広	40.0 mm	色 調	表: 濃茶褐色	遺存度	破 片	E P M A		
	化 学:	—	厚 さ	73.0 mm	地: 濃茶褐色	破面数	4		X 線回折		
	放熱化:	—	重 量	22.0 g	磁着度	3	前後浸	—	耐 火 度		
遺物種類 (名稱)	複形鍛冶津 (含鉄製品)	量	厚 さ	52.0 mm	メタル校	錆化(△)	断面復原	—	カロリ一 放熱化		
観察所見	規則方向に長いもの、やや異形の複形鍛冶津、外縁上は鋸としか見えないが、通過X線像には津の中核部に棒状の鉄製品が含まれており、結果的には、この内部の鉄製品が片側に沿って鋸が形成されていたことがわかる。中核部の鉄製品は、幅5mm前後の、わずかに反りを持つ鍛造の丸なもので、上手側が欠損している。下手側の端部から1.2cmほど上手側に向かった位置にかすかに開いた段があり抜けているようにも見えるが、津側の気孔などに影響されて、そうはっきりしたものではない。また、津下手側の端部まで鉄製品が伸びており、上手側に比べて、箱型に細くなっていることがわかる。幅は3mmほどとなる。横断面形は不明ながら、鍛造が棒状にきれいに伸びていることから見て、箱型の構造を持った完成された鉄製品の可能性が高い。周りを取り囲む津は上下面が複形鍛冶津状で、左右の側面の一部と上手側が板状となっている。破面数は4を数える。下手側が前方側にふくらみを持っているのは、本來の複形鍛冶津の側面寄りを示すもので、上手側に向かい細くなっているのは、左左の津部が欠落したためと考えられる。津質はやや密度が低く、内部には気孔が数多い。下面是浅い鉢を示す。色調は表面地とも濃茶褐色。										
分析部分	規則端部1/5を直線状に切断し、津部と内部の鉄製品の両方を分析に用いる。残材返却。										
備 考	鍛冶炉で鉄製品を加熱中に、灰床に形成されていた津中に作業中の鉄製品が落込んでしまったものであろうか。鉄製品側の透過X線像からみて、真鍮などではない。むろん、分析資料No.8の鉄錠と極めて類似した製品としての特徴を持っているということが言える。右若の出土位置は放メートル程度の接近した出土位置で、いずれも掘立柱建物の柱穴、または周辺土坑という出土条件である。本資料中の鉄製品が斜状ではなく、錐身から半球にかけてとみられる点は、分析資料No.8の完形の鋸と極めてよく似ているということが言える。各々、放熱としての単歩の製品と複形鍛冶津中に落ち込んだ真鍮の可能性が強めで強いということから、再者が分所対象として選択されている。本遺跡周辺で放熱(しかも前代の古墳時代後期の鉄製品)を素材とする鍛冶が行われていた証拠を示す可能性が大きい。										



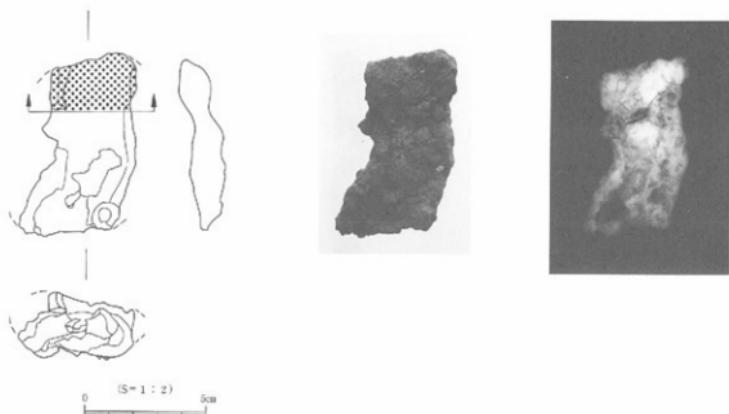
分析資料番号 8

出土状況	道跡名	調査図上取場遺跡	遺物No	28	(未との通し番号)	84	分 類 度 E.P.M.A. X線 分析 断 面 観 察 X線 透 射 化 学 分析 試 料 記 号	項目	津 メタル
	出土位置	掘立柱建物 3	時期: 桁挑	8 貴紀: 出土土器					
試料記号	検 鑑: SUW-8 法	長 径 20.0 mm	色 調	表: 濃茶褐色	遺存度	完 形	マ グ ロ 錆 鉛 錆 度 E.P.M.A. X 線 分析 断 面 観 察 X 線 透 射 化 学 分析	マ グ ロ 錆 鉛 錆 度 E.P.M.A. X 線 分析 断 面 観 察 X 線 透 射 化 学 分析	
	化 学: —	幅 径 132.0 mm		地: 黒褐色	破面数	0 (2)			
	放射化: —	厚 さ 13.0 mm		磁着度	3	前含浸			
遺物種類 (名称)	鉄製品(鍛造品、鍛)	重 量 26.0 g	メタル度	錆化(△)	前面樹脂	—			
分析部分	短軸端部寄り 1/6 を直線状に切断し、鉄製品として分析に用いる。残材返却。接着はセメダインによっている。								
備 考	細身の両端を持つ片刃の鎌である。鉄鎌としては古墳時代後期に多い形態で特に特殊とは言えないが、むしろ、分析資料No.7に含まれている鉄製品と類似する点から、分析資料として選択されている。鎌単体であれば、掘立柱建物に保管されていた可能性しか持たないが、分析資料No.7が複数鍛冶済みに沿って埋め込まれていて、両者のが掘立柱建物に関わる鍛冶、又はリサイクルを示す可能性が大きいという面で、特に注目される資料である。逆に分析資料No.8の鉄鎌が特に痛んでいるというよりも、完成された形成を示している点は、分析資料No.7とより強い関連を疑わざるを得ない。鍛冶素材や加工技術の一端を特定できる鍛冶工房の調査例は比較的少なく、地域での鍛冶の在り方をおさえられるという期待を持つ。(遺跡周辺は会見街推定地である。)								



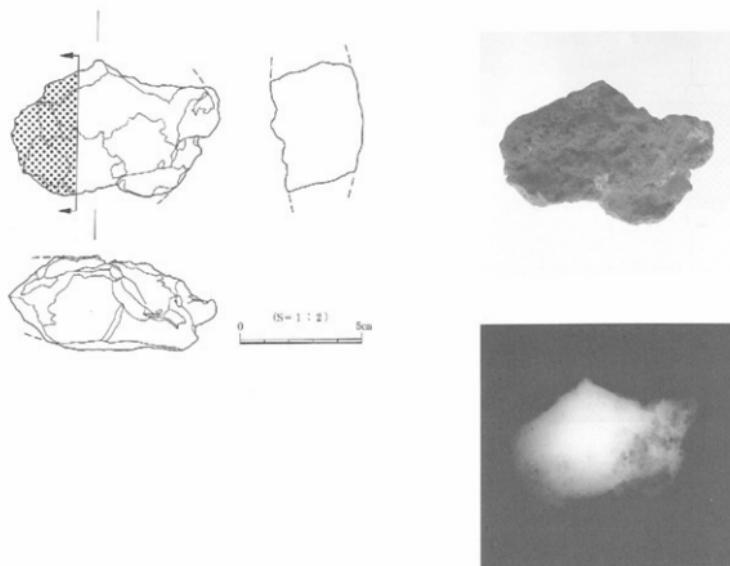
分析資料番号 9

出土状況	遺跡名	調訪西土取場遺跡		遺物No	35	（県との差し番号）	91	分 析 部 分 マ ク ロ 学 法 P M A X 線 照 化 学 火 度 ガ ロ リ ー 新 花 X 線 透 過	メタル	
	出土位置	北2区		時期：振撻	8世紀：出土土器					
試料記号	検 鋏： SUW-9	法 規 格	長 広 47.0 mm	表： 濁茶褐色 色 調 地： 黒褐色	遺存度	ほぼ完形				
	化 学： —		幅 径 75.0 mm		破面数	2				
	放射性： —		厚 さ 27.0 mm		磁着度	4	腐食浸	—		
遺物種類 (名称)	楕円形鍬治済 (細小・含鉄)	量	重 量 65.0 g	メタル度 H (○)	所面樹脂	○				
観察所見	短軸端部に長手の不規則凸筋をした楕円形鍬治済。葉部に小破面を持つが、ほぼ完形に近いものと考えられる。含鉄で放射割れが進み、分解しきている。上手側は普通の楕円形鍬治済様の端部形状を示すが、下手側は並んだ鋸状に変形している。左右の葉部に破面があるのは、部分的に津が薄くなっていたか気孔が多いために欠落したものか。下面は浅い皿状で、大小の不規則な本焼痕が点在する。鍬治済の切削部にはほとんど接着しておらず、刃床面上の粉灰層で支えられた形で形成されている。透過X線像では含鉄部がまとまって存在せず、津中に鉄がほぼ散った形で含まれている。津中の気泡はやや点在して、外側に比べて少なめかと判断される。色調は表面の酸化皮膜が渋茶褐色から茶褐色で、放射割れの破面は黒褐色となる。									
分析部分	短軸端部 1/3 を直線状に切断し（放射割れから折り取っても良い）、津部を中心に分析に用いる。残材所面に樹脂微粒。残材還元。									
備 考	下手側の根部の形状が乱れているのは、鍛冶具などで二次的な力が加わり変形したものか。本遺跡からは、やや不定形の楕円形鍬治済の出土が目立ち、北2区や北4区などからも似た傾向を持つが出土している。また、津の形状や大きさが一定せず、バラバラな傾向を持つことも特徴の一つであろう。あるいは、これが鍛冶素材のバラツキを示すものか。									



分析資料番号10

出土状況	遺物名		御訪西土取場遺跡		遺物No	43	(系との適し番号)	99	分	項目	津	メタル
	出土位置	北2区3層	時期: 根拠	8世紀: 出土土器						マクロ	○	○
試料記号	検 級:	SUW-10	長 径	86.0 mm	色 潤	表: 黒褐色~黒茶色 裏: 黄褐色~灰褐色 地: 黑褐色~灰褐色	遺存度	破 片	後 縫 縫 E.P.M.A.	度	○	○
	化 学:	SUW-10	短 径	55.0 mm			破面数	5		X線回折	○	○
	放射化:	—	厚 さ	39.0 mm			糙着度	2		火 花	—	—
遺物種類 (名称)	複形鍛冶鋤(中)	量	重 量	222.0 g	メタル度	なし	前含浸	—	新	ガロリ一 放熱化	—	—
観察所見	平面、不規多角形をした密度の高いしっかりした複形鍛冶鋤。上下面是基本的に生きており、短軸側の両端部と左側部が鉋向となる。破面数は5を数える。上面は気孔の露出した大きな波状の面で、わずかに5mm大前後の不規則が確認される。右側部は一部が削れており、その削れ目を境に、右下手側が一段深んでいるのは人為的な変形であろう。下面は緩やかながら複形で全面に鍛冶加の型床が点々と貼り付いている。如唐土はわずかに構造質を含む粘土質で、底面の中央部に向かい側面から灰色が強くなる。津は密度が高く、破面の気孔はやや少ない。上面の表皮沿いはやや気孔が多くなる。下面に削た厚さ5mm程度の範囲は如唐土と反応した洋部で、やや粘土質気孔。津全体の色調は、表面が茶褐色から黒褐色。地は黒褐色となる。											
分析部分	長軸端部1/4を直線状に切断し、津部を分析に用いる。残材返却。											
備 考	中京の複形鍛冶鋤の中核部から右側部にかけての破片と推定される。中核部寄りの厚みは3.5cmほどで、津部の密度は高く、本道路出土品としては最も精良鍛冶鋤であるが、鍛錬鍛冶鋤を否定するものではない。むしろ、分析資料No.1、9、11などとの形態や質感の違いが素材や鍛冶工程に加えて、対象金属の違いに結びつくのかどうか、という意図をもって分析資料として組み合わせている。											



分析資料番号11

出土状況	遺跡名		調査西土取場遺跡		遺物No	58	〔県との差し替等〕	114	分	項目	洋	メタル									
	出土位置		北4区 3層				時期：根拠														
試料記号	検 薦：	SUW-11	長 径	46.0 mm	色 質	表面：漬蒸褐色 ～茶褐色 地：～黒褐色	遺存度	破 片	分析	マ ク ロ 極 端	○										
	化 学：	SUW-11	幅 径	47.0 mm			破面数	2		E. P. M. A.											
	放射化：	—	厚 さ	25.0 mm		磁着度	3	前含浸		X 線回折 化 学 分 析	○										
遺物種類 (名称)	範形鍛治滓 (極小、含鉄)		重 量	46.0 g	メタル度	銹化(△)	断面樹脂		分析	触 火 度											
	観察所見		上下面や内部にも数多くの木炭痕を残す。極小の範形鍛治滓破片。瓦無部に小破片を持つ以外はほぼ完形に近い。破面数は2を数える。木炭痕の大きさは、上面や内部のものが1.5cm以下であるのに対して、下面に残るものは5mm大前後のものが多く、鍛冶炉の炉床上の粉屑に支えられた形で滓が形成されていると見られる。色調は表面地とも薄い酸化土砂に覆われているためか、漬蒸褐色から茶褐色となる。			X線透視			カロリー 吸 制 化												
分析部分	長軸埋部1/2を直線状に切削し、洋部を中心に分析に用いる。残材返却。																				
備 考	側部や内部にも木炭痕があり、不規則な形状となっているのは、滓量の少ない範形鍛治滓のうちでも最終工程に比較的多い特色である。分析資料No10の範形鍛治滓とは、洋の形態や密度が大きく異なる。両者は遺跡内における鍛治の工程差を検証するために分析資料として選択されている。非鉄金属の部分もあるいは掩形を形成せず、木炭痕の間に広がったような形態を持つものがあるが、本資料は鍛業冶に伴う可能性が高いものとして見ておく。透過X線像には、気孔の多い均質な滓が広がっている。																				

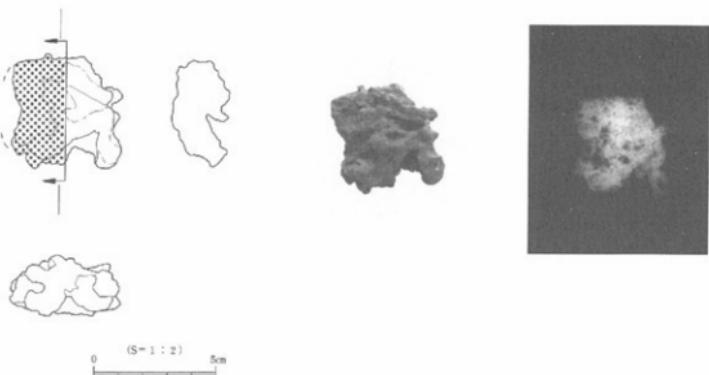


表11 諏訪西土取場遺跡鉄関連遺物観察表

構成 No	遺 物 No	出土位置	遺 物 名	計測表(cm)			重量 (g)	磁 着 度	メタル 度	備 考
				長さ	幅	厚さ				
57	1	土坑1	楕形鐵治滓(小・半溶解石付き)	7	6.1	5.2	132	2	なし	分析資料No1 分析資料詳細観察表参照。
58	2	土坑1	楕形鐵治滓(極小・含鉄)	5.5	3.6	1.5	25	2	鈎化△	平板な極小の楕形鐵治滓。構成No1と同様粘土質主体。破面は左側部に集中。
59	3	土坑1	粘土質溶解物(鐵冶系)	1	1.5	0.9	1	1	なし	粘土質溶解物の小片。右側部のみ破面となる。下手側は黒色ガラス質。
60	4	土坑1	粘土質溶解物(含金属粒子)	1.7	2.2	2.4	4	1	なし	分析資料No2 分析資料詳細観察表参照。
61	5	土坑1	粘土質溶解物(鐵冶系)	2.2	2.7	1.6	6	1	なし	破面に囲まれた粘土質溶解物破片。上面のみ生きており、やや流動状。構成Noの肩部破片か。
62	6	土坑1	鉄製品(鐵造品、放鉄?)	2.5	4.2	2.3	20	4	HIO	分析資料No3 分析資料詳細観察表参照。
63	7	土坑1	鉄床石?	12.7	13.3	3.2	759	1	なし	大形の軋石の表面破片。側面部は破面で、下面が剥離面。打痕は上面左側部にあり、上手側肩部のみ被熱してわずかに吸炭する。鉄床石の可能性を持つか不明。石質は安山岩。
64	8	土坑1	被熱石(道具石?)	9.7	10.9	5.3	676	1	なし	全体に被熱したやや扁平な軋石。右側部が破面となる。上面に浅い打痕があり、わずかに滲が付着する。側部には打痕なし。石質は花崗岩。
65	9	土坑1	砥石	11.8	12	6.2	739	1	なし	自然石の軋石を利用した砥石破片。砥面は上面中央部のみで使用は甘い。側面3面と下面が破面。右上手側の肩部がわずかに被熱か。石質は安山岩。
66	10	土坑1	砥石	13.1	17.6	11.4	3,500	1	なし	上面から右側面、さらには上手側の側面にも砥痕を残す軋石利用の砥石。下面右側に破面がある以外は健全。砥痕は幅1~2cmの帯状で、最大長さ10cmほど。砥痕は亂雜で使用は甘い。石質は角閃石安山岩。
67	11	土坑1	砥石	27.1	23	16.4	9,900	1	なし	上下面と側面3面に砥面を持つ自然石利用の砥石。砥面は各面とも広く、皿状に陥る。母材は大形の軋石で、上面から右側部上半にかけて荒れた砥面が残る。またこの面には刃物傷が1ヶ所あり、砥石としては荒砥気味。石質は角閃石安山岩。
68	12	土坑2	砂鉄(遺跡、自然)	—	—	—	20.0	5	なし	分析資料No4 分析資料詳細観察表参照。
69	13	土坑2	鐵治滓(含鉄)	0.8	0.9	0.6	0.4	2	鈎化△	表面に鏽ぶくれの見られる鐵治滓片。本来は鉄部と滓部が半々程度のものか。
70	14	土坑2	鐵治滓(含鉄)	2.5	2.7	0.9	2	2	鈎化△	不整な薄板状をした含鉄の鐵治滓片。右側部が破面で、下面は木炭痕を残す剥離面。鐵治滓の炉壁等に接したものか。
71	15	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.1	1.9	1	2	2	鈎化△	小塊状の含鉄の鐵治滓片。上手側部に鏽ぶくれの影あり。一見、鉄製品を思わせる形態。
72	16	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.7	2.3	1.9	3	2	鈎化△	やや扁平で側部には鏽ぶくれが発達する含鉄の鐵治滓片。鏽ぶくれは貝殻状で、芯部に鉄部が広がっていたことを窺わせる。精鍛鐵治滓の遺物品の可能性もあり。
73	17	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.7	2	1.4	5	2	鈎化△	不定形板状の含鉄の鐵治滓片。滓部が広めで側部3面は破面となる。下面は剥離面。
74	18	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.6	2.4	1.3	5	3	鈎化△	扁平塊状の含鉄の鐵治滓片。下手側の突出部は大きく膨らんだ鏽ぶくれ。はっきりした破面を持たず、鐵治滓塊の遺物品の可能性もあり。
75	19	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.8	2.4	1.3	5	3	鈎化△	前者とやや似た傾向を持つ含鉄の鐵治滓片。上手側1/3は貝殻状の鏽ぶくれ。下手側の芯部にも含鉄部あり。下面は剥離面状。
76	20	土坑2	鐵治滓(含鉄)	1.6	2	1.3	5	2	鈎化△	分析資料No5 分析資料詳細観察表参照。

表12 諏訪西土取場遺跡鉄関連遺物観察表

構成 No.	遺 物 No.	出土位置	遺物名	計測表(cm)			重量 (g)	磁 着 度	メタル 度	備 考
				長さ	幅	厚さ				
77	21	土坑2	鍛治渾(含鉄)	4	4.2	3.2	37	4	鷹化△	全体に不規則で不定方向に突出部を持つ合鉄の鍛冶渾、または鉄製品破片を含む鍛冶渾。透過程X線像では一部が鍛造の鉄製品の可能性もある。故鍛冶渾を示すものか。
78	22	土坑2	鉄製品(鍛造品)	1.5	2.3	1.5	7	3	鷹化△	小塊状の鉄製品。全体に酸化皮膜に覆われており、見かけ上は鍛冶渾。透過程X線像では、内部に筋状にうねった小針状の鉄製品を含んでいる。分析資料No.3に含まれている小針と似た形状で、故鍛か。遺構は違うが類似品に注目される。
79	23	土坑2	鉄製品(未製品)?	2.1	3.1	1.5	14	4	L●	半円形の平面形を持ち、薄板状の鉄製品。一種の楔、または未製品か。厚みは右側に向かい徐々に薄くなる。メタル部が比較的健全。
80	24	土坑2	羽口(鍛冶)	5.7	6.8	4.9	115	2	なし	分析資料No.6 分析資料詳細観察表参照。
81	25	土坑2	羽口(鍛冶)	3.8	3.4	2.9	29	1	なし	鍛冶羽口の先端部破片。通風孔部の腹面がわずかに残り、小範囲に溶け付着する。被熱状態や胎土は分析資料No.6と似ており、同一個体か。
82	26	土坑2	砥石	11.4	10.1	7.5	1,110	1	なし	小塊状の砥石を利用した砥石。上下面と側面3面が砥面で、上面と上手側がよく使い込まれている。砥紙では無く、手持ちの上砥か。石質は安山岩。
83	27	掘立柱建物1	楕形鍛冶渾(小・含鉄)	7.3	4	2.2	52	3	鷹化△	分析資料No.7 分析資料詳細観察表参照。
84	28	掘立柱建物3	鉄製品(鍛造品、鑑)	13.2	2	1.3	26	3	鷹化△	分析資料No.8 分析資料詳細観察表参照。
85	29	北区 遺構面	鉄製品(鍛造品)	2.3	3.9	1.8	14	3	鷹化△	薄板の鉄製品破片が上下に2枚重なる状況。一方は長さ3.5cm、幅1cm強の薄板状。もう一方は長さ1.9cm、幅0.8mmほどの中形の鉄製品。端部片面が破損となっており、刀子または長頭の鋸歯の刃部分。
86	30	北2区	楕形鍛冶渾(極小)	3.3	3	1.9	18	2	なし	極小の楕形鍛冶渾の側面部寄りの破片。上下面が生きており、短錐部の側部と左側部が破損となる。本来の深さの厚みは1.9cmほど。
87	31	北2区	楕形鍛冶渾(極小)	3.6	2.7	2	18	2	なし	やや緻密な極小の楕形鍛冶渾。上下面が生きており、側面は全面破面。破面の気孔は少なめ。下面の一部に灰色に被熱した鍛冶渾のか底床が残る。
88	32	北2区	楕形鍛冶渾(極小)	2.8	4.5	2.5	33	2	なし	極小の楕形鍛冶渾の肩部破片。左側部が全面破面。厚みが2.5cmほどあり、小型の楕形鍛冶渾の可能性もある。側部の立ち上がりは比較的急角度。
89	33	北2区	楕形鍛冶渾(極小・含鉄)	2.2	3.6	1.8	14	3	鷹化△	内部に鉄片を含んでいる可能性を持つ極小の楕形鍛冶渾。上下面是生きており、側部に小破面が点在する。形態はやや特殊。遺構No.34と似た部分がある。
90	34	北2区	楕形鍛冶渾(極小・含鉄)	2.2	3.1	2.5	14	3	鷹化△	前者とよく似た不規則な形状を持つ楕形鍛冶渾。左側部に鉄製品を含んでいる可能性を持ち、細長く痩んでいる。上面は平坦気味で下面は突出する。内部にも含鉄部あり。
91	35	北2区	楕形鍛冶渾(極小・含鉄)	4.8	7.5	1.4	65	4	H○	分析資料No.9 分析資料詳細観察表参照。
92	36	北2区	鍛冶渾	2.5	2	1.1	7	2	なし	小塊状の鍛冶渾。側部に小破面が認められるが完形に近い。各面とも微細な木炭痕あり。上面は流動状で渾内部にも気孔が発達する。
93	37	北2区	鉄製品(鍛造品) 刀子	2.8	1.3	1.1	3	3	鷹化△	刀子の刃部または長頭鍬の刃部片。両端部で落屑しており、破面となっている。背側が平坦でやや厚みを持ち、刀子の可能性が大。
94	38	北4区	楕形鍛冶渾(極小)	3.3	2.6	2	17	2	なし	極小の楕形鍛冶渾の肩部破片。上手側の側面がシャープな破面となる。渾部はやや緻密ながら、気孔が不定方向に伸びていて。下面から下手側の側部は粉炭痕で、わざかにか床面上あり。
95	39	南1区	楕形鍛冶渾(極小・含鉄)	2.9	4	2	17	2	H△	極小の楕形鍛冶渾の中核部から側部破片。上手側と左側部が破面となる。上下面是平坦気味で、側部の立ち上がりが急。渾質は気孔が多く密度が低い。

表13 諏訪西土取場遺跡鉄関連遺物観察表

機 械 成 No	遺 物 No	出土位置	遺物名	計測表(cm)			重量 (g)	磁 石 着 度	メタ ル 度	備 考
				長さ	幅	厚さ				
96	40	南1区	鍛治済(含鉄)	2.6	3.9	1.9	20	3	鈎化△	不定形塊状の合鉄の鍛治済。内部に鉄片を複数含んでいる可能性あり。右側部に破面が突出する。やや比重が高く、鍛治済としては特異な形態。極小の楕形鍛治済のなりかかりの可能性もあり。
97	41	南1区	鉄製品(鍛造品?)	2.3	3.5	1.7	16	4	H□	内部に比較的しきりとした鉄部を残す鉄製品破片。傾面下手寄りに新め方向のヒビ割れが生じている。外周部は生きておらず本来の鉄製品名は不明。厚い鍛成土跡がとりまく。
98	42	南2区	鍛治済(含鉄)	2.4	3.7	1.2	12	3	鈎化△	極めて扁平な合鉄の鍛治済片。下面は皿状で左右の側部や上手側に小破面あり。7mm以下木炭痕が下上面に点在する。滓質はやや緻密。
99	43	北2区 3層	楕形鍛治済(中)	8.6	5.5	3.9	222	2	なし	分析資料No10 分析資料詳細観察表参照。
100	44	北2区 3層	楕形鍛治済(小・含鉄)	3.8	7.3	3.3	80	2	鈎化△	小型の楕形鍛治済の中核部から側部破片。左側部が上破面となる。上下面の中央部が突出する円盤型の断面形を持つ。下面下手側に幅2.5cmの縦状のくぼみあり。工具具の可能性を持つ。滓内には木炭痕も複数あり。密度が低い。
101	45	北2区 3層	鍛治済(含鉄)	1.9	2	1.5	4	3	鈎化△	小さな鍛治済片。平面形は不整三角形で上手側の側部に発掘時の道具による傷が残されている。下面は直線で、個体の立ち上がりが分かる。
102	46	北2区 3層	鍛治済(含鉄)	1.6	1.8	1.3	5	2	鈎化△	前者やや低た大きさの鍛治済。平面形は三角形で左側部が主破面。右側部は1cmを超える木炭痕があり、より人気な楕形鍛治済の側部破片の可能性もあり。部分的に酸化七砂が厚い。
103	47	北2区 3層	鍛治済(含鉄)	2.1	2.8	1	5	2	鈎化△	薄手で不規則な波状の全体形を持つ鍛治済片。上手側の側部に小破面あり。上面の小さな突起にはか墨上塗の粒子が点在し、表裏逆の可能性もある。右側部が一部突出する。
104	48	北2区 3層	鍛治済(含鉄)	2.4	2.9	1.2	9	2	鈎化△	鏡ややに端部が反った板状の鍛治済。上面が生きており、左右の側部に小破面あり。滓質は比較的緻密。下面は剥離面様で下手側に強烈に剥む。
105	49	北2区 3層	鍛治済(含鉄)	2.1	3.1	2	17	3	鈎化△	小さい割には比較の高い含鉄の鍛治済。完形品で右側部に新しい傷あり。内部に含鉄部が広く、放射割れが広がってきている。左側部上手には平坦な压痕があり。表裏逆の可能性もあり。
106	50	北2区 3層	鉄製品(鍛造品、放鉄?)	1.2	1.6	0.8	2	2	鈎化△	小針の足部からの鉄製品破片。上手側は硬直の可能性がある。下手側に突出する径5mmほどの方柱状の部分が足部先端部。
107	51	北2区 3層	鉄製品(鍛造品、放鉄?)	1.2	2.3	1.1	3	3	鈎化△	見かけ上は小さな鍛治済片。透視X線像には「U」字状に折れ曲がった鉄製品破片が明瞭に示されている。右側部に片側部の端部が破面として露出する。径4mmほどの丸棒状を示す。両端部が破面となっている。
108	52	北2区 3層	鉄製品(鍛造品、放鉄?)	2.4	2.6	1.7	9	3	鈎化△	イガイガした鍛治済様の外觀を持つが、内部には特異な形態を示す鉄製品が認められる。鉄製品は横倒しにしたハート形で、四部から直角方向に棒状の部分が伸びている。小さいバッフル状にも見えるが、具体的な鉄製品名としては不明。下手側の端部に津波部があるかもしれない。
109	53	北2区 3層	羽口(鍛冶)	3.5	5.2	4.8	52	2	なし	鍛治羽口の先端部破片。通風孔部は欠落し、下手側には鍛治済が1cm以上上の厚さまで付いている。本来の羽口の頭部と推定される。騎士は非常に粗い石美質の右肩を含む粘土質。
110	54	北2区 3層	羽口(鍛冶系)	3.9	3.3	2.2	26	2	なし	鍛治羽口の先端部破片。通風孔部は欠落し、先端外側からかなり黒色ガス化している。外面にはやや紫紅色の表皮をもつ津波部が重ねられている。本来の羽口の左側部先端部。
111	55	北2区 3層	粘土質溶解物(鍛冶系)	2.9	3.6	3.5	17	1	なし	粗い石美質の石粒が点々と残る粘土質溶解物。全体が発泡して軽量となる。下面には木炭痕あり。
112	56	北2区 3層	砥石	5.8	8.1	4	198	1	なし	3面に砥石を持つ複形に飽和された砥石破片。短軸の両端には破面があり、下面は剥離面となる。荒砥石で右質は比較的質のよい花崗岩質。
113	57	北4区 3層	楕形鍛治済(小・含鉄)	4.1	5	2.9	61	3	鈎化△	小型の楕形鍛治済の中核部から側部破片。全体に厚板状で、側部に凸凹が目立つ。下手側の側部には合鉄のため大きな錆ぶくれの欠けが生ずる。本来の楕形鍛治済の1/4程度の破片か。
114	58	北4区 3層	楕形鍛治済	4.6	4.7	2.5	46	3	鈎化△	分析資料No11 分析資料詳細観察表参照。
115	59	南2区 3層	鉄製品(鍛造品) ?	2.5	4.9	2	24	3	鈎化△	酸化七砂に強く覆われた短い方柱状の鉄製品。透視X線像で見ると、上手側のふらん部分は酸化七砂で、一部に錆びの跡の混在物がある。全体となるのは平ばら下手側にかけてで、長さ3.3cm、幅1.2cm前後の濃部が丸くなれた鉄製品または鉄塊が認められる。一部に錆斑痕らしきものがあるが、かなり不明瞭。

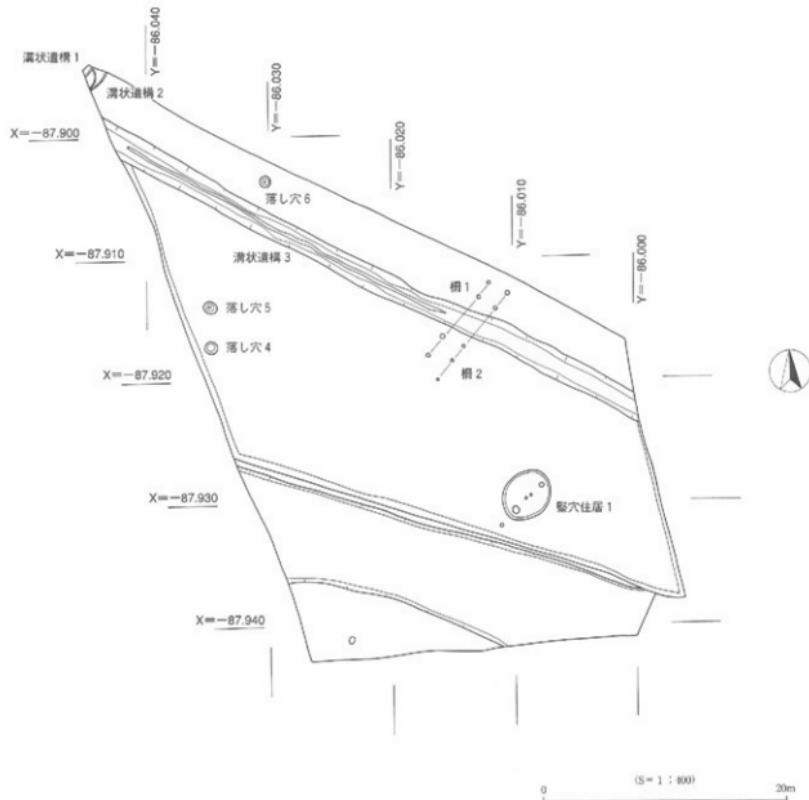
表14 諏訪西土取場遺跡主要要素一覧表

	分析資料	製 錬		精 錬		鍛 錬	
		高	中	低	前半	後半	前半
( ) 内はT.O.							
分 析 資 料	鉄 淚	SUW-5		SUW-7 SUW-10 (2.74) SUW-11 (1.10)			SUW-1
	含 鉄 鉄 淉					SUW-9	
	鉄塊系遺物				SUW-3		
	砂 鉄	SUW-4					
	鉄 製 品						SUW-8
分析資料内訳	全11点：製鍊滓1、椀形鍛冶滓4、椀形鍛冶滓（含鉄）1、鉄塊系遺物1、鉄製品1、羽口1、炉材破片1、砂鉄1						
（出土資料）遺物情報	遺物全体構成比（総重量比）	総重量 1,345.4g : (製鍊滓 5 g (0.4%)、椀形鍛冶滓 493g (36.6%)、椀形鍛冶滓（含鉄）459.4g (34.1%)、鉄塊系遺物 20g (1.5%)、鉄製品 118g (8.8%)、羽口 222g (16.5%)、炉材破片 28g (2.1%)					
	（個体数比）	総個体数51 : (椀形鍛冶滓 7 (13.73%)、椀形鍛冶滓（含鉄）25 (49.02%)、羽口 4 (7.84%)、炉材破片 4 (7.84%)、鉄製品11 (21.57%)					
	鍛冶具	鉄床石 1 (759g)、被熱石 1 (676g)、砥石 5 (15,447g)					
遺構概要	土坑 1	平 面 規 模	長 3 m × 短 2.5m × 深 0.2m の不整形土坑				
		操業の内容	鍛冶作業に伴なって排出された鉄滓、鉄床石片などが出土している。				
		年 代	8世紀前葉～中葉に比定される（出土土器による）				
	土坑 2	平 面 規 模	長 5.2m × 短 4 m 以上 × 深 0.3m の楕円形土坑				
		操業の内容	土坑内からは、鉄滓、羽口、砥石が出土している。				
		年 代	8世紀後葉～9世紀初頭に比定される（出土土器による）				
	掘立柱建物 1	平 面 規 模	長 55cm × 短 40cm × 深 20cm の柱穴				
		操業の内容	掘立柱建物 3 の柱穴から鉄製品を含む鉄滓が出土。				
		年 代	奈良時代に比定される（周辺の出土遺物による）				
	掘立柱建物 3	平 面 規 模	長 50cm × 短 35cm × 深 80cm の柱穴				
		操業の内容	掘立柱建物 2 の柱穴内から鉄鎌が出土。				
		年 代	奈良時代に比定される（周辺の出土遺物による）				
遺跡の性格	・検出した土坑は、鍛冶作業に伴って生じた廃棄物を投棄したものと考えられる。 ・鍛冶炉遺構は未検出であるが、精鍊鍛冶滓と鍛鍊鍛冶滓の存在から、鍛冶作業を行っていたものと考えられる。 ・鉄製品の出土から、故鐵を利用して再利用鍛冶の可能性も指摘される。						

## 第5章 坂長米子道端ノ中遺跡の調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

調査地は、米子市諏訪から西伯郡伯耆町坂長にかけて所在しているが、試掘調査の結果や遺跡が立地する地形などから勘案すると、行政区画では分かれているものの明らかに諏訪西土取場遺跡と同一の遺跡として認識できるものであり、本来ならば遺跡名を1つに統一すべきものである。しかし、調査に際しては、行政区画が分かれるということもあり、便宜的に米子市諏訪に所在する遺跡を「諏訪西土取場遺跡」、伯耆町坂長に所在する遺跡を「坂長米子道端ノ中遺跡」として分けて調査を行った。なお、坂長米子道端ノ中遺跡は、発掘調査当初は「旧佐野川用水路跡」という遺跡名を付していたが、



第52図 坂長米子道端ノ中遺跡 1・2区平面図

調査の結果、旧佐野川用水路跡以外にも他時期の遺構が認められる複合遺跡であるということが判明したことから、1区の調査終了後に遺跡名を「坂長米子道端ノ中遺跡」に変更した。

調査は、重機により現耕作土（第1層）を掘削した後、人力により第2層の掘削を行った。調査区の東側約3分1の掘削が完了した時点で、第2層からビニール、プラスチック、ガラスなどが出土したことから、残りの部分についてはトレンチを設定し、改めて第2層の堆積時期を検討した。その結果、同様の遺物が出土したことから、第2層はほ場整備に伴う客土であると判断し、重機によりローム層近くまで掘削した後、人力によりローム層を検出し、遺構の検出及び掘削を行った。

検出した遺構は、検出状況の写真撮影を行い、土層観察用の畦を設定して掘削した。遺構埋土の堆積状況を写真撮影した後、土層図を縮尺20分の1で作成し完掘した。遺構完掘後は写真撮影を行い、任意に設定した5m画のグリッド杭を基にして、縮尺20分の1で図面を作成した。

第2層から出土した遺物については、グリッド毎に一括して取り上げた。また、溝状遺構3から出土した遺物については、上層と下層に大きく分け、層位毎、グリッド毎に一括して取り上げた。

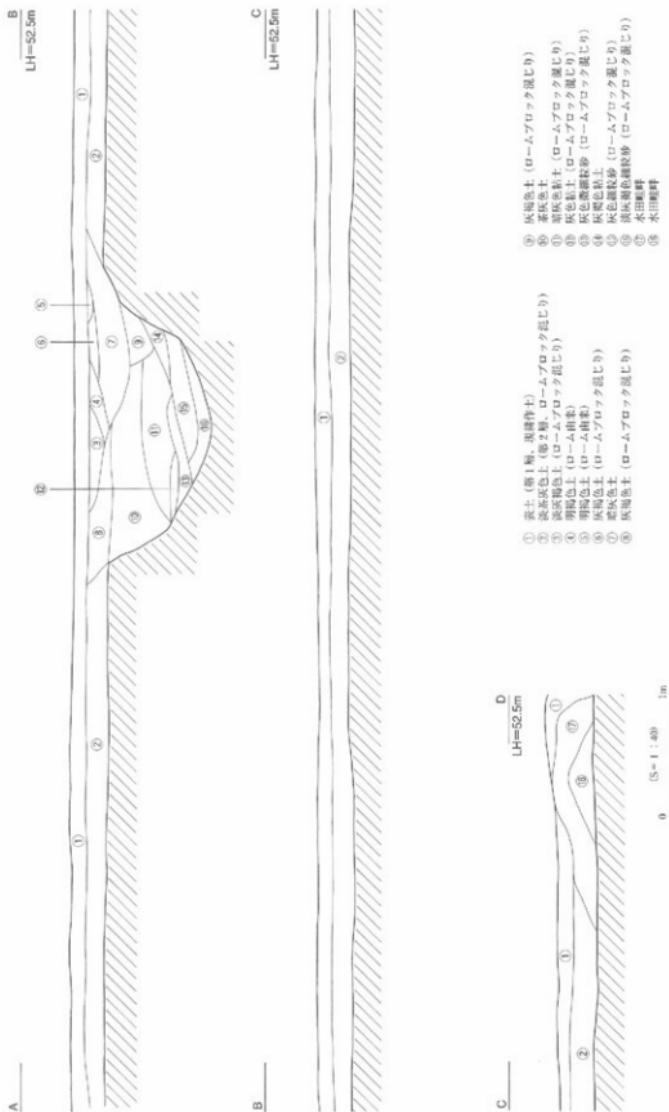
現場での写真撮影は35mmの一眼レフカメラを用い、モノクロフィルムとリバーサルフィルムで撮影した。また、これと併用してコンパクトカメラを用い、カラーネガフィルムでも撮影を行った。

また、坂長米子道端ノ中遺跡で検出した3基の落し穴については、遺構番号を諒訪西土取場遺跡で検出した落し穴との続き番号とした。

## 第2節 遺跡の層序

坂長米子道端ノ中遺跡では、ほ場整備による改変がローム層にまで及んでいるため、諒訪西土取場遺跡で認められる遺物包含層及び漸移層は存在しない。

基本層序は、現地表面から現耕作土（第1層）→ほ場整備に伴う客土（第2層）→ローム層となつており、遺構はローム層上面で検出した。



第53図 板長米子道端ノ中遺跡 1区東壁土層断面図

### 第3節 検出した遺構と遺物

#### 落し穴4（第54図）

落し穴4は平面形態が円形を呈し、規模は径1.1m、深さ1.3mをはかる。

埋土は淡茶灰色土（上層）、淡褐灰色土（中層）、淡灰茶色土（下層）の3層に分かれ、中層と下層はしまりがなく、ロームブロックが混じっている。遺物は出土しなかった。

#### 落し穴5（第54図）

落し穴5は平面形態が橢円形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸0.9m、深さ0.9mをはかる。

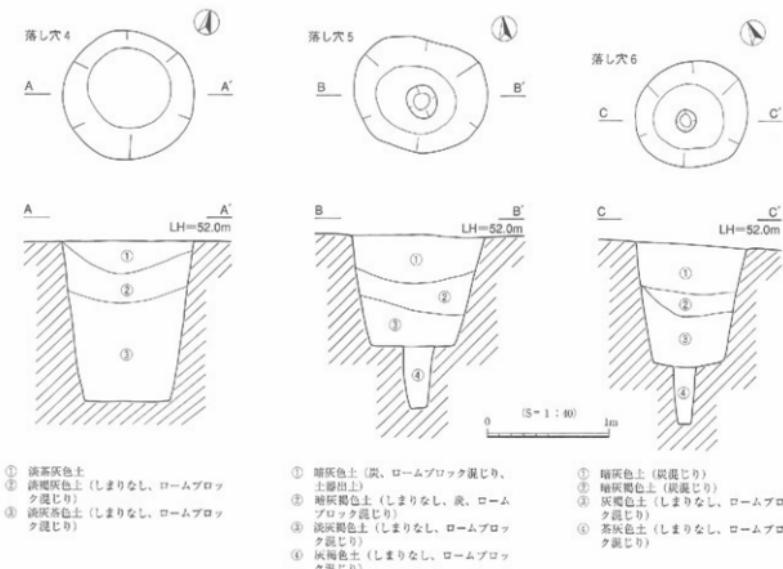
埋土は暗灰色土（上層）、暗灰褐色土（中層）、淡灰褐色土（下層）の3層に分かれ、いずれの層にもロームブロックが混じり、上層と中層には炭化物が混じっている。底面には28×24cm、深さ50cmのピットがあり、その埋土は灰褐色土の単層である。遺物は上層から縄紋土器片が出土地。

本遺構の時期は、放射性炭素年代測定の結果から、縄紋時代後期頃のものであると考えられる。

#### 落し穴6（第54図）

落し穴6は平面形態が円形を呈し、規模は径0.9m、深さ1.0mをはかる。

埋土は暗灰色土（上層）、暗灰褐色土（中層）、灰褐色土（下層）の3層に分かれ、下層はしまりがなく、ロームブロックが混じり、上層と中層には炭化物が混じっている。底面には20×16cm、深さ47



第54図 坂長米子道端ノ中遺跡 落し穴4～6 平断面図

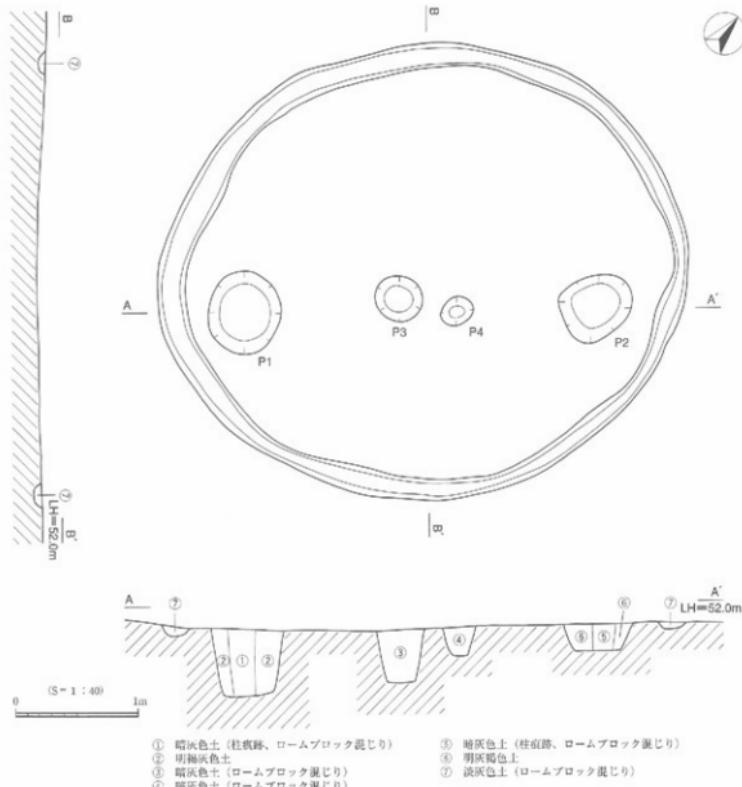
cmのピットがあり、その埋土は茶灰色土の単層である。本遺構内からは、遺物は出土しなかった。本遺構の時期は、放射性炭素年代測定の結果から、縄紋時代後期頃のものであると考えられる。

### 竪穴住居1（第55図）

竪穴住居1は削平が著しく周壁溝と柱穴が認められるのみである。平面形態は橢円形を呈し、規模は長軸4.3m、短軸3.7mをはかる。

主柱穴は2基（P-1、P-2）存在するが、住居跡の長軸の中心軸から南東側に少しずれた位置にある。また、主柱穴間に2基のピット（P-3、P-4）が存在する。

柱穴及びピットの規模はP-1（68×60-54）cm、P-2（61×51-22）cm、P-3（39×37-43）cm、P-4（28×22-23）cmをはかり、柱穴及びピット間距離は、P-1～P-2が2.9m、P-1～P-3が1.2m、P-3～P-4が0.5m、P-2～P-4が1.2mである。



第55図 坂長米子道端ノ中遺跡 竪穴住居1 平断面図

なお、P-1とP-2には柱痕跡が認められ、その規模はP-1が径22cm、P-2が径18cmをはかる。また、周壁溝は幅12~28cm、深さ2~9cmをはかり、その埋土はロームブロックが混じる淡灰色土の単層である。本遺構内からは、遺物は出土しなかった。

#### 柵1（第56図）

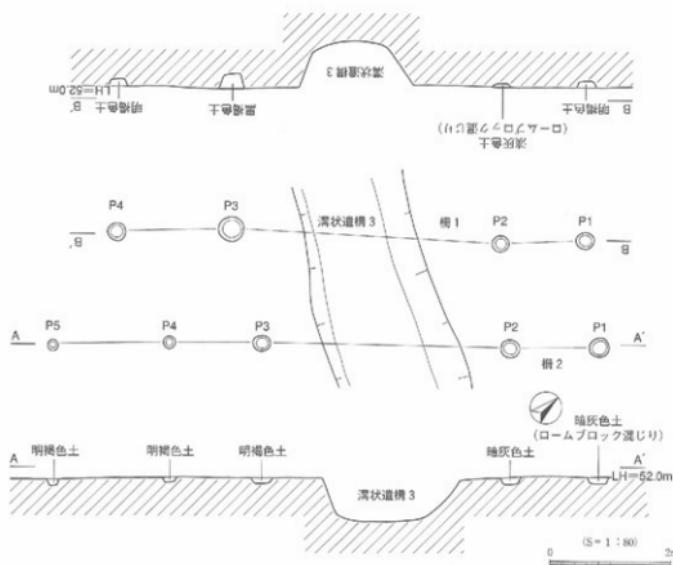
柵1は溝状遺構3によって改変を受けているが、5間（長さ8.0m）の柵であると考えられる。

各柱穴の規模は、P-1 (29×27-10) cm、P-2 (27×26-6) cm、P-3 (41×40-23) cm、P-4 (31×29-11) cmをはかり、柱間距離は、P-1～P-2が1.4m、P-2～P-3が4.4m、P-3～P-4が1.9mである。遺物は出土しなかった。

#### 柵2（第56図）

柵2は溝状遺構3によって改変を受けているが、6間（長さ9.2m）の柵であると考えられる。

各柱穴の規模は、P-1 (32×30-10) cm、P-2 (31×29-12) cm、P-3 (31×26-9) cm、P-4 (21×18-10) cm、P-5 (20×16-9) cmをはかり、柱間距離は、P-1～P-2が1.4m、P-2～P-3が4.1m、P-3～P-4が1.5m、P-4～P-5が1.9mである。遺物は出土しなかった。



第56図 坂長米子道端ノ中遺跡 柵1・2 平断面図

### 溝状遺構 1 (第57図)

この遺構は南西—北東方向にのびているが、北西側の肩を確認しておらず、段状の落ち込みである可能性があるが、ここでは溝状遺構 1として報告する。

溝状遺構 1は検出長0.9m、幅0.4m以上、深さ0.1mをはかり、埋土は灰色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

### 溝状遺構 2 (第57図)

溝状遺構 2は南西から北西方向へ湾曲しており、北西側では溝状遺構 1に切られている。

規模は幅0.1~0.7m、深さ0.2mをはかり、埋土は暗灰色土の単層である。

遺物は出土しなかった。

### 溝状遺構 3 (第58図)

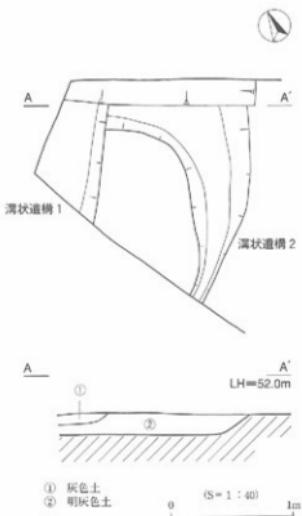
溝状遺構 3は北西—南東方向にのびる溝で、近世に開削された旧佐野川用水路である。

規模は検出長48.6m、幅1.6~2.3m、深さ0.7~0.8m

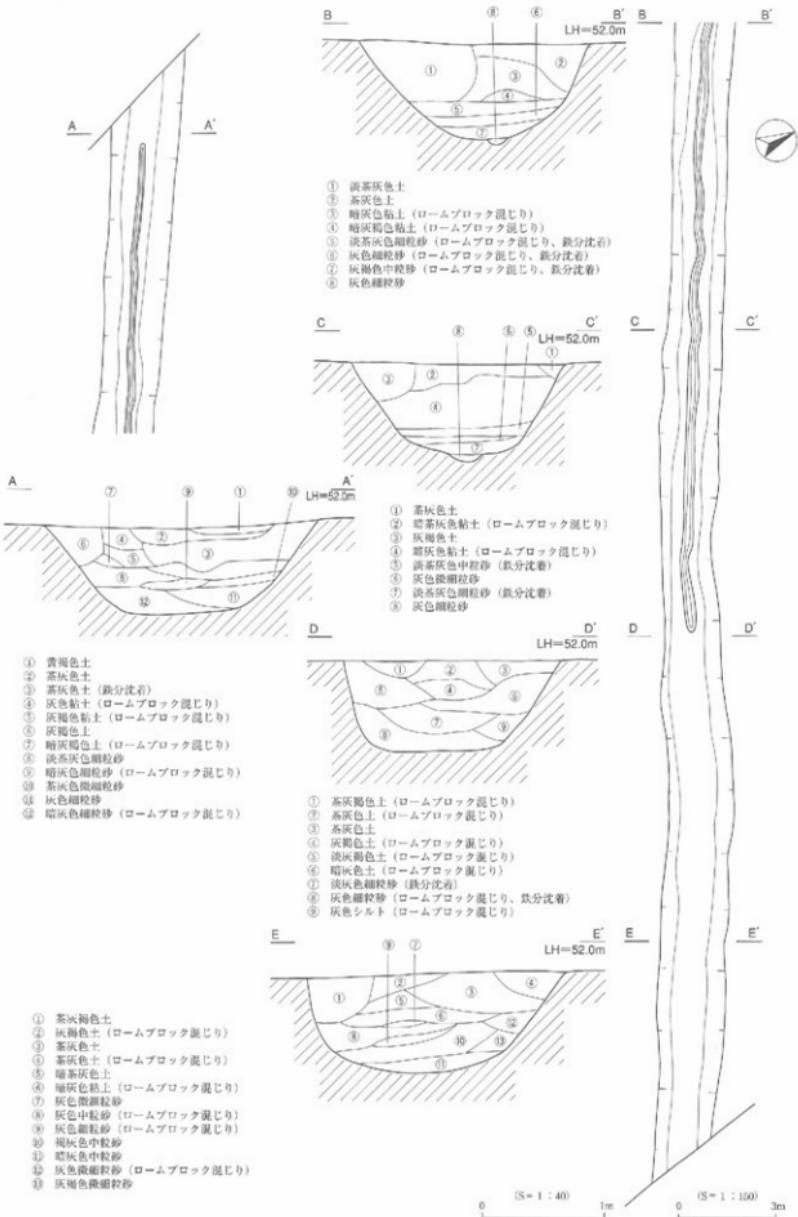
をはかり、底面のレベルは南東端では51.09m、北西端では51.0mで、その差は9cm程である。用水路の構造は素掘りで、護岸施設は認められず、ほ場整備による改変のため、両肩の堤、及び水田への取水口なども確認できなかった。また、底面には湯水時的小水流による溝状の侵食痕跡が認められ、その規模は幅15~30cm、深さ5~10cmをはかる。なお、壁面には大小の多数の生痕が認められる。埋土は大きく2層に分けられ、下層は水成堆積層で、主に微細粒砂~中粒砂が堆積し、底面直上を中心でビニール類やプラスチック、ガラスなどのゴミが多量に混じっている。上層は人為的に埋め戻したものと思われ、多量のゴミとともに樹木が混じっている。地元の人によれば、用水路の両岸には柳が植えられていたようで、ほ場整備の際に伐採され、用水路に投棄されたものと思われる。なお、現在でも調査地の東に隣接する水田の畔にはその名残と思われる柳の小木が1本存在する。

遺物はごく最近のゴミとともに上層と下層から出土している。遺物は大部分が明治以降のものであるが、近世後半のものが数点存在する。なお、近世後半よりも遡るものは存在しない。

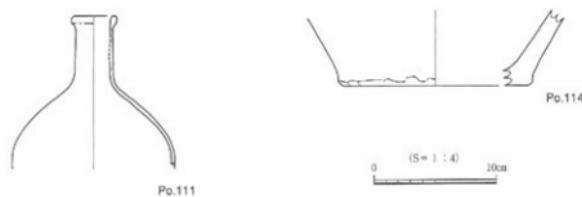
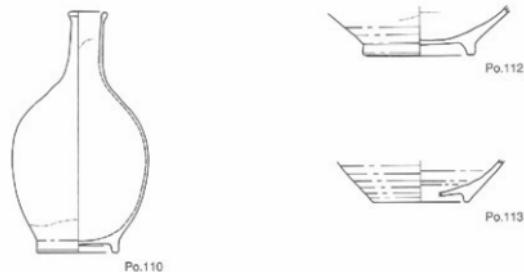
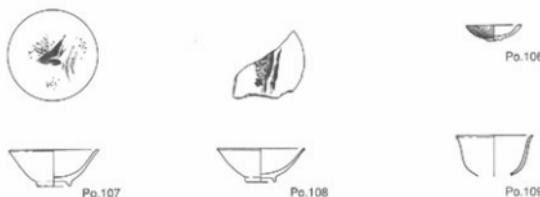
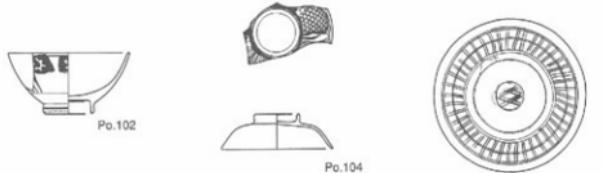
**出土遺物** 第59図のPo. 102~Po. 109は磁器である。Po. 102、Po. 103は碗で、Po. 102は高台の端部を鋭く削り鋭角に仕上げている。胎土は白いガラス質を呈する。Po. 103はコバルトの型紙刷りである。Po. 104は碗蓋である。Po. 105は上層から出土した皿で、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施され、高台は蛇ノ目四形高台である。Po. 106は型造りの紅皿である。Po. 107、Po. 108は磁器の盃で、Po. 107、Po. 108はすでに剥落しているが、見込みには色絵が施された痕跡が認められる。胎土はガラス質で瀬戸窯の製品か。Po. 109は陶器の盃で、淡緑灰色の釉がかけられて、表面には貫入が見られる。Po. 110~Po. 114は陶器で、いずれも在地産のものである。Po. 110~Po. 111は外面に暗緑灰色の釉をかけた徳利である。胎土はやや砂っぽい。Po. 112、Po. 113は壺か鉢の底部片、Po. 114は壺の底部片である。



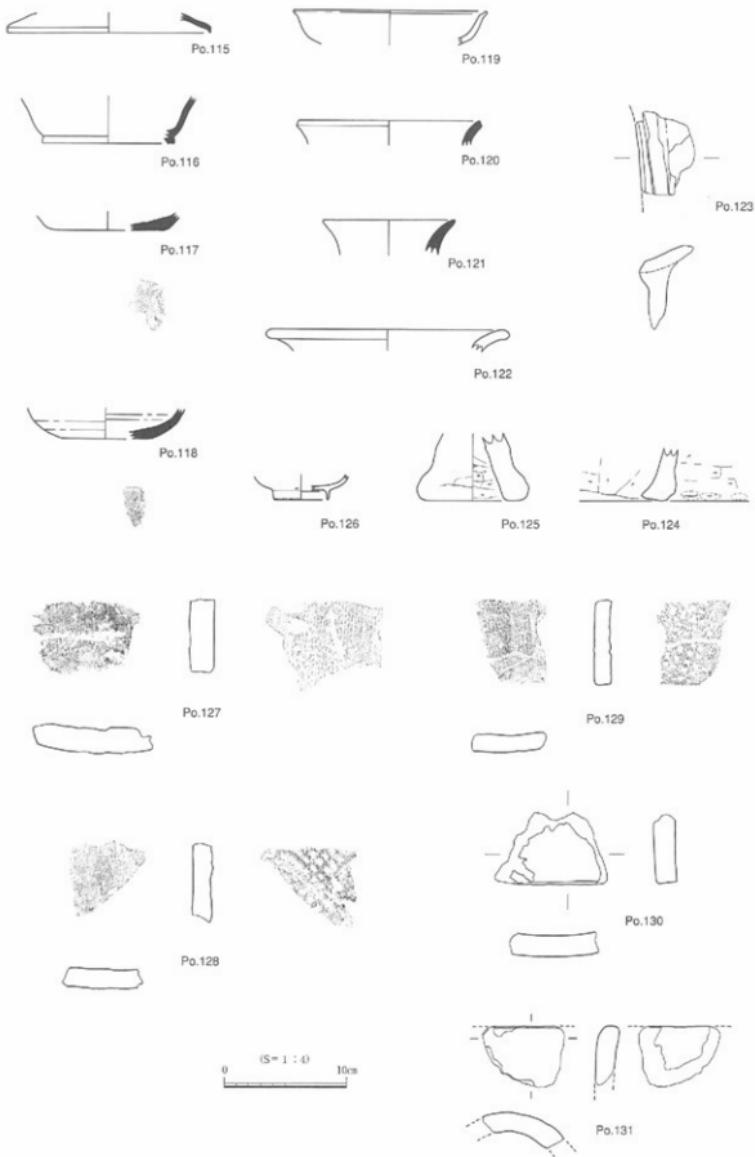
第57図 坂長米子道端ノ中遺跡 溝状遺構 1・2 平断面図



第58図 坂長米子道端ノ中遺跡 溝状遺構3 平断面図



第59図 坂長米子道端ノ中遺跡 溝状遺構 3 出土遺物図



第60図 坂長米子道端ノ中遺跡 出土遺物図

## 第4節 遺構に伴わない遺物（第60図）

Po. 115は須恵器の壺蓋、Po. 116～Po. 118は須恵器壺身で、Po. 115は高台が付くタイプ、Po. 117、Po. 118は底部外面に糸切りが施されている。Po. 119は口縁端部が屈曲する上師器壺身である。表面は赤色塗彩される。Po. 120、Po. 121は須恵器の壺口縁部、Po. 122は土師器の壺である。

Po. 123、Po. 124は移動式竈の破片で、Po. 123は側面の庇部、Po. 124は底部である。Po. 125は土製支脚の底部で、内部は中空となっている。Po. 126は磁器の碗で、表面は白灰色を呈する。

Po. 127～Po. 130は平瓦の破片で、Po. 127の内面には布目痕が認められ、外面には繩目叩きが施されている。Po. 128、Po. 129の内面には布目痕が認められ、外面には格子目叩きが施されている。

## 第5節 小結

旧佐野川用水路は日野川の取水口から坂中集落の東側までは比較的、記録や遺構が残っており、諸氏による研究がなされている<sup>(31)</sup>が、坂中集落の東側で南北に分岐する分水については、詳細な記録が存在せず、調査地付近を通る北側の分水はほ場整備によって付け替えられており、その位置については、ほ場整備前の地籍図や航空写真に見られるのみである。

今回確認した溝状遺構3は、位置的には場整備前の旧佐野川用水路の分水と合致するものであるが、底面直上から現代のゴミが出土しており、残念ながら開削時に迫るような古い時期の堆積は認められなかった。地元の人によれば、水田への灌水が必要な時期はかなり流れが速かったようで、古い時期の堆積が認められなかつたのはこのことが反映しているものと思われる。分水の規模については、調査地付近の記録は残っていないが、調査地から約1km下流の地点では、「川幅窄間」という記録があり<sup>(32)</sup>、溝状遺構3は後世の改変や、一部、浸食や肩の崩壊があるものの、この記録とほぼ一致する。

調査地付近では両岸に柳が植えられていたようであり、溝状遺構3の壁面には大小多数の生痕が認められ、当時の景観や環境を窺うことができるものの、今回の調査では、開削された詳細な時期<sup>(33)</sup>や開削作業の様子など、開削当初に結びつく状況を確認できなかつたのは非常に残念である。

註1 佐野川用水について論じたものには、以下のものがある。

吉次光郎 1952年 『佐野川と長者原』

佐野川土地改良区 1953年 『佐野川』

生田 範 1962年 『五千石風土記』

中曾治雄 1976年 『佐野川新設の沿革』

幡原敦夫 1979年 『佐野川』

岸本町誌編さん委員会 1983年 『岸本町誌』

羽田成夫 1986年 『佐野川 四年社会科資料 “きょう土をひらいた人々”』

日野川左岸土地改良区 1988年 『たんぽ皆出来』

中曾治雄 1997年 『新修佐野川（岸本町） 公民館郷土史研究教室』

「とっとり土地改良史」編集委員会編 2004年 『とっとり土地改良史』鳥取県土地改良事業団体連合会

註2 生田 範 1962年 『五千石風土記』

註3 前掲註2の文献には、北側の分水の工事は文久元年（1861）に着手し、慶応3年（1867）に通水したとある。

表15 坂長米子道端ノ中遺跡出土遺物観察表（復元値、反転・残存値は（ ）で表示）

図 No	層位・地区	器種	法量(cm)			色調	調整		備考	
			口径	底径	器高		内面	外面		
59	Po.102	溝状造構3下層	磁器、碗	(9.8)	3.9	5	白色	ナデ、無地	ナデ、染付	
59	Po.103	溝状造構3下層	磁器、碗	(7.1)	2.5	2.8	白色	ナデ、染付	ナデ、染付	型紙刷り
59	Po.104	溝状造構3下層	磁器、碗蓋	(9)	3.6	2.9	白色	ナデ、染付	ナデ、染付	
59	Po.105	溝状造構3下層	磁器、皿	12	8	3	白色	見込み輪ハギ	蛇の目高台	
59	Po.106	溝状造構3下層	磁器、紅飴	(4.2)	1.1	1.3	白色	ナデ	壓押	
59	Po.107	溝状造構3下層	磁器、盃	7.2	2.7	3	白色	ナデ、色絵	ナデ、無地	
59	Po.108	溝状造構3下層	磁器、盃	(8.7)		(4.4)	白色	ナデ、色絵	ナデ、無地	
59	Po.109	溝状造構3下層	陶器、盃	(6.2)		(3.4)	淡黄灰色	ナデ	ナデ	貴人
59	Po.110	溝状造構3下層	陶器、徳利	(2.7)	6.6	19.8	暗緑灰色	ナデ	ナデ、底部ケズリ	
59	Po.111	溝状造構3下層	陶器、徳利	3		(12.5)	暗緑灰色	ナデ	ナデ	
59	Po.112	溝状造構3下層	陶器、壺or鉢		(8.5)	(4.1)	淡赤灰色	ナデ	高台内ケズリ	
59	Po.113	溝状造構3下層	陶器、壺or鉢		(7.8)	(3.4)	淡緑灰色	ナデ	ケズリ	
59	Po.114	溝状造構3下層	陶器、壺		(15.2)	(6.2)	暗赤灰色	ナデ	ナデ	
60	Po.115	E・F-3、2層	須恵器、壺蓋	(16.6)		(2.1)	淡灰色	ナデ	ナデ	
60	Po.116	F・G-6、2層	須恵器、壺身		(10.8)	(3.9)	灰色	ナデ	ナデ	
60	Po.117	F・G-5、2層	須恵器、壺身	(8.8)		(1.5)	淡灰色	ナデ	ナデ、底部系切	
60	Po.118	B-11、2層	須恵器、壺身		(6.4)	(2.5)	灰色	ナデ	底部系切	
60	Po.119	F-4、2層	土師器、壺身	(15.7)		(2.8)	褐色	ナデ	ナデ	赤色塗彩
60	Po.120	C-4、2層	須恵器、壺	(14.7)		(2.1)	灰色	ナデ	ナデ	
60	Po.121	B-7、2層	須恵器、壺	(10.6)		(2.9)	暗赤灰褐色	ナデ	ナデ	
60	Po.122	E・F-3、2層	土師器、壺	19		(1.9)	褐色	ナデ	ナデ	
60	Po.123	F-4、2層	移動式壺			(6.8)	褐色	風化	風化	
60	Po.124	E-2、2層	移動式壺			(4.3)	褐色	ケズリ	ケズリ	
60	Po.125	C-10、2層	土製支脚		(7.8)	(5.5)	褐色	ケズリ	風化	
60	Po.126	F・G-5、2層	磁器、碗		(4.4)	(2.1)	乳白色	ナデ	ナデ	
60	Po.127	D-6・7、2層	平瓦	(8.1)	(9.8)	2.2	淡灰色	布目	縄目タタキ	
60	Po.128	C-4、2層	平瓦	(6.9)	(7.9)	1.7	淡灰色	布目	格子目タタキ	
60	Po.129	D-6・7、2層	平瓦	(6)	(9.3)	1.8	淡茶灰色	布目	格子目タタキ	
60	Po.130	C-4、2層	平瓦	(7.5)	(6.4)	1.5	淡褐色	布目	タタキ	
60	Po.131	E-2、2層	丸瓦	(5.1)	(5.4)	(4.6)	淡褐色	風化	風化	